勇者に女神の祝福を

芳野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者に女神の祝福を

【Ｎコード】
Ｎ６０１３Ｗ

【作者名】
芳野

【あらすじ】
勇者の手により魔王はようやく倒された。大陸中が喜びに沸く中、片田舎に住む見習いシスターは一人悩んでいた。勇者に求婚されてしまったのだ。結婚などしたくはないが、相手が相手なだけに簡単には断れない。どうしたら断れるか悩んでいる彼女の下に、突然の知らせが舞い込む。同じ頃、流民の蜂起や魔王の復活といった不穏な噂も流れ始める。ただの見習いシスターだったはずの主人公にも嵐が近づいていた……　※土日に更新予定。

1　勇者の凱旋と見習いシスターの憂鬱

「私と結婚していただけませんか」
金髪の男はひざまずいて、目の前に立っている愛しい女の手を取った。
女は唖然とした表情を浮かべ、困惑した。この体勢は第三代勇者の故事にちなんでいるとしか思えない。なんて質の悪い冗談なのだろうと、彼女はひざまづいた男の顔をまじまじと見つめた。しかし、男の端正な顔に浮かんだ表情は真剣そのものだった。
女は丈の長い質素なグレーのワンピースを身につけ、白い頭巾を被って髪を完全を隠すという修道女の服装をしていた。胸には見習いシスターの証であるペンダントを下げており、その中心の魔石は勇者のまとう女神の祝福を受けて薄く光っている。その光を視界の端で確認し、女はマズいことになってしまったと冷や汗をかいた。
男の夕闇を溶かしたような藍色の瞳と視線が絡み、彼女は思わず目をそらした。
「アルフォンソ様、あの、私はシスターなのですが……」
絞るように、女は答えた。シスターは結婚できない。男も当然そのことは知っているはずだった。
「まだ、見習いでしょう。それに」
男は少し意地の悪い笑みを浮かべた。その表情に女は幼なじみだった少年の面影を見て、はっと息を飲んだ。
「シスターは女神、ひいては女神の代行者である勇者に仕えるのが仕事のはずですね」
女は何と答えたら良いか分からず、空を見上げた。二人のいる遺跡はいつの間にか夕日に包まれていた。夕暮れ時の空は赤く染まり、鳥の群れが南の森に向かって飛んでいた。
??親愛なる女神様、どうか私をこの苦境からお救い下さい。
彼女は心の中で祈るしかなかった。

「で、どうしたの？　リータ」
テーブルに身を乗り出し、瞳をキラキラと輝かせている友人に、リータと呼ばれた修道服姿の女はうんざりとした表情を浮かべた。
「……また来るから、その時までに覚悟を固めておいて、と言われたわ……」
「ああ、すごいわ、リータ！　まさかあなたが勇者様と結婚だなんて！」
興奮する友人に、リータはムッとした表情で叫んだ。
「ちょっと、誰かに聞かれたらどうするのよ！　大体私結婚なんてしないわ！　テレーザ、分かってるでしょ」
「人払いはしてあるから大丈夫……でも、いいお話だと思うわ。素敵じゃない？　第九代勇者ゆかりの地で、第三代勇者の伝説にちなんだプロポーズ。これでときめかなきゃ女じゃないわ」
テレーザは頬を染め、うっとりとした表情を浮かべている。それはいかにもロマンチストのテレーザらしい反応で、彼女の美しい顔によく似合った表情だった。リータは頭巾を被った頭を押さえた。
「知ってるでしょ。私はシスターになって医学を学びたいの。結婚したらシスターになれないじゃない！」
「いいじゃない、相手は容姿端麗で家柄も良いし、しかも勇者よ。最高じゃない。もう働かなくても大丈夫よ」
「そうじゃない！　私は父さんみたいな医者になりたいの。勇者の嫁なんて冗談じゃない！」
リータはテーブルを打って力説した。この国では女が医学を習いたいと思う場合、シスターとなって教会の付属病院で働く以外に道はない。国軍の士官学校にも医学の課程は存在するが、基本的に女子の入学は許されていなかった。
「はいはい。まあ、リータは昔からそういう子よね」

優雅に紅茶を飲みつつ、テレーザは苦笑して言った。彼女の鮮やかな青い瞳に、困ったような色が浮かぶ。二人は子供の時からの親友だ。テレーザはリータがシスター見習いになった理由も、結婚したがらない理由もよく知っている。多少茶化してはみたが、リータが本気で困っているのをテレーザは知っていた。

「……大体、あの人は本当にあのアルなの？」

多少落ち着いたリータはテレーザに尋ねた。この疑問こそ、彼女が忙しい合間を縫って友人を尋ねた理由だった。

「父様に確認したけど本当よ。名前も違うから、私もパーティで聞いてビックリしたの。まさかあのアルが勇者になって帰ってくるなんてね」

テレーザは考え込むように目を伏せた。

十年ほど前、この地方の領主であるテレーザの父が一人の少年を連れてきた。少年の名はアルフレードといい、二人より一つ年上だった。テレーザの母方の親戚の子で、戦火を避けるため王都から疎開してきたという。彼はテレーザの家で一緒に暮らすこととなった。

医師であったリータの父とテレーザの父は友人で、同じ年に生まれたリータとテレーザは姉妹のように育った。二人はとても仲が良く、いつも一緒に遊んでいた。

また、リータはテレーザの『学友』だった。テレーザの一人で勉強するのは嫌という駄々に、領主はリータを学友とすることで応えたのだった。これはリータにとって、とてつもない幸運だった。彼女は歴史などの座学に高い才能を認められた。それがあまり面白くなかったテレーザも熱心に課題に取り組むようになり、二人は競うように知識を詰め込んだ。

少年がやって来たのはそんな時期だった。当然のように彼も二人と一緒に勉強するようになった。少年は素晴らしく聡明で、知識量も彼女たちを遙かに凌駕していた。時には家庭教師と論戦を交わし、

二人を唖然とさせた。二人は彼に追いつこうと日々勉強し、本を読みふけったが、結局彼にはかなわなかった。

しかし、ませているとはいえ所詮は年端のいかない少年で、相応に子供らしいところもあった。三人はそのうち親しくなって、時折村や周辺の森を一緒に探検するようになった。

「アルって、あんまり腕っ節の強いタイプではなかったよね」

少年を思い出し、テレーズが言った。子供の頃の彼は、後に勇者になるとは到底思えないような大人しい少年だった。

「そう。いつも本を読んでた。仲良くなってからは一緒に外で遊ぶこともあったけどね」

リータもうなずく。

「いたずらして、泣かせたこともあったよね」

リータの言葉に、あったあったとテレーザも笑う。

ある時二人は、森の中に彼を一人わざと放置するといういたずらを決行した。二人は彼が困っている様子を離れたところから観察した。今思えば悪趣味で、危険ないたずらだった。彼は二人の名を呼びながら森をさまよい歩き、やがて泣き出してしまった。仕方なくリータが飛び出して行くと、彼は安堵して泣きながら満面の笑みを浮かべた。リータはその表情にとてつもない罪悪感を感じたのだった。

テレーザには、アルフレード少年と勇者アルフォンソの印象がどうしても一致しなかった。自説を展開する時の自信に溢れた顔も、森の中で怯えていた顔も、先日村に訪れた第十四代目勇者と重ね合わせることができなかった。リータにしても似たようなもので、プロポーズ時に一瞬浮かんだ表情に、相手の言葉尻を捕らえてニヤリと笑う少年の面影がわずかに重なっただけだった。

「そういえば、勇者様って王女殿下と結婚するんじゃなかったの？」

テレーザの言葉に、リータは同僚や村人の娘らがキャーキャーと

騒いでいたのを思い出した。勇者と王女の恋物語。それは伝説の第三代勇者のロマンチックな物語を彷彿とさせ、国中の少女達の格好の噂話になっていた。

「ガンディーニ公の息女って噂も聞いたわ」

王女以外にも、多くの女性が勇者に熱い視線を送っていた。勇者は誰を選ぶのか。こんな田舎にも噂が届くほど、その行方に国中が注目していた。

だからこそ余計に、今回のプロポーズは彼女たちを困惑させた。王女や有力者の娘との話が出ているのに、なぜ勇者はリータにプロポーズをしたのだろう？

「どういうつもりなのかしらね。過去の例を考えれば、どう考えたって王女様と結婚した方が良いと思うんだけど」

テレーザの言葉に、リータはため息をついた。

「そうなのよ。大体、勇者は国王になれないと幸せになれないし、人並みに生きることもできないって言ってたのはアル自身なのにね」

リータはポツリと呟いた。彼女は胸に去来する苦い思いをかき消そうと、残った紅茶を飲み干した。

かつて少年が主張していたことも、彼女らの疑問を大きくしていた。彼は言っていたからだ。『勇者の運命は国王になるか、歴史から消えるか、どちらかしかない』と。それに則れば、勇者となった彼は王女と結婚して次期国王となるべきだった。二人の脳裏には、勇者を称える家庭教師にムキになって反論するアルの思い出が浮かんでいた。

「あれだけ勇者を否定するようなことばかり言っておいて、何で勇者になろうと思ったんだろうね……」

テレーザが言った。

「本当よね。言い方は悪いけど、勇者じゃなければこんなに面倒なことにはならないのに」

リータはお茶請けのクッキーをつまみ、頬張った。バターの香ば

しい香りと甘みに、彼女は癒される思いがした。
「見習いとはいえ、シスターは勇者に命令されたら断れないものね……」
テレーザの呟きに、リータは深くため息をついた。おかわりの紅茶を注ぎながら、リータはうんざりした気持ちを込めて言った。
「問題はそこよね。ただのアルなら、いくら将軍家嫡男とは言え、無理矢理シスターを連れ去ることもできないし」

女神に生涯を捧げたシスターの地位は、この国ではかなり高い。一度正式なシスターとなった女を無理矢理俗世に戻そうとすれば、国王ですら批判を免れない。翌年に予定していた誓願式を早めてもらい、見習いから正式なシスターになってしまえば、もうどんな男からの求婚も受け付けることはできない。??ただし、勇者を除いて。

勇者とは創世の女神の遺した剣をふるい、女神に代わって魔王を討つ、女神の代行者とされている。故に、女神に仕えるシスターは女神の代行者である勇者にも女神と同じく仕えなければならない。見習いとはいえシスターであるリータは、勇者の望みに応える義務を負っている。過去にも、勇者によって命を救われ、後に乞われて結婚したというケースがあった。

「……思い切ってシスターを辞めたら?」
「それじゃあ本末転倒よ。私はシスターとして医学を勉強したいの」
「でも、結婚なんてしたくないでしょ?」
テレーザの質問に、リータは困った顔で返答した。
「……シスター辞めて、諦めてくれると思う?」
「むしろ、自分と結婚するために辞めたと思われるわね……そして、父様に無理矢理差し出されるのがオチでしょうね」
リータを守ってくれる人はいない。彼女の両親はとうに死んでいる。テレーザもできるだけ力になりたいとは思うが、相手は将軍家、

しかも勇者だ。領主である彼女の父は喜んでリータを差し出すだろう。もちろん、それが彼女の幸せと信じて。

「どうやって断ったらいいんだろう……」

「……」

結局の所、テレーザにも良いアイデアなどないのだった。二人は押し黙った。

「……結婚も、悪くはないわよ？」

沈黙に耐えきれず口を開いたテレーザは、いたずらっぽい笑みを浮かべた。彼女は一年前に初恋の人と結婚したばかりだった。

「やめて」

リータははっきり言うと、頬杖をついてぷいっと顔を背けた。ごめんごめんと、テレーザが笑った。

「私じゃなくて、テレーザなら分かるのに」

リータは友人を見つめて言った。テレーザは子供の頃から可愛らしく、成長した後は村一番の美人と言われていた。実際、リータもそう思っていた。夏空のように青い瞳は長いまつげで縁取られ、鼻筋の通った顔は彫像のように整っていた。ゆるくウェーブのかかった亜麻色の髪は、彼女のシミ一つない白い肌を引き立てていた。テレーザの容姿は、リータの憧れでもあった。彼女は美しい友人の側にいられることを、内心誇りに思っていた。

リータは愛嬌があって可愛いとは言われても、美人とは言われたことがない。彼女は自分がテレーザの引き立て役であることは子供の頃から分かっており、むしろ喜んでその役を引き受けていた。

「なにそれ。私もう結婚してるのよ」

テレーザが笑う。ウェディングドレス姿のテレーザは綺麗だったと、リータは結婚式の様子を思い出した。

「だってテレーザは綺麗だし。彼が私を好きになる理由が分からないのよ」

私の髪はこんなだし……と心中で付け足し、リータは少し寂しげに笑った。彼女の笑みの意味に、テレーザは気づいた。

「リータは可愛いわ。私が男なら、あなたをシスターになんてさせなかった」

テレーザはにっこりと笑った。つられてリータも笑う。

「アルに見る目があるのは確かね。迷信を気にしないのもプラス十点」

「今回に限って言えば、気にして欲しかったなあ」

リータは空を見上げた。空には雲一つなく、穏やかな春の日差しが緑に包まれた庭園を照らしていた。

「本当、どうしたらいいのかしらね……」

テレーザの呟きに続いた二人のため息は、人気のない静かな庭に消えていった。

勤務交代の時間が近くなり、リータはテレーザの家を辞して教会に戻った。帰り際、リータはテレーザに、この一件は領主にも彼女の夫にも口外しないよう釘を刺した。友人が軽々しく話すタイプでないと知ってはいたものの、内容が内容であるため、彼女はこのことが誰かに知られることは極力避けたかった。

自室で簡単に身支度を調えると、リータは教会付属の病院へと急いだ。病院に入ると、この教会の司教であるシスターソニアが出迎えた。

「おかえりなさい」

ソニアの低く優しい声に、リータは微笑んで応えた。

「ただいま戻りました。遅くなって申し訳ありません」

「こちらなら大丈夫。今は病人も少ないし、最近は魔物に襲われる人も減りましたしね」

ソニアの微笑みに、リータは心安らぐのを感じた。

リータはシスターソニアを尊敬していた。彼女はどんな時でも微笑みを絶やさず、どんなひどい病人や怪我人でも最後まで諦めずに心から看病を行った。また、医術や看護の技術も高く、医師を目指

すリータにとっては良き師でもあった。ソニアの方も勉学に励み、病人の看護を熱心に勤めるリータを高く評価していた。ソニアはリータが正式なシスターになった暁には、王都にある大教会の病院で研修できるよう手配する心づもりだった。

「本当に、勇者様のおかげで平和になりましたね」

横からリータの同僚であるマリーナが言った。本当ね、とソニアが答えた。二人は楽しげに、この間村を訪れた勇者の話を始めた。

ソニアもマリーナも、リータの事情については何も知らない。リータの気持ちを知らない二人は、勇者を褒め称えている。マリーナに至っては頬を染めて、勇者の名をうっとりと語っていた。人の気も知らないで、リータは引き継ぎのノートの確認しながら頭の片隅で毒づいた。

この件について、できるなら教会の誰にも知られずに事態を収集したいとリータは思っていた。シスターソニアには相談したかったが、彼女がどう答えるかはリータには分かっていた。シスターが、勇者に背けと言うはずなどなかった。

彼女の背後では患者も加わり、女性達の勇者談義に花が咲いていた。その楽しそうな笑い声を聞きながら、リータは暗く重い気分に何とか耐えていた。

それから一週間が過ぎた。リータはこの間の勇者との一件が誰かに漏れていないか、村人や患者の噂に耳をそばだてていた。テレーザが秘密をばらすことはあり得ないとは思っていたが、あのシーンを誰かに見られていた可能性や、二人の会話を聞かれた可能性も除外はできなかった。そのため、リータはいつもはあまり加わらない井戸端会議にもそれとなく参加していた。

村はずれの水場で、集まった女達は水仕事をしながら楽しげに話していた。村人の話題は未だに勇者や国王のことが多かった。特に、娘達は相変わらず勇者のことばかり話していた。そもそも刺激の少ない村である。彼女らの反応はもっともだった。

この一週間で、勇者に関して様々な噂が多数流れていることをリータは知った。それは勇者の片腕である騎士もミステリアスで都で密かに人気だとか、魔王討伐に同行した女騎士が今度結婚するとかそんなたわいのないことから、勇者は実は前国王の隠し子だという不穏な噂まで、様々であった。

幸いなことに、リータと勇者の一件は、まだ誰にも知られていないようだった。リータはそのことに安堵し、密かにその場を離れようとした。

その時だった。マリーナが何か叫びながら走ってきた。女たちの視線が彼女に集中した。走ってきたマリーナは手に何やら握り、息を切らせていた。

「どうしたの？」

娘の一人が声をかけた。マリーナは息を整えると叫んだ。

「これ見て！」

彼女はそう言うと、持っていた紙を開いた。それは町から届いたばかりの瓦版だった。

「勇者様が、亡くなられたって！」

広げられた瓦版には、大きな文字で『勇者、死す！』と書かれていた。

2　突然の訃報と思い出の遺跡

『勇者アルフォンソ様、死去』

……昨日夕刻から行われていた晩餐会の最中、王城内に突如として魔物が来襲した。晩餐会は王の私的な催しで、勇者とその父である将軍ブルーノ公、及び大臣ガンディーノ公が招かれていた。勇者は果敢に応戦し、撃退することに成功した。しかし、不意を突かれたため重傷を負い、一日後に死亡が確認された。また、この戦闘の際、ブルーノ公とガンディーノ公も巻き込まれて死亡した。幸いなことに、国王陛下には怪我はなかった。国王陛下はこの不幸を悼み、三人の国葬を執り行うと発表した。また、バルディ王国全国民に対し、各教会で執り行う三人の追悼の儀に参加するよう呼びかけた……

突然の訃報を聞いてから三日。リータは連日届く勇者の訃報と関連記事を幾度となく読み返した。

アルが死んだ。この事実は彼女を混乱させた。彼のプロポーズをどう断るか悩んでいたリータにとって、このことは朗報と言っても良い。しかし同時に、女神に仕える身として、また何よりも幼なじみとして、純粋に彼の死を悲しむ気持ちもあるのだった。彼女はこの感情をどう表現したらよいか分からなかった。

「どうしたの？　暗い顔しちゃって？」

掲示板を見つめて物思いにふけるリータに、マリーナが話しかけてきた。

「勇者様が亡くなったのが残念で……」

リータはシスターとして無難な答えを言った。しかし、マリーナはニヤッと笑った。

「いいの、いいの、分かってる」

マリーナは全て分かっているという風にうなずいた。リータは訳

も分からず同僚を見つめた。
「勇者様のこと好きだったんでしょ」
マリーナの唐突な言葉に、リータは一瞬ヒヤリとした。慰めるように言葉を続ける同僚に、彼女は曖昧に笑った。マリーナは十七歳とリータより一つ若かったが、若い女らしく恋愛の話が大好きだ。村の誰それが付き合ってもうすぐ結婚するだの、三角関係がどうしただのと、放っておけば一日中でも喋っている。一体どこから仕入れたんだろうとリータが不思議に思うほど、村の人間関係に精通していた。
当然、勇者の話にも詳しかったので、リータは何度かマリーナにそれとなく勇者の話を聞いた。
「あなたが男に興味を持つなんて初めてだったしね。勇者様の話を聞くために、普段は参加しない噂話にもこっそり加わっていたし」
何でこんなことにばかり鋭いんだ！　リータは内心ため息をついた。
「格好良かったもんね……リサやアナも結構落ち込んでたのよ」
マリーナは大げさにため息をついた。マリーナはリータの暗い顔を、他の娘達と同じく、亡くなった勇者への淡い憧れと哀悼の意と解釈したようだった。彼女は誤解をあえて解こうとは思わなかった。
「ね、そろそろお昼よ。今のうちにご飯食べよう」
リータは話を続けたくなくて、話題を変えた。マリーナは少し物足りなさそうだったが、リータに賛同し、二人は共に教会内の食堂へ向かった。
昼食の間も、マリーナは勇者の話を続けたそうだった。面倒だったので、リータはマリーナ自身の恋について水を向けた。マリーナは嬉しそうに、今気になっているという男の話をし出した。それは少し前、足に怪我を負って担ぎ込まれてきた青年だった。彼はもう退院していて、最近はマリーナにデートの誘いや贈り物をしているらしい。頬を染めるマリーナを、リータはほほえましい気分で眺めていた。

マリーナはリータと同じく見習いシスターであるが、彼女は行儀見習いとして来ているだけだった。彼女の出身は教会のある村からは少し離れた町で、彼女はそれなりに裕福な商人の娘だった。

教会での奉仕活動は女子のたしなみとされており、お見合いや結婚にもプラスに影響する。マリーナのように教会で恋の相手を見つけることも多々ある。見習いシスターは必ずしも正式なシスターにならなくても良く、正式なシスターになるのは見習いのうち一割程度だった。ほとんどは結婚して教会を去っていくが、彼女らは教会の貴重な労働力だった。リータのいる教会にも全部で五人の見習いシスターがいるが、正式なシスターになるのは恐らくリータだけだろう。

正式なシスターとなれば、その出自に関わらず尊敬され、最低限の生活は保証される。しかしそれは、彼女らの自己犠牲にも近い献身に対する対価とも言える。シスターとなった女は生涯を女神に捧げなければならない。当然、結婚はできないし、俗世に戻ることも許されてはいない。戒律を犯した場合は、死を持って償わなければならない。また、昼夜を問わず奉仕活動をすることが求められる。各地の教会には病院、孤児院、学校などの福祉施設が存在し、シスターはそれぞれの適性によって各施設に配置される。

また、シスターには高い教養、知識、技術が要求される。日々研鑽を積み、己の知識、技術を磨かなければならない。正式なシスターになりたいと願う少女は多いが、その多くが厳しい世界であることを身をもって知り、教会を去っていくのだった。

昼食後、マリーナは持ち場へと戻った。リータの仕事は夕方からで、数時間休みとなっていた。彼女は薬草を採りに行くと同僚に告げ、森へと足を向けた。遺跡へと続く森の小道を進みながら、彼女はあの日のことを思い出していた。

？？二週間前。彼女の住むセラの村は、突然の勇者の来訪に沸いていた。魔王の脅威から大陸を救った救国の英雄が地味な田舎村に突然現れたのだ。聞けば、勇者は昔この村に世話になったことがあり、どうしても挨拶に来たかったのだそうだ。来訪は一応あらかじめ領主であるテレーザの父に連絡されていた。しかし、それも突然のことだったので、領主は急遽村を挙げての歓迎式典を用意した。

正直なところ、彼女は周囲ほど勇者に興味はなかった。勇者が教会を表敬訪問した時、リータは勇者を間近で見る機会を得ていた。勇者は背こそ高いが、彼女が想像していたほどがっちりとした体型ではなかった。しかし、そのきびきびとした動作は軍人らしく鍛え上げられたもので、袖からのぞく腕はとても逞しかった。顔も男にしておくにはもったいないほど整っており、常に微笑みをたたえていた。輝くような金色の髪をなびかせ、青い目には理知的な光が宿っていた。そして、腰には美しく輝く女神の剣を帯びていた。

本当に絵に描いたような勇者っぷりだなと、比較的冷めたリータですら思った。教会の中で、リータは一瞬だけ勇者と目があった。彼女がにっこりと笑って応じると、彼もうっすらと笑った気がした。彼女は噂の勇者を見られて満足し、式典には参加しなかった。

しばらく森の中を進むと、少し開けた場所に出た。薄暗い森の中から明るい場所に急に出たので、リータは日差しに目を細めた。

その空き地には、焼けた後のある古い石組みと建物の基礎部分が残っていた。それは三百年ほど前に壊され焼けた古い教会の跡地だった。教会が現在の場所に再建された後、黒い森にほど近いこの場所は放置された。村人はそれを遺跡と呼び、子供達の遊び場となっていた。リータ達も幼い頃は何度もこの場所で遊んだものだった。

この遺跡にはある言い伝えがあった。かつて、この国は魔王に追い詰められて滅亡の危機にあった。それを救ったのが第九代勇者であり、彼は仲間や国中から集めた勇士達と共に壮絶な戦いを繰り広げ、ついに魔王を倒し、祖国を守った。しかし、その際に深手を負

ってしまい、その怪我に苦しんだ挙げ句に死んでしまった。多くの人々が彼の死を悲しみ、以降、彼は悲劇の勇者と言われるようになった。

この遺跡に残るのは、その九代目勇者の伝説であった。彼は魔王との戦いの最中、一度この地方を訪れている。その時、この遺跡の場所で勇者はある娘と恋に落ちた。娘は勇者に付き従い、その後の苦しい戦いを共に戦ったのだという。しかし戦後、二人の仲は勇者の父である当時の国王によって引き裂かれてしまう。傷心の少女はこの地方に戻り、いつか会いに行くという勇者の言葉を待って、毎日この遺跡を訪れた。勇者が亡くなった日、彼の魂は光となってこの遺跡に落ちてきた。そして、娘の手を取り、黒い森へと消えたという。

勇者列伝には娘の存在もこの伝承も書かれてはいない。しかし、セラの村人はこれを真実と思い、語り継いできた。リータも幼い頃、この話を母から聞いた。

王国の南は、黒い森と呼ばれる大森林地帯となっている。遺跡は森の入り口でもあった。一般に、黒い森は危険な場所と認識されている。しかし、彼女の村では木材の入手や狩り、薬草の採取などのために、森へ入ることは当たり前のことだった。ルールを守り慎重に行動すれば、この森はそれほど危険ではない。リータも医師である父や薬師だった母と共に、幼い頃からこの森に出入りしていた。森は彼女の庭のようなもので、薬草の生えている場所はおおよそ把握していた。

必要な分量を採取し終え、リータは一息つくために遺跡まで戻った。薬草の入った籠を地面に置き、彼女は石組みに軽く腰掛けた。空は明るく晴れていて、時折小さな雲が名ゆっくりと横切っていく。新緑の匂いを運ぶ風に吹かれてぼんやりと物思いにふけっていたリータは、自然とあの日のことを思い出していた。

二週間前、勇者歓迎式典の翌日のことだった。日が沈む少し前、教会の薬草畑で一人水をまいていたリータの所に、巡礼用のフードを被った男が近づいてきた。男は彼女に挨拶すると、周りに誰もいないことを注意深く確認した。リータは少し警戒したが、フードを脱いだ男の顔に仰天した。それはまぎれもなく、勇者その人であった。驚いてシスターソニアを呼ぼうとした彼女を制し、彼は遺跡まで案内して欲しいとだけ短く告げた。

森の小道を歩きながら、勇者は彼女と目を合わせなかった。彼女が自己紹介しても、勇者はなぜか不機嫌そうに返事をしただけで、リータはかすかに不安を覚えた。ぎこちない空気を何とかしようと、彼女は勇者にどこで遺跡のことを知ったのか尋ねた。しばし黙っていた勇者だったが、やがて領主に聞いたという短い返事を返した。彼女は他にもいくつかのことを尋ねてみた。いつ頃この村にいたのかなど聞いてみても、勇者は短く返事を返すだけで会話は途切れがちだった。しかも、彼はますますイライラしているように見えた。

リータは自分が勇者に何か失礼をしているのではないか、気分を害するようなことを言ってしまったのではないかと思い黙った。いつの間にか重い沈黙が二人を包み、リータはキリキリと痛む胃を押さえて、早足で遺跡へと向かった。

遺跡へとたどり着いた勇者は、しばし周囲を眺めていた。リータは少し離れてその様子を見ていたが、早く帰りたくてたまらなかった。やがて勇者は彼女に向き直った。近づいてくる男に、彼女は何とか微笑みを絶やさずに相対した。

勇者はリータのすぐ近くまでやってくると、彼女をじっと見下ろした。男はリータより頭一つ背が高く、彼女は奇妙な圧迫感に襲われた。リータは後ずさり、逃げたいのを必死にこらえ、声を絞り出した。

「あの、勇者様、私に何か？」
リータの言葉に、男は押し黙ったままだった。リータをじっと見つめるその目に、彼女は内心怯えていた。
突然、勇者が口を開いた。
「私のこと、覚えていませんか？」
その言葉をリータはすぐに理解できなかった。戸惑うように視線を落としたリータに、男はふっとため息をついた。
「私はアルフレードです。……覚えていませんか？　リータ」
突然名前を呼ばれ、彼女の頭の中で幼い頃に共に遊んだ少年の顔が浮かんだ。
「アルフレード……アル？」
リータは驚いて顔を上げた。勇者は彼女の反応に、一瞬嬉しそうな顔をした。リータは記憶にある少年の顔と目の前の男を比較した。少年も確かに同じような金色の髪と藍色の目を持っていた。しかし、こんな顔だっただろうか？　彼女には二人が同一人物である確証は持てなかった。リータは判断がつかず、困惑したまま彼を見つめた。
「……やっぱり、分かりませんか……」
リータの反応に、男はがっかりしたような顔して肩を落とした。
「……」
斜め上を見てふっと皮肉な笑みを浮かべている男に、リータは戸惑いつつ、利発だった幼なじみの少年の影を見たような気がした。
「……昔、この森で君とテレーザと遊んだ帰り、私ははぐれて迷子になりました。困っていた私をリータが見つけてくれました。……覚えていませんか？」
そんなことあっただろうか？　リータは少し考えていたが、一つ思い当たることがあった。
「あ……もしかして、川遊びの帰りの？」
まだ少年がこの村に来て日が浅い時だったか、リータとテレーザは彼を森の中にわざと一人で放置したことがあった。彼は森の中の木々や花、動物が物珍しいのか、いちいち興味を示し、立ち止まっ

ては眺めていた。行こうと言っても中々動いてくれない彼にイラついた二人は、彼を一人放置し、その様子を楽しむことにした。結果、彼は泣き出してしまった。バツが悪くなった二人は、それがいたずらであることをごまかすため、先にリータが出て行き続いてテレーザを呼ぶという小芝居をした。幸い少年はそれがいたずらだとは気づかなかったようだが、少年の笑顔に二人はとても気まずい思いをしたのだった。

「そう、それです！　その時教えてくれたでしょう。ここの伝説を……」

嬉しそうに語る男に、かつて感じた罪悪感がぶり返した。今更いたずらだったとも言えず、リータは笑顔でごまかした。この人は確かにアルかもしれないとそう思った。

「アルが勇者様……」

リータの呟きに、勇者が反応した。

「そう、私は勇者になりました。それで、リータ、話があります」

微笑む勇者と目が合い、さすがのリータも顔を赤らめた。照れくささに目をそらすと、勇者は彼女の手を取って、ひざまずいた。

何事かと身を固くしたリータに、彼は思いもかけないことを告げた。

私と結婚して欲しいと？？

思い返しても、リータにはアルの気持ちが分からなかった。勇者が村を去る前にもう一度話をしようかと思ったが、彼はプロポーズの翌日には既に旅立った後だった。

彼女が最後にアルと会ったのは八年前、彼が村を出て行く時のことだ。士官学校へ入るという彼を、リータはテレーザと二人、いつまでも見送った。彼は確かに仲の良い友人だった。しかし、それ以上のものでは断じてなかったとリータは思う。テレーザも同じ見解だった。

もし彼が幼い日のリータを好いていたとして、勇者となった今、

彼女にこだわる必要もあるまい。噂の王女は美しく聡明という評判で、地位からしても勇者にとってまさに相応しい相手だろう。

なぜ私なのだろう？　リータはあの日からずっと考えていた。

しかし、勇者は死んだ。彼のプロポーズのことはリータとテレーザしか知らない。この問題は彼の死によって解決した。あの時彼女は混乱して、ろくに話すことさえ出来なかった。もっと話しておけば良かった。彼女は今になってそのことを後悔していた。

長いこと物思いにふけっていたリータだったが、日が陰ってきたのに気づき、教会へと戻ることにした。遺跡を背に歩き出したリータはふと立ち止まって振り返り、遺跡に向かって祈りを捧げた。

3　不穏な予兆と惨劇の始まり

リータが教会に戻る道を歩いていると、村の方から女が一人走ってきた。それは病院を手伝ってくれている村の女性だった。女はリータを見つけると駈け寄ってきて、狩人が魔獣に襲われたと告げた。手伝いが必要なので、すぐに戻るよう彼女を呼びに来たという。二人は走って教会に戻った。

魔王が倒れたのに、どうして魔物が出るの？　彼女は混乱しつつ、手を洗い着替えた。

手早く身支度をしたリータが診療室に入ると、猟師らしい数人の男が血まみれの男を押さえているところだった。男の全身には切り裂かれたような傷が付き、左足と右手にはかなりの深手を負っていた。彼はどうやら錯乱しているようで、大人しく治療を受けられる状態ではなさそうだった。辺りに血が飛び散り、診察室は凄惨な様相を呈していた。リータは先に来ていたマリーナを手伝い、治療に必要な道具や薬を準備した。

押さえつけられた男の傍らで、シスターソニアが呪文を唱えていた。彼女の祈りに反応するように、ソニアの首から下がるシスターの証が淡い光を帯びて輝いている。

「ｍｇｃ　ＡＮＳＴＨＳ　ｏ　ｍ　ｄ　ｓ」

ソニアは苦しむ男の頭にそっと触れた。するとたちまち男の体から力が抜け、大人しくなった。しばらくすると男は軽い寝息を立て始め、完全に眠ってしまった。先ほどまで暴れていたのが嘘のようだ。その様子に、部屋中の人間が息を飲んだ。

「ｅｘｔ」

静かに祈りを終えると、ソニアのペンダントから光が消えた。シスターソニアは暴れる男を押さえていた男達に感謝の言葉を述べ、彼らに治療室から出るように指示した。男達はシスターに男のこと

を頼み、出て行った。部屋に残った三人は、男の治療を始めた。
男の怪我は幸いにも命に別状はなかった。ただ、足の怪我は深く、しばらくは歩けないだろうというのがソニアの見立てであった。また、魔物による呪いもかなり強く受けているようだった。先ほどの異常な錯乱は、呪いのためでもあったのだろう。リータとマリーナが傷を手当てする一方で、シスターソニアはもう一度呪文を唱え、彼にかかった呪いを払った。

「魔獣が出たんですか？」
リータは男の足に包帯を巻きながら聞いた。かなり時間はかかったが、男の手当はほぼ終わっていた。
「黒い森で狩りをしているところを襲われたそうよ。悲鳴を聞きつけた仲間が何とか追い払って、彼をここまで連れてきたの」
腕の包帯を巻きながら、シスターソニアが答えた。その目にはやはり困惑の色が浮かんでいた。
「魔王は勇者によって倒されたのでしょう？　一体なぜ……」
止血に使ったガーゼや器具を処理しながら、マリーナが言う。
魔獣は魔王の魔力に影響され、凶暴化した獣のことだ。魔王であった隣国カルムの王、ダーヴィドが倒れた以上、魔獣が現れるのはおかしい。
「それが、最近また魔獣があらわれるようになったようなの」
ソニアの言葉に、二人もまた困惑した。それは、魔王が復活した可能性を示していた。しかも、以前よりも近くで。

リータの住むセラの村はバルディ王国の南部、黒い森のほど近くにある農業と牧畜を中心とした田舎の村だ。バルディ王国は大陸の東半分を治める大国である。王国は大陸を二分する大河テーレ川を挟んで西側にある隣国、カルムと長らく戦争状態にあった。しかし、国境からも王都バラハからも遠く離れたセラの村は平穏で、戦時とは思えないほど平和な状態にあった。魔王が出現するまでは。

五年ほど前から兆候はあった。獣が凶暴化し、作物の不作が続いていた。国と女神教会は否定したものの、人々は魔王が現れたのだと密かに噂していた。

この大陸には時折、『魔王』が現れる。魔王が現れると、作物は取れなくなり、人や獣は魔性のものに変化すると言われている。そのうち国境地帯では魔物や魔獣が跋扈し出した。やがてセラの村でも魔獣に襲われたり、作物の収量が減ったりといった影響が現れ始めた。

そして、一年前、ついに女神教会は魔王が現れたことを認めた。教会が名指しした魔王はカルム王ダーヴィド。女神教会はダーヴィドを大陸に住む全ての人々の敵と認定し、勇者の出現を預言した。そして、それから半年、待望の勇者が現れた。それが将軍ブルーノ公の嫡子であるアルフォンソだった。

「まさか魔王が？　勇者様は亡くなってしまったのに……」

不安そうなマリーナの言葉をたしなめるように、シスターソニアは強い口調で言った。

「女神のしもべたるシスターがそのようなことを言ってはいけません」

「ですが……」

「私たちが不安だと思っていれば、村人もそれを感じます。いついかなる時も女神の祝福を伝えるのが私たちシスターの役目なのです。それなのに皆と一緒になって、それどころか皆を率先して妄想の魔王を恐れてどうするのですか」

シスターソニアの毅然とした言葉に、マリーナは視線を落とした。ソニアは顔に微笑を浮かべ、言葉を続けた。

「長い戦争がようやく終わったけれど、まだ皆気が立っているのですよ。戦いは終わりましたが、真の平和が訪れるのにはまだ時間がかかります。戦争で傷ついた人々の心を癒し、導くのもまた私たちの役目なのですよ」

ソニアはにっこりと微笑み、不安げな二人の見習シスターに告げた。

「まずは、この方を治してあげましょう」

診療台で眠っている男を指す上司に、二人は笑顔で応えた。

治療を終えて患者の仲間や家族に状況を説明し終わると、既に日は傾き夜になっていた。引き続き夜の勤務に入ったリータが病院内の見回りなどを一通り終え、ようやく一息ついたのは、夜も更けた頃だった。

リータは次の交代要員である見習い仲間フィオナと共に、病院の一室で軽食を食べていた。リータが夕方の魔獣襲撃の話をすると、フィオナが会報にも似た事例があったと教えてくれた。

フィオナに引き継ぎ事項の確認をし終えたリータは、部屋の片隅に置かれていた教会の会報を手に取った。教会には独自のネットワークがあり、各地の教会で起こった重要事項や王都の教会本部からの連絡を伝えるのがこの会報だった。

この数日、彼女は勇者関連の記事しか読んでいなかった。他の記事にも目をやると、確かに魔獣による被害報告が二つほど見つかった。時期的には勇者逝去の前後であり、前魔王によって生じた魔獣の生き残りとも考えられる。しかし、魔王が倒されてからこの一月、魔獣による被害が激減し、その前の週には報告がなかったことを考えると、これはやや異常な事態と言えた。

フィオナが見回りに行ってしまった後も、リータは会報を読み続けた。

その中に、国の南部では流民の暴動があったという気になる記事があった。魔王による被害はバルディよりカルムの方がひどかった。魔物、魔獣の被害も多く、耕作もままならなくなった多くのカルム国民が流民となり、バルディに流れ込んできた。当然、流民は大問題となった。

しかし、魔王出現後、バルディはカルム国民の魔王からの解放を唱えて戦争をしていたため、流民に対して強硬手段を執れなくなった。結果、流民が多く流れ込んだ王国の北部では治安が悪化し、物価も上昇した。戦争終結後、流民の帰国は少しずつ進んでいたらしい。しかし、そのやり方に不満をもった流民の一部が暴徒化したのだと記事には書かれていた。

戦争終結、勇者の凱旋、そして訃報と、この二月ほど世間の話題は限られていた。もし仮に魔王が再び現れたのだとしたら、次の勇者はすぐに現れるのだろうか？　そして、流民の暴動。北部では戦時中から王への反発の声が増していたという。暴動は最悪内戦のきっかけになりかねない重大事件でもある。

戦争は終わった。しかし、新しい火種が確実に育っていることを感じて、リータは暗澹たる気持ちになった。

……そろそろ部屋に戻って休もう。そう思ってリータは会報を閉じ、暗い感情に蓋をした。シスターソニアが言ったように、シスターが不安に怯えていてはいけない。彼女は笑顔を作って、それから部屋を出た。

病院は平屋建てで、診療室、処置室、三つほどの病室とリータがいた休憩室があるだけの小さな建物だ。病院の建物は渡り廊下を通じて、すぐ隣に立っている教会に通じている。教会を挟んだ隣にはシスターの宿舎があり、こちらも教会と渡り廊下でつながっている。彼女はそっと教会に向かい、礼拝堂に入った。

礼拝堂の中は暗く、静まりかえっていた。リータは手にしたランタンの明かりだけを頼りに、祭壇の前に歩みを進めた。

祭壇には剣を持った女神の像が置かれている。

それは大陸の守り神である創世の女神の似姿であった。大陸の民が崇拝してきた、女神教の主神である。女神の持つ剣は全ての悪からこの大陸と人々とを守る、女神の祝福の象徴である。神話によれ

ば、女神はこの剣でもって、この大陸に生まれ落ちたばかりの人々を守ったのだという。

勇者の持つ女神の剣は、勇者の剣でもある。かつて、女神は悪しき者によって殺された。しかし、女神から剣を託された一人の戦士により、悪しき者、すなわち魔王は討ち取られた。以降、魔王は現れるたびに、女神の剣を携えた勇者によって撃退されてきた。

本来、『勇者』とは魔王を倒した者に与えられる称号である。そのため、魔王を倒す前の勇者はまだ厳密には『勇者』ではない。しかし、女神の剣の主と認められた瞬間から、勇者たることを運命付けられる。

『勇者』アルフォンソは、期待通り『魔王』ダーヴィドを討ち取った。これによりカルム軍は総崩れになった。一気にカルム王城を占領したバルディ国軍に、カルム国軍が投降、長きにわたる戦争は終結した。凱旋したアルフォンソは教会により正式に第十四代勇者として認定されたのだった。

リータはランタンを床に置くと、祭壇前にひざまづいた。手を組み、目を閉じて祈りを捧げた。人々を苦難から救ってくれるように、そして、若くして死んでしまった幼なじみに祝福を与えてくれるようにと??

その時だった。突然ガシャンという大きな音がしたと思うと、女の悲鳴が響き渡った。それはフィオナの声だった。リータは礼拝堂を飛び出し、病院へと向かった。

「どうしたの！」

病院にたどり着いたリータが見たのは、割れた廊下の窓とその破片の中に倒れているフィオナだった。

「フィオナ！」

リータは叫びながら駆け寄り、倒れている同僚を抱え起こした。

「しっかりして、フィオナ！　フィオナ！」

リータの声に、がうっすらと目を開けた。
「リータ……」
「フィオナ！　大丈夫？　立てる？」
フィオナは軽くうなずいて、リータによりかかるようにして立ち上がった。彼女はガラスの破片を浴びて怪我をしたのか、体中から血を流していた。リータはフィオナを支えて、幸いにもすぐ側にあった処置室の中に移動させた。悲鳴を聞きつけ病室から出てきた患者の一人がフィオナを支え、移動を手伝ってくれた。
「一体何があったの？」
処置室の寝台にフィオナを寝かせる。患者の一人が明かりを付けてくれたので、リータはフィオナの状態を観察した。窓に面していただろう右側の怪我がひどい。顔や頭にもガラスの破片が刺さっていた。しかし、一番大きな傷はガラスによるものには見えなかった。彼女の右肩と腕には、鋭い爪で切り裂かれたような深い傷跡があった。患者達はそのひどい有様に呆然としていた。
「廊下を歩いていたら突然……あれは多分……」
出血のためだろうか、フィオナの意識は朦朧としているようだった。
「どうしたのですか！」
声がして、処置室にシスターソニアが入ってきた。騒ぎに目が覚めて病院に急いで来たのだろう。ソニアは夜着に上着を着ただけだった。
「シスターソニア！　フィオナが廊下で怪我を！」
ソニアは手早くフィオナの怪我を診察し、顔をしかめた。
「何があったのです？」
ソニアの質問に、患者達が答えた。
「突然窓が割れる音がして、フィオナさんの悲鳴が聞こえたんです」
「その後、何かがぶつかるような音がして、逃げるよう音が……」
「逃げる？」
ソニアの疑問は、駆け込んできた別の患者によって遮られた。

「庭で火事です！　早く消さないと！」
処置室のドア越しに、窓の向こうに明るい火が立っているのが見えた。
「リータ、お願い！」
「はい！」
ソニアの声に、リータは廊下に出ようとした。しかし、突然フィオナが叫んだ。
「外に出てはだめ！　魔獣よ！　魔獣がいるの！」
??魔獣。思いがけない言葉に、処置室の空気が凍った。しかし、シスターソニアの反応は早かった。
「リータ！　教会の鐘を鳴らしなさい！　リータ！」
呆然としていたリータだったが、自分の名を呼ぶソニアの強い声にハッとなった。
「はい！」
ソニアの意図を察して、リータは教会へと走り出した。

「……何、これ？」
教会の二階にある鐘楼に上がったリータは、村からいくつもの火が上っていることに気づいた。教会は村はずれの丘にあり、鐘楼からは村全体を見晴らすことが出来る。真夜中で本来なら見えるはずのない村が、いくつもの炎によって照らされていた。その恐ろしい光景に、リータはしばし身を凍らせていた。そして、やがて狂ったように鐘を鳴らした。
鐘を打ち終え下を見ると、たいまつを持った数人の人影が見えた。彼らは国軍の鎧を身に着けていた。
助けが来たんだ！　リータは急いで鐘楼を降りた。

4　殺戮と混乱

「リータ！　一体何があったの？」
礼拝堂の中に戻ると、宿舎からやってきたマリーナと鉢合わせた。彼女も夜着に上着を着ただけで、眠そうな顔をしていた。
「分からない！　病院に魔獣が出て、フィオナが怪我を！」
「魔獣？　冗談でしょ！」
マリーナは悲鳴を上げるように叫んだ。
「それだけじゃない、村も燃えてるの！　病院にも火が！」
リータの言葉にマリーナが信じられないという顔をした。私だって信じられない、リータは思ったが口には出さなかった。
「兵士さん達が来てくれたみたい。もうすぐここに着くと思う。私は病院に行くわ！　他の子と兵士さん達にこのことを伝えて！」
「了解！　私たちも準備してすぐに行くわ」
緊張がみなぎったマリーナの声を背中で聞きながら、リータは病院への道を走った。

病院に戻ると、そこにはすでに二人ほど兵士の姿があった。リータは彼らに会釈しながら処置室に駆け込んだ。
「シスターソニア！」
ソニアはフィオナに手当をしているところだった。
「大丈夫だった？」
ソニアはリータをちらりと見て、すぐに視線を傷口に戻した。
「はい、村にも火が出ています！　他の皆も準備が済み次第、こちらに来るはずです」
「ええ、軍の方から聞いたわ。村にも魔獣が出たのだとか」
ソニアが魔法をかけたのだろう、フィオナは落ち着いているように見えた。リータは少し安心した。
「軍が早く動いてくれて良かったですね」

「本当ね……今夜は忙しくなるわ。リータ、倉庫からありったけの薬と道具を運んできて！」
「はい！」

リータが部屋を出たところで、一人の兵士と出くわした。
「すみません、どいて下さい」
リータは脇をすり抜けようとしたが、兵士に止められた。
「見習いシスターのリータとは、君か？」
「はい、そうですが……すみません、急いでるんです」
リータは困惑して答えた。どうして今そんなことを聞くのだろう？　彼女は不思議に思ったが、今は目の前の仕事をこなすことで精一杯だった。
もう一度脇をすり抜けようとしたリータだったが、今度は兵士に腕をつかまれた。何をするのかと彼女が抗議しようとしたら、兵士が言った。
「一緒に来てもらう」
「何を仰っているんですか！　私には仕事があります。用事なら後でお願いします！」
リータは腕を振り払おうとしたが、男は彼女の手をひねり上げた。リータは悲鳴を上げ、顔は苦痛にゆがんだ。
「あんた、何してるんだ！　リータさんを離せ！」
患者が気づいたのだろう。兵士に向かって叫んだ。彼らの走ってくる足音がリータの耳に届いた。
「何をしてらっしゃるんですか！」
騒ぎに気づいたシスターソニアが処置室から出てきた。リータを拘束する兵士に、ソニアは一瞬驚き、険しい表情をした。
「シスターソニア……助けて……」
ギリギリと締め付けられる腕が辛くて、リータは呻くように叫んだ。
「リータを離しなさい！　この非常事態に何をしてい？？うっ」

ソニアの怒気をはらんだ叫びは途切れた。ソニアは後ろから近づいてきた別の兵士に口を塞がれ、喉笛を切り裂かれた。ソニアの首から血が噴き出し、体はビクビクと痙攣していた。やがてその動きが止まると、兵士はソニアの体を押し倒した。

窓の外の火事と、室内のわずかな光が倒れた修道女の体を照らしていた。血が床に広がり、白いはずの服を赤黒く染めていく。

「あ、あ、あ」

リータは目を見開き、その信じがたい光景を見つめていた。ソニアの名を呼びたいのに声が出せず、彼女の喉は痙攣して短い音を発するだけだった。

「お前ら、シスターに何てことしやがる！」

突然後ろから衝撃が起こった。患者の一人がリータを拘束していた兵士にタックルしたのだ。不意打ちをくらい、兵士は体勢を体勢を崩した。リータは兵士を突き飛ばして拘束から逃れた。

「シスターソニア！」

リータは倒れているソニアを抱き起こし、何度も叫んだ。ソニアの顔は驚愕と恐怖で引きつり、目をカッと見開いていた。リータは首の傷を押さえて止血しようとしたが、流れる血は彼女の手と服を汚しただけだった。

「うわあっ」

背後で声がして、リータは振り向いた。そこには血にまみれた剣を手にした兵士が立っていた。足下には先ほどタックルして来た患者が倒れている。その奥にはもう一人患者がいたが、彼は背中を向けて逃げていくところだった。

リータは何が起こっているのか分からず、ソニアを抱えたまま、ただ呆然として座り込んでいた。庭の火事はますます大きくなっていて、教会や病院に燃え移り始めていた。　これは夢なのだろうか？　そうだ、夢に決まっている、こんなの……

「ぎゃあっ」

赤く照らされた闇の奥からまた悲鳴が聞こえた。先ほど逃げてい

った患者が殺されたのだろう。リータは非現実的な状況を現実だとは思えずにいた。

「見習いシスターのリータだな。一緒に来てもらう」

座り込んで動けないリータに、後ろから剣が突きつけられた。ハッと顔を後ろに向けると、シスターソニアを殺した兵士が、リータを冷たく見下ろしていた。

剣の切っ先は未だ血を滴らせ、身は炎で照らされて赤く輝いていた。リータは恐怖で身を凍らせ、黙って男を見上げることしかできなかった。

「立て。早くしろ」

リータは血の海の中に座り込んだまま動かない。兵士は動こうとしない彼女に業を煮やし、腕を引っ張って立たせた。

リータの腕からソニアの体がずるりと落ちた。びちゃりという音を立てて、彼女の遺体は再び血まみれの廊下に倒れ込んだ。倒れている恩師の姿に、リータの恐怖は限界に達した。

「いやあああああああ！」

リータは立ち上がって、男から逃げようともがいた。しかし、兵士は腕をつかんで放さない。

「大人しくしろ！」

兵士はリータを力任せに押し倒し、それでもなお暴れる彼女の顔に刃を突き付けた。

「生きたまま捕まえろという命令は受けているが、怪我をさせるなとは言われていない。これ以上抵抗するなら……分かるな？」

兵士の恐ろしい形相と突き付けられた刃に、リータは身をすくませた。やがて彼女がうなずくと、男は彼女を再び立たせた。

兵士に追い立てられるように、リータは廊下をのろのろと歩いた。二人の兵士に前後を挟まれてしまい、逃げることはできない。

廊下に患は者達が点々と倒れていた。どうしたら逃げられるだろう？　リータは必死に考えた。しかし、相手は剣を持った兵士で、

彼女に勝てる相手ではなかった。
　考えあぐねているうちに、病院の玄関まで来てしまった。突然、先導していた兵士が立ち止まった。リータが前をのぞき込むと、誰かが立っているのが見えた。人影は覆面を覆っていて、顔は見えない。
「何だ、貴様は？？ぎゃっ」
　兵士が突然後ろに倒れた。リータはとっさに避けようとしたが、倒れる兵士に巻き込まれて一緒に尻餅をついた。衝撃の後、リータが目を開けると、胸の上に目をカッと見開き、胸を切り裂かれて血を流した兵士の姿が映った。
　声にならない悲鳴をあげ、リータは反射的に男を振り払い、床に這いずって下がろうとした。
「何をする！」
　後ろを歩いていた兵士が怒鳴った声が聞こえ、リータは這いつくばったまま上を見上げた。兵士が剣を構えようとした時、突然ブワっと突風が吹いた。次の瞬間、兵士の首は胴体から離れていた。ドサッと音を立てて、首のない体は仰向けに倒れた。
「ひっ」
　あまりに恐ろしい光景を目の当たりにし、リータは思わず顔を背けた。どうして、なぜ！　彼女は一瞬混乱した後、まだ脅威が去っていないことに気づいた。次はきっと自分だ！　リータは恐怖に震えながら、背後をそっと振り返った。

　玄関口に、覆面の男が立っていた。手には剣を握っていた。その剣は淡い燐光に包まれていて、凄惨な状況とは場違いに美しい。リータは一瞬、剣にみとれた。
　やがて男は剣を鞘に収め、呆然としているリータに近づいてきた。リータはハッとして、逃げようとした。しかし、彼女が立ち上がるより早く、男が彼女の腕をつかんで、そのまま彼女を後ろから抱きしめた。

「離して??」
リータは叫ぼうとしたが、彼女の口は男によって塞がれた。男を振り払おうともがいたが、男の腕は力強く、彼女の抵抗にビクともしない。口を塞がれ、身動きも取れずパニックに陥ったリータに、男は耳元で囁いた。
「俺だ。リータ」
リータはハッとして、自分を捕らえている男を見た。覆面を被っていて目元しか見えなかったが、その目の色に覚えがあった。
「遅くなってすまなかった。??迎えに来た」
口を塞ぐ手が離れ、男は覆面を少しだけ緩めた。そこから覗いた顔は、死んだはずの男のものだった。
「ゆ、うしゃ、さま……?」
男の拘束が解かれた。自由になった彼女は男に向き直った。ふと思い出して彼女は胸を見下ろした。彼女のペンダントが淡く光を放っていた。
あまりのことに言葉が出ない。唖然としている彼女に、男は優しく微笑みかけた。
「もう大丈夫です。あなたが無事で良かった……」
勇者はそのままリータを抱きしめた。逞しい胸に抱きすくめられ、彼女は一瞬困惑したが、人の暖かさを感じて、リータの緊張の糸が切れた。彼女の瞳から次々と涙が零れてきた。
「シスターが、シスターソニアがあ……患者さん達もみんな……どうして、どうして」
泣きじゃくるリータの頭を、男がそっとなでた。
「ひどい目に遭いましたね。もう大丈夫ですよ」
耳元で囁かれた低い声は、彼女の心に優しく響いた。男はしばしの間、リータを抱きしめていた。
「申し訳ないが、まだ危険は去っていません……立てますか?」
男の言葉に、リータは状況を思い出した。顔を上げて、こくり

と頷くと、男から離れた。
「ありがとう……アル」
リータは涙を袖でぬぐって、立ち上がった。
その時、背後からキャー！　という女達の声が聞こえた。振り返ると、マリーナ達の姿がうっすらと見えた。
「マリーナ！」
リータは友人達に叫んだ。しかし、男にまた口を塞がれた。ふがふがと抗議の声を立てるリータに、男が囁いた。
「彼女たちに私のことを知られるのはマズいのです。彼女たちには悪いが、行きましょう」
アルは彼女をひょいと肩に担ぐと、そのまま走り出した。
「リータ！？」
マリーナの声が一瞬聞こえたような気がしたが、リータが返事をすることはかなわなかった。

5　勇者様と人攫い

「ねえ、下ろして！」
「喋ると舌を噛むよ」
リータを肩に担いだまま、アルは走り続ける。背中を叩いたり、手足をばたつかせて抗議したリータであったが、アルは意に介する様子もなかった。やがて暴れる方が危険だと諦め、リータは運ばれるに任せた。
アルは教会の裏手に回り、そのまま森へと向かった。
「ちょっと！　どこへ行く気ですか？　そっちは黒い森で、村は反対方向……」
真っ黒な森を、薄い月明かりが照らしていた。担がれたまま身動きの取れないリータは、頭巾を押さえ、軽く頭を上げた。村のあるはずの方向には赤い空と、煙が上がっているのが見えた。
「とりあえずあの遺跡へ。仲間が待ってる」
一度合流して体勢を立て直すということだろうか。リータは納得しかけたものの、マリーナ達が心配で仕方なかった。教会の鐘楼からは、教会へ登る道を歩いている兵士達が見えた。彼らも敵なのだろうか？　もしそうならマリーナ達も危ないということになる。リータは疲労した頭を必死で動かし、自分を、村を襲っている状況を考えていた。
病院を襲った連中は確かに国軍の軍装だった。正規軍があのような教会施設で暴挙を行うはずはない。もしかしたら、軍の格好をした夜盗かもしれない。彼女はぼんやりと考えた。フィオナが襲われ、シスター達が死に、連れ去られそうになったところで死んだ男に助けられた。あまりに多くのことが一度に起きて、リータの思考は混乱し、感覚は鈍磨していた。通常の状態ならまず考えるはずの疑問すら浮かばない程に。
アルは森をひた走っている。月明かりと男の腰から下げられたほ

のかに光る剣だけが、彼らの道行きを照らしていた。男が足を踏み出すたびに与えられる振動が、リータにはいつの間にか心地よくなっていた。現実じゃないみたいだ。本当に、夢なら良いな。疲労困憊した彼女の意識は少しずつ薄れていった。

「着きましたよ」

男の声に、リータはハッと意識を取り戻した。遺跡のある草地に下ろされ、彼女はゆっくりと立ち上がった。不自然な格好で頭に血が上ったのだろうか、リータは眩暈と立ちくらみを感じた。ふらついた彼女の肩をアルがそっと支えた。

「大丈夫ですか？」

アルはリータの顔をのぞき込んで優しく語りかけた。目を合わされて、リータは思わず頬を染めた。

「だ、大丈夫です」

リータは一歩下がって、顔を伏せた。一瞬感じた気恥ずかしさを目の前の男に気づかれたくなかった。今はもっと重大な問題があるのに！　彼女は自分を恥じた。リータは表情を整えて顔を上げると、ごまかすように周囲を見回した。辺りには彼ら以外に人の気配はなかった。まだアルの仲間は来ていないのだろう。

「仲間の方とはここで？」

リータの質問に、アルは頷いた。彼によれば、仲間は村の方を偵察しに行ったという。

「あの、村は大丈夫なのでしょうか？　お願いです。村を助けて下さい」

彼女は顔を上げて、男に向き直った。勇者とその仲間がいるのなら、魔獣も夜盗もどうにでもなるだろう。リータはすがる思いだった。しかし、アルは彼女の顔を見つめたまま、動こうとはしない。

「……勇者様？」

勇者という言葉に、男は一瞬表情をなくした。リータは自分を見下ろす男の目に困惑した。

「アル、と呼んで下さい。勇者様、ではなく」
アルの表情は優しいものに戻っていた。しかし、それが無理矢理作っているもののように見えて、リータは言いようのない不安に襲われた。
「分かりました、アル。それよりも、あの、仲間の方と合流したら一度教会に戻って頂けますか？　村から兵士達が来るのが見えました。もし彼らが病院を襲った夜盗の仲間なら、みんなも……！」
「悪いが、それはできません」
アルの言葉にリータは愕然とした。勇者様は私達を救ってくれる存在のはずだ。なのにどうして彼は動いてくれないのだろう。彼女は必死に訴えた。
「村も燃えていました。あなたも煙くらい見たでしょう？　テレーザの家だって……」
テレーザの名に、男が一瞬反応したのをリータは見逃さなかった。
「お願いです！　みんなを助けて下さい！　このままじゃテレーザだって……」

その時、二人の背後でガサリと小さな音がした。リータはハッとして息を飲んだ。アルも緊張しているのか、一転して険しい表情をしていた。二人は遺跡の影にしゃがみ、姿を隠した。アルは剣の柄を握ったまま、音の主に注意を向けていた。
ガサガサと音を立てて何者かは二人の方に近づいてきた。やがて木の陰から黒い男のシルエットが現れた。男は手に小さなランタンを持っており、それを二度左右に振った。
「……クロードか？」
アルは姿を隠したまま人影に呼びかけた。
「アル？」
人影も声を発した。その声を聞くと、アルはホッとしたようにリータに仲間が来たのだと言った。彼はゆっくりと立ち上がって、クロードと呼んだ男にもう一度呼びかけた。

呼びかけを受けた男は静かに二人の方へと近づいてきた。男は覆面で頭部を完全に覆っており、目がわずかに見えるだけだった。体格はアルよりも大きくしっかりしており、背中には槍を背負っていた。

男はアルと視線を交わした後、彼の側に立ち尽くしているリータを見つめた。その目はどうしてか厳しく、冷たいものに感じられた。リータはその視線に萎縮し、目を反らした。

「クロード、村はどうだった？」

アルが男に話しかけた。

「魔獣が出たようだが、そっちはすぐに片が付きそうだ。カナレス家と村の狩人がうまくやってる。火事の方もそれほどはひどくない。隣村からの救援もまもなく着くだろう」

「本当ですか！　良かった……」

リータは思わず声を出した。村は大丈夫だと聞き、彼女はホッとした。しかし、現状の懸念はそれだけではない。

「でも、まだ教会の方が……お願いです。すぐに戻って、教会を助けて下さい。まだ私の同僚が残っているんです！」

リータは目の前の二人の男にすがった。しかし、アルは困ったような顔を浮かべるだけだった。クロードの方も冷ややかに彼女を一瞥すると、アルの方に意味ありげな視線を向けた。

「どうして私たちを救って下さらないのですか？　アル、あなたは女神様の代行者でしょう！　このままじゃみんな……」

「何で俺らが助けないといけないんだ。状況も分からないのか？　これだから女は……」

アルの胸ぐらを掴んで詰め寄るリータの叫びを遮って、クロードが言い放った。突然の言葉に、彼女は怒るより呆然とした。アルはたしなめるような視線をクロードに送った。しかし、クロードはアルの方を向いて言葉を続けた。

「だってそうだろ？　何で自分らを探してる人間の前にノコノコと現れないといけないんだ？　大体、あいつらはこの女捕まえに来た

んだろ」
「え、どういうこと？」
自分を捕まえに来た？　どうして？　混乱するリータに、クロードがあざ笑うように答えた。
「だから、勇者を釣るための餌だよ。逃げ出した勇者様を捕らえるために『秘密の恋人』を使おうと思ったんだろ。村が襲われたのもそのためさ」
「なっ！」
村や教会が襲われたのは私のせい？　何で、どうして？　リータの頭は激しく混乱した。
「どうして勇者様が追われるのよ！　大体『秘密の恋人』って何よ！　私はそんなのじゃないわ！　それに、大体勇者様は死んだんじゃ……ん、あれ？」
リータは困惑した。色々なことが一度に起こりすぎて、何が起こっているのか分からない。そうだ、勇者様？？アルは死んだんだ。それなのにここにいて、私を助けてくれた。でも、追われてる？誰に？
「……もしかして、お前、何も知らないのか？」
表情を殺して硬直しているリータを見て、クロードは呆れたように言った。そして、頭をポリポリと掻くと、アルの方を見た。
「恋人じゃないとも言ってるぞ。どういうことだ、おい」
「確かに恋人じゃない。いずれ妻にする人だ」
アルはしれっと言った。その様子を見て、クロードはハァとため息をついた。
「……まあいいや。アル、とにかく行くぞ。見つかったら面倒だ」
「そうだな……リータ、大丈夫か？　行くぞ」
アルに話しかけられ、リータは肩を震わせた。この人たちは何を言っているの？
「……一体何なの？　何が起こっているの？」
そう呟いて動けないでいるリータに、アルが話しかけた。

「リータ、巻き込んで済まない。こんなつもりではなかったんだ……」

落ち込んだ様子のアルの言葉を引き継ぐように、クロードが口を開いた。

「ねーちゃん、俺たちは追われている。捕まったら俺たちは間違いなく殺される。だから早く逃げないと」

「……何で逃げるんですか？　勇者様が生きてるのは良いことじゃないですか」

「事情は後で必ず説明する。だから、今は……」

「リータ！」

アルの言葉は突然森に響いた女の声にかき消された。

振り返ると、教会からの道にたいまつの灯りが見えた。複数の人の気配が近づいてくる。男たちが緊張した。

「リータ！」

再度女の声が響いた。マリーナの声だ！　リータは反射的に叫んだ。

「マリーナ！　私はここよ！　助け……」

「やめろ！」

リータの思いがけない行動に、アルは慌ててリータのを取り押さえ、口を押さえた。何やってんだ！　とクロードが怒気をはらんだ声で言う。

「痛！」

リータはアルの手を噛み、彼の拘束から逃げようとした。

「マリーナ！　助けて！」

リータはもう一度叫んだ。しかし、アルはリータを離さない。彼女は何とか逃げようと力の限り暴れていた。見かねたクロードが彼女の口に布を押し込んだ。リータは突然の息苦しさに、フガフガと口の異物を吐き出そうと喘いだ。

「クロード！」

アルは仲間を咎めるように言った。
「逃げるためだ、仕方ないだろ！　それがダメならその女は置いていけ！」
「……」
「連れてくなら早く何とかしろ。時間がない！」
黙り込んだアルは腕の中で興奮状態になっているリータを見つめた。
「ｏｐｎ　ＡＬＰＨＳ」
自分を押さえ込んでいる男の呟きに、リータはおののいた。魔法を使う気だと気づき、彼女は逃げだそうともがいた。しかし、アルの詠唱は素早い。
「ｍｇｃ　ＳＬＰ　ｏ　ｍ　ｄ　ｓ」
さすがに勇者なだけあるのか。魔法の効果は素早く現れ、リータの意識はぼやけ始めた。彼女の体から力が抜け、自分の意志で手足を動かすこともできなくなった。アルの手により口の中の異物が取り去られても、彼女はもう叫ぶこともできない。
「これじゃ人攫いよ……」
リータはぼそりと呟いた。
「ごめん」
耳元で囁かれた小さな声を最後に、彼女は深い眠りに落ちた。
「ｅｘｔ」
アルはリータが動かなくなったのを確認し、そのままもう一度肩に担いだ。アルとクロードはそのまま黒い森へと踏み込んだ。

三人の姿が消えた直後、遺跡にマリーナと数人の兵士がやって来た。しかし、そこにはもう彼らの痕跡は残っていなかった。
「リータ……」
友人を案じる女の声は、闇に消えた。

6　駆け落ちと誘拐

真夜中の森を、二つの影が静かに駆け抜けていく。森の中の獣道、近隣住民しか知らないような小道に分け入り、彼らはどんどん森の奥へと進んでいった。

しばらくすると、彼らの視界が少しだけ開けた。その先には小さな小屋が建っており、その横には馬が二頭つながれていた。馬は眠っていたが、彼らの接近に気づいて少しだけ頭を上げた。槍を背負った男が馬に近づいて、その頭をそっとなでた。

もう一人の男は肩に女を担いでいた。軍人として鍛えられた体にも、人を一人担いで走るのは大変だったのだろう。彼は小屋の中にそっと女を寝かせると、その横に座り込んでしまった。

「アル、大丈夫か？」

外で馬を見ていたクロードだったが、小屋の中に小さく声をかけた。

「問題ない。ちょっと疲れただけだ」

ふぅと、大きなため息の声が外にいるクロードにも聞こえた。あのひょろっとした子がよくここまで立派になったな、とクロードは場違いな感慨にふけった。

クロードが小屋に入ると、アルは眠っている女？？リータの隣に横たわっていた。リータには毛布がかけられ、その顔は薄暗くてよく見えない。部屋の中には小さなランタンが一つあるだけだった。

「おい、今から手を出すなよ。夜明け前には出るからな」

クロードはニヤリと笑った。アルはからかわれたのせいか少しだけ赤くなって、分かってる、とすねたような口調で答えた。

「なあ、その子、リータだっけ？　彼女は今回の件、どこまで知ってるんだ？　何だか混乱してたみたいだけど」

問いかけに、アルは起き上がった。
「何も知らない」
「何も？」
呆れたようなクロードの言葉に、アルはもう一度答えた。
「何も知らない。この間会った時に、今度迎えに来るって言っただけだ」
「はあ？　まさかと思うが……もしかして、駆け落ちのことも？」
「知らない」
あっけなく答えたアルに、さすがのクロードもめまいを感じた。
「知らないって、お前……」
「仕方ないだろ、非常事態だったんだから」
確かに、村への襲撃は彼らの予想外だった。リータの存在を知っていたのはクロード他数人の協力者などごく限られている。
「誰が彼女のことを漏らしたんだろうな？」
「……恐らくシスターアリシアだ」
クロードの呟きに、アルが憎々しげに吐き捨てる。シスターアリシアは王都にある女神教会の大司教であり、バルディ王国全土にある教会のトップでもあった。
見習いシスターであるリータをもらい受けるため、アルは事前にシスターアリシアと面会していた。彼女は勇者の申し出に驚いていたが、快く協力を引き受けてくれた。そして、女神に誓ってこのことは内密にする、とも。
「女神教会のシスターが『勇者様』の命令に背くのか？」
「さあな」
ぶっきらぼうに答えるアルに、クロードは苦笑した。
「勇者といえど、国家の敵となればそんなものか……」
クロードの言葉に、アルはちらりと視線を送っただけで何も言わなかった。その代わりなのか、アルは大きなあくびをした。目をこすっている友人に、クロードはそっと声をかけた。
「先に休めよ。人を担いで走ってきたんだ。疲れただろ？」

「あ……ごめん、クロードも疲れてるのに。しばらく経ったら交代するよ。起こしてくれ」
「了解」
クロードの返事に手を振って、アルはそのまま横たわった。

小屋の中には二人の寝息が響いていた。アルは気持ちよさそうに眠っている。その様子を確かめてから、クロードはそっと小屋の外に出た。
空には月が浮かんでいる。濃い闇を照らす白銀の光に、クロードはふと一月前のことを思い出した。

ある夜のことだった。クロードは寝ようと思ったその直後、今は主でもある三つ年下の幼友達に呼び出された。主の部屋へと向かう道を、闇夜にぽっかりと浮かぶ月が照らしていた。
部屋に入った途端、彼の主はとんでもないことを言い出した。
「駆け落ちする。手伝ってくれ」
「は？」
唐突な言葉に、クロードは思わず聞き返した。
「だから、駆け落ちだ。『勇者様』はもう辞める」
「アル、お前何を言って……」
幼少時からの長い付き合いであるクロードは、アルの突拍子のない発言に慣れている。しかし、今回はさすがのクロードも絶句した。
「魔王は倒した。勇者としての宿命は果たしたんだ。だから、俺はもうただのアルに戻りたい」
「勇者を辞めたい、はまだ分かるが……何で駆け落ちなんだ？　それに相手は？」
「……幼なじみだ」
「それって、例のセラ村の？」

アルは頷いて、少し照れたように視線を落とした。彼はこれまでどんな美女にも見向きもせず、一部では女に興味がないという疑惑すら持たれていた。勇者になって以来、ふさぎがちだったアルをずっとそばで見てきた。弟のように思っている彼が、年相応な面を維持していることにクロードは少しだけ安堵した。

「別に駆け落ちしなくてもいいだろ？」

「父上は彼女との結婚を絶対に許さない」

「そんなの言ってみないと分からないだろ？」

クロードの言葉をアルは鼻で笑う。その顔には皮肉そうな笑みが浮かんでいた。

「父上は彼女を受け入れない。それだけは確実だ。彼女と一緒にいるには、駆け落ちしかない」

「しかしなあ……大体お前、次期当主だろ。勇者辞めるのはともかく、逃げるのはまずいだろ」

「跡ならニコーラが継ぐよ。父上もまだ若いし、俺がいなくなってもさして問題はない」

「……家が嫌なのか？　なら、大人しく王女と結婚すりゃいいだろ」

「王家なんて冗談じゃない」

アルは吐き捨てるように言った。その顔には嫌悪感が満ちている。ごく親しい間柄のわずかな人間しか知らないが、アルは王家を嫌っていた。彼が『勇者』になって以降、その傾向は悪化する一方だった。当然アルは巧妙にその感情を隠していたが、クロードのような遠慮のいらない相手にはその思いを時折吐露していた。

クロードはある程度の事情を知っている。彼らの勇者に対する態度を考えれば、王家を忌み嫌うアルの気持ちは分からなくもない。しかし、クロードはあえて軽く言い放った。

「何でだよ。うまくいけば次の国王陛下だぜ。そうすれば女なんていくらでも囲えるだろ。前国王のフェルナンド様みたいに」

しかし、クロードの言葉にアルは激怒した。

「ふざけるな！　俺は愛人なんて作らない！　妻一人で十分だ」

怒りを爆発させて叫ぶアルに、クロードはひるんだ。ここまで感情を露わにした彼を、クロードは見たことがなかった。

「あー……すまん」

アルのあまりの剣幕に、クロードは平謝りすることしか出来なかった。アルは不機嫌そうな表情のまま、話を続けた。

「知っての通り、父上は俺を王女と結婚させる気だ。でも俺はこんな話に乗る気はない」

国王の一人娘である王女が勇者に夢中なのは、王宮では有名な話だった。実際、二人を結婚させようという話が持ち上がっていた。

アルはふっと表情を消し、足下を見つめた。

「……このままここにいたら、ずっと『勇者』として利用されるだけだ」

「だから、『歴史から消える』ことを選ぶのか？」

クロードの問いかけに、アルは静かに頷いた。その目には暗いものが渦巻いていた。

？？勇者は王になるか消えるかどちらかしかない。おれはどちらになるんだろう？

女神の剣を初めて手にしたアルが自嘲気味に呟いた言葉を、クロードは今も忘れられない。

弟のように思っている男の苦悩を目の当たりにして、クロードはため息をついた。アルはここでは幸せにはなれない。それはクロードにも薄々分かっていたことだった。

アルの父親には、どういう訳か息子を政治の道具としか考えていない節がある。『勇者』という最高のカードをどう使うか、つまりアルの生殺与奪の権利一切は彼の父親に握られていた。しかし、それではアルの払った犠牲や労苦は何だったのだろう？　とクロードは思う。生死を共にしてきた友人の願いに、彼は覚悟を決めた。

「分かった、手伝うよ」

その日以来、クロードはセラ村の周辺の状況や、逃亡ルートの作

成を始めた。
　実行は、本当ならもっと後になるはずだった。しかし、アルの身に降りかかった抜き差しならない事態により、準備不足のまま作戦を遂行する羽目になった。
　それでも計画があって良かったのかな、とクロードは思う。おかげでリータをすんでの所で助けられた。捕らえられた彼女がどのような目に遭うかを考えたら、それは僥倖に思えた。
　そんなことを考えながら、クロードは馬の側に座ってぼんやりと空を眺めていた。たてがみをなでると、馬が少しだけ目を開いた。

　しばらくして、小屋の中からアルが出てきた。
「まだ寝ててもいいぞ」
「もう大丈夫だ。クロードも休んでくれ」
「悪いな。そうさせてもらうよ」
　クロードの言葉に、アルが目をふせた。
「こんなことに付き合わせてしまって、すまん」
「そんなこと言ってくれるな。俺とお前の付き合いだろ」
　苦笑するクロードに、アルは困ったように笑った。

　小屋に入ろうとしたクロードは、ふと思い出したことがあって足を止めた。
「……そういえば、一つ確認したいんだが」
「何だよ？」
　奥で眠っているリータを横目で見て、クロードは意を決して口を開いた。
「彼女、自分は恋人じゃないと言ってたな？　どういうことだ」
「プロポーズはした」
「これまでも密かに付き合ってたんじゃないのか？」
「……最後に会ったのは八年前、士官学校に入る前だ」
「八年！？」

アルはクロードの驚きを全く意に介さない様子で頷いた。
「あ、そうか、手紙のやり取りとかしてたんだな？」
「してない。彼女の幼なじみやその親と、ちょっと手紙のやり取りをしてただけだ」
「……ちなみに、プロポーズの返事は？」
「聞いてない」
クロードは頭を抱えた。遺跡で彼女が村に戻りたいと言ったのも当然だ。これじゃ誘拐の片棒担ぎじゃないか、どうしよう、と今更ながら自分のやったことを後悔した。
「お前、彼女に嫌われてたらどうすんだよ！」
クロードの言葉に、アルはきょとんとした。
「構わない。これから好きになってもらえば良いんだから」
前向きすぎる言葉に、クロードはどっと疲れを感じた。
ふらふらと小屋に入ったクロードの目に、静かに眠るリータの姿が映った。
昨夜の彼女の混乱ぶりと非協力的な態度の理由が分かり、クロードは目の前の女に少しだけ同情した。前途多難だ。彼は心の中で呟いた。
そうして彼は、押し寄せてくる疲労感に身を任せた。

7　ことの始まりと狂った運命

リータが目を開けると、そこは知らない部屋だった。粗末な木造の小屋で、壁には狩猟に使う道具などがわずかに立てかけられていた。小さな窓からはうっすらとした光がわずかに差し込んでいたが、一番の光源は側に置かれていた小さなランタンだった。

なぜ自分はこんなところにいるのだろうか、彼女は寝ぼけ眼のまま、ぼんやりと座っていた。

ガチャッと扉を開く音がして、リータは反射的に身をこわばらせた。開いた扉から入り込んできた男の顔を見て、彼女は唐突に全てを思い出した。

「おはよう。気分はどう？」

爽やかに笑いかける美しい青年の顔を見た瞬間、彼女は強い怒りが沸き上がってくるのを感じた。

リータはアルにつかみかかると、きつくにらみ付けて怒鳴った。

「これは一体どういうこと？　私を村に帰して！」

喚く彼女を宥めるように、アルは優しい声で言う。

「危険な目に遭わせてしまってすみません。ですが、もうあなたを村に返す訳にはいかないのです」

「どうして！」

「あなたは狙われています。私を追っている人たちに、私の恋人だと知られてしまったから」

アルはリータの頭をなでようと手を伸ばした。しかし、リータはその手を打ち払い、キッと彼を見据えた。

「私はあなたの恋人じゃありません。大体何で勇者様が追われてるんですか？　どういうことなのか、ちゃんと説明して下さい！」

リータの剣幕に押されたのか、アルはふっと小さく息をついた。
そして、真面目な顔で彼女に向き直った。
「……時間がないので手短に話します。今、私は国家反逆罪で追われています」
思いがけない単語に、リータは言葉を失った。国家反逆という言葉の重さに、彼女の顔から血の気が引く。その様子を見て、アルはあわてて付け足す。
「もちろん、私は関わっていません……父が、関わっていたのです」
「お父様？　将軍が？」
「私と一緒に死んだことになっている父とガンディーニ公……二人が中心となって国王陛下へのクーデターが企てられていました」
「クーデター？」
「そうです。国王陛下に不満のある貴族や軍人を集め、陛下を暗殺する気だったんです」
「どうしてそんなことを！」
リータは青ざめた顔で叫んだ。国王を暗殺するなど、彼女にはとても考えられないことだった。アルは神妙な顔つきで話を続けた。
「南にいると実感がないと思いますが……北の方では国王陛下への不満がかなり高まっています。戦場になった挙げ句、魔王による悪影響をもろに受け、しかも難民まで受け入れる羽目になった？？北の疲弊はもう限界なんです」
「ですが、国王陛下を暗殺したとして、問題は解決しないでしょう？」
「彼らはエドアルド様を担ぎ上げるつもりでした」
王の腹違いの弟であるエドアルドは軍人として名高く、今回の戦役でも司令官として多くの功績を挙げた人物だ。当然国民の人気は高く、特に軍内での支持は国王を圧倒している。そして、難民の処遇に対しては強行的な意見を持っていた。クーデター派の御輿には格好の人物といえた。
「エドアルド様は大変敬虔で、高潔な人物とお聞きしています。本

当にそのような計画に荷担なさったのですか？」
　エドアルドは敬虔な女神教の信者としても知られていた。教会への多額の寄付や奉仕活動を支援によって、教会内でも彼の評判は良かった。リータの疑問も当然だった。
「あの方はとりあえず無関係です。ですから、まだ生きておられます。ただ、療養を理由に、王城に幽閉されているようですが」
「幽閉……」
　次々と聞かされる重大事項に、リータは呆然とした。ただ、まだ肝心な点が分からない。彼女は恐る恐る聞いた。
「どうしてあなたが追われているのですか？　死んだことにされたのはなぜ？」
「私も関与を疑われ、襲われました。でも、自分の身だけは守ることができました。……これのおかげで」
　アルは腰に帯びた剣をちらりと見た。それは美しく輝く女神の剣だった。
「本来なら王城で武器を帯びることは許されません。しかし、『勇者』は別です。だから突然の攻撃を防げたんです。身を守る手段のなかった父たちは……」
　アルの顔に影がよぎった。彼は自分を見つめる女の目から目を反らし、続けた。
「陛下はクーデター計画をご存じだったのでしょう。だから、あんな形で……」
「ちょ、ちょっと待って下さい。確か魔物に襲われたと聞いているのですが」
「そうです。陛下はわざわざ生け捕りにした魔物を王城に放ち、我々を襲わせました」
「どうやって魔物に特定の人物を襲わせるんですか。彼らは女神の理から外れた存在です。操る術はないはずです」
　リータの言葉に、アルは皮肉めいた笑みを浮かべた。
「その通りです。だから、陛下は魔物の習性を利用しました。彼ら

には、『勇者』を感知して優先的に襲う性質があるんです」
リータは絶句した。魔物をそのように利用するなんて。聖典によれば、魔物や魔獣はこの世界の??女神の理に外れた存在であり、哀れみを持って排除すべき存在である。それを国王自ら粛正に使うなど！　シスターとしての教育を受けているリータには、それは背筋が凍るほど恐ろしいことだった。
「……私は陛下を守って戦いました。あの時は気づきませんでしたが、どういう訳か私を援護してくれる人はいませんでした。近くには近衛兵が大勢いたはずなんですが」
「それがどうして反逆罪に？　陛下を助けたのはあなたなんでしょう？」
リータの質問に、アルは目を伏せた。
「魔物を何とか撃退し、父達を助けようとした私に、陛下が仰いました……私にも反逆の意志があるのかと。もちろん否定しましたが、陛下は信じては下さいませんでした。捕らえられそうになった私は何とか逃げました」
「それで、亡くなったことにされた、と……」
アルは憂い顔のまま頷いた。
「さすがに『勇者』を表立って犯罪者扱いはできません。だから死んだことにして、密かに捕らえようと考えているのでしょう」
考えるだに恐ろしいことを立て続けに聞かされ、リータはめまいを感じた。彼女はアルから離れると、崩れるように座り込んだ。
どうしてこんな恐ろしいことが起こっているのだろう？　リータは思う。戦争は終わり、魔王は倒されたはずなのに、どうして国王陛下自らがこのような恐ろしいことをなさるのだろう？
リータは青ざめた顔で床を見つめていた。アルはしゃがんで、彼女の顔をのぞき込んだ。彼が大丈夫？　と声をかけると、リータは呆然と顔を上げて、小さな声で恐る恐る尋ねた。
「じゃあ、あの人たち……教会を襲ったのも国王陛下の？」

「国王直属の秘密部隊でしょう。私を追っているのも彼らです」
「村を襲ったのも？　魔獣も？」
アルは小さく頷き、答えた。
「生け捕りにしておいたのを放したのでしょうね」
「何でシスターソニアを……みんなを殺したの？」
「夜盗のしたことに見せかけるため、でしょう。君を名指しで連れ去ろうとしたことをカモフラージュする理由もあるかもしれない。……それに」
アルは少しだけ言葉を切った。
「私に見せつけたいんだと思います。早く出てこないと、私の大事な場所や人が傷つくことになるぞ、と」

小屋の中は静寂に包まれた。座り込んでうつむいているリータを、アルは静かに見下ろしていた。どうしようか逡巡している内に、彼は小屋に近づいてくる足音を聞いた。そっと外をうかがうと、足音の主は偵察から帰ったクロードだった。
空は白みかけており、もうじき朝が訪れることを告げていた。もう行かなければならない。アルは小屋の隅に置いてあった袋を手にし、傍らのリータに声をかけた。
「悪いけど、もう出発しないといけない。そろそろ追っ手がかかる頃です。……これに着替えて下さい。その服装は目立つから」
顔を上げた彼女にそっと着替えの入った袋を差し出し、彼は小屋から出ようとした。

その背中に、突然声が投げつけられた。
「あなたの、せいじゃないの？」
アルが振り返ると、感情のない顔で自分を見つめているリータと目があった。
「あなたが私にあんなこと言わなければ、あんなひどいことは起こらなかったんじゃないの？」

虚を突かれ、何を言っていいか分からないアルに、リータは更に言葉を投げつける。
「あなたのせいで村が襲われて、みんな殺されたんじゃないの？」
「そんなつもりは」
「……ひどすぎる……許せない」
リータの言葉に、アルは唇を噛みしめた。
「私は、村に帰る」
リータはゆっくりと立ち上がると、目の前の男を見据えて言った。
「あなたがここにいることを軍に言うわ」
「そんなこと……」
アルは苛立たしげにリータを見つめた。二人の間に冷たい空気が流れた。

「そんなことしたって、君が捕まってひどい目に遭うだけだよ」
沈黙を断ち切ったのはクロードだった。リータは見知らぬ男の登場に身を固くした。
「クロード」
アルも振り向いて男の名を呟いた。
「アル、もう街道には手配書が回ってる。こういう時だけは行動が早いよな。あいつら」
クロードはリータの方を向いて、人の良さそうな笑みを浮かべた。眉をひそめたリータに、クロードは語りかけた。
「俺はクロード。アルの幼なじみでちょっと前までは部下だった。よろしくね、リータちゃん」
なれなれしい口調に、リータの顔が更に渋くなり、その目には疑いの色が浮かんだ。
「冷たいねえ。まあ仕方ないかもしれないけど。……とにかく、村には帰らない方が良いよ」
「どうしてですか？」
リータは強い調子で聞き返した。クロードは肩をすくめて答えた。

「君も手配されてる。教会に夜盗が入るのを手引きした信仰の裏切り者としてね。ほら、この通り」

クロードは手にしたチラシを見せつけた。そこにはリータの名前と身体的な特徴、そして、お金のために恩人と仲間と信仰を裏切ったと書かれていた。

「冗談でしょ！」

そのあまりの内容に、リータは驚愕して顔色を失った。彼女はクロードからチラシを奪い取って、内容を確かめた。

そこには、セラ村と教会、および付属病院が夜盗に襲われ、シスターソニアと二人の見習いシスター、そして多数の患者が殺されたことが書かれていた。震える手でさらに読み進めると、夜盗はリータの手引きにより村内に侵入、彼女は彼らと共に逃走した、とあった。

しかし、何よりも彼女の目を引いたのは犠牲者の名前だった。そこにはマリーナの名が記されていた。リータは森の中で、確かに彼女の声を聞いた。それなのにどうして。リータの頭は更に混乱した。

「どうしてこんなことに」

文章を目で追いつつ、震える声でリータが呟いた。

「そういう訳だから、一緒に来ないと君も捕まって死罪だよ」

そんな……と呟いたきり、リータは茫然自失の状態に陥った。手にした紙片を握りしめ、どうしてこんなことになってしまったのか、私はこんなことはしていないと考える。様々なことがグルグルと頭の中を駆け巡り、彼女の思考を乱していた。

「ちなみアルが夜盗な」

そんな彼女を横目に、クロードはアルに別のチラシを渡した。

「これで罪名も付いたし、正式な逃亡者になったな」

クロードがアルの肩をポンと叩いた。アルは苦笑いを浮かべてクロードを見た後、リータに歩み寄った。

「申し訳ない」

アルはそう一言だけ言って、頭を下げた。リータはこみ上げてくる怒りをどうしていいか分からず、ただ目の前の男をにらみ付けるしかなかった。

8　理不尽と不安

鬱蒼とした森の中を二頭の馬が進んでゆく。先導する馬に乗るのはクロード、後ろに続く馬にはアルとリータが乗っていた。

彼らが進むのは、黒い森を抜けるのに使われていた古い街道だ。この街道は、かつては大陸を南北に横断するための主要なルートの一つだった。しかし、前国王の時代に宿場町まで整備された新しい街道が作られて以降、この道はあまり使われなくなっていた。

他に道があるのに、わざわざ呪われた森を通ろうとする物好きな者はそうそういない。使うのは黒い森に慣れた人々がほとんどだった。

彼ら以外ほとんど人気のない道を、馬たちは一路走り続ける。

リータはアルに抱えられるような格好で馬に乗っていた。彼女は手綱をきつく握り、体を硬くしてできるだけ男に触れないように縮こまっていた。声をかけられても、事務的に言葉を返すだけだった。そのうちに、アルも話そうとするのを止めた。

リータは昨夜の惨劇が思い出していた。血まみれのフィオナ、廊下に倒れる患者さん達、目の前で息絶えたシスターソニア。昨日だけで、あの狭い村で一体何人死んだのだろう？　怪我人だって、一人や二人ではすまないはずだ。リータの目頭が自然と熱くなる。

「どうかした？」

真後ろから声がかかる。リータの様子がおかしいことにアルも気がついたのだろう。

リータはとっさに眉間を押さえて涙をこらえた。泣いている場合じゃない。彼女は冷静になれと自分の心に言い聞かせた。

「……大丈夫です」

「そうですか？　……疲れたなら言って下さいね」

彼女の返事に、男は怪訝そうな声を返した。

前を向いて、流れていく景色を眺めながら、リータは自分の置かれた状況を客観的に捉えるよう努めた。そして、これから自分がどうしたいかを考えた。

やがて、彼女が定めた目標は二つ。何とかして自分にかけられた容疑を晴らし、村へ帰ること。そして、教会の許しを得て、シスターとしての生活に戻ること。

そのためにはどうしたら良いのか、この部分で彼女の思考は堂々巡りを始める。良い方法はそうそう浮かばない。このような途方もない事態はそもそも彼女の想像の範疇ではなかった。

また、『勇者の求婚』という頭の痛い問題も残っていた。シスターでいれば、彼女は勇者＝アルに従わない訳にはいかない。

そもそも、本当にこの人は勇者なのだろうか？　リータはぼんやりと思う。勇者様がこんなことをするなんて前代未聞だ。国家反逆の汚名を着せられ、死んだことにされた挙げ句、シスターをさらって逃亡する……とても正気の沙汰とは思えない。

勇者は女神の代行者だ。だから、勇者は誰よりも清廉潔白で公平な人物であるはずなのだ。リータがかつて読んだ勇者列伝に出てきたのは、皆そのような人物ばかりだった。

あれこれと思考を巡らせていたリータだったが、頭に巻いたスカーフの隙間からこぼれ出た髪が目に入った瞬間、現実に引き戻された。

茶色い髪を眺め、リータはその奇跡の力について思う。外見を一瞬で変えてしまうとは、まさしく奇跡だ。あんな魔法を実現させるのは、彼の持つ女神の剣の力が本物だからだ。それは彼が真に勇者である証だった。

リータはぼんやりと、朝方のことを思い返していた。

口論を切り上げ、服を着替えて小屋から出たリータは、外で待っていた男を見て驚いた。アルの髪の毛と、瞳の色が変わっていた。さらさらの金髪は赤茶けた色に変わり、濃い藍色だったはずの瞳は黒くなっていた。聞けば、それは勇者の魔法だという。手配書の人相書きから逃れるための一環だった。

「クロードとは兄弟ということにします」

アルの言葉に、リータはアルの横にいるクロードを改めて観察した。クロードは短く刈った赤みがかったブロンドと、黒い瞳をしている。ただ、顔立ちは全く似ていない。アルは憎たらしいほど整った顔立ちだったが、クロードは精悍で引き締まった親しみやすい顔をしていた。

似た色をまとっていても、二人が兄弟というのには少し無理があるようにリータには思えた。

「リータの髪と瞳の色も変えます」

「私も？」

リータの声に、アルが微かに笑った。

「ええ。だから、スカーフを取って下さい」

リータは血と泥に汚れた修道服から、動きやすさを優先したシンプルな服装に着替えていた。旅人のシャツとズボンを身に着け、上着を羽織り、頭にはスカーフを巻き付けている。

傍らにいるクロードに一瞬目を向けて、リータはスカーフを外すことを少しだけためらった。しかし、彼女は大人しくスカーフを取った。

露わになったリータの髪を見て、クロードがわずかにぎょっとしたのを、彼女は見逃さなかった。クロードは咎めるような視線をアルに飛ばした。

分かっていた反応だった。彼女は内心ため息をついたが、そのことは決して顔には出さなかった。

言われるまま後ろでまとめていた髪を下ろす。胸まである長い黒髪がすとんと落ちた。丸められて押さえつけられていたのに、その髪にはその名残すらない。真っ直ぐに伸びた黒いそれを、彼女は内心忌々しく思っていた。

「ｍｇｃ　ＣＨＧ　ＣＬＲ　ｈｒ　ｂｒｗ　ｐｌ　ｙ　ｂｒｗ」

リータの髪を撫でながら、アルが呪文を唱えていた。正直なところ、彼女は彼に触れられることに耐えられなかった。リータはわき上がる苛立ちと嫌悪感を押さえながら、詠唱が終わるのを待った。

傍らのクロードはしきりに意味ありげな視線をアルに送っていた。どうせ黒髪なんてやめておけという忠告でしょう？　そう思うならはっきりそう口にして、この人の暴走を止めてよ。友人で部下なんでしょう？　リータは心の中で毒づいた。

数秒の後、リータの黒髪は明るい茶色に変化した。今まで何をやっても簡単には色を変えてくれなかった髪が、あっさりと別の色をまとっている。

自分のものとは思えない髪を眺めながら、彼女は世界の理不尽さを一人噛みしめていた。

「見て下さい、湖が見えてきましたよ」

アルの言葉に、リータはハッとなった。前方の木陰からキラキラと光るものが見えた。

やがて木立を抜けると、目の前には青い水をたたえた大きな湖が広がっていた。

この湖は黒い森の中間あたりに存在する。森に囲まれた湖はとても静かで、この世のものとも知れぬ美しさを秘めていた。

馬を止めてしばし辺りの光景を眺めていた三人だったが、そのうちクロードが口を開いた。
「そろそろ休まないか？　もう大分来たし、追っ手はまだ大丈夫だろう」
「そうだな。どこか休める場所を見つけたら食事にしよう」
リータをちらりと見て、アルが返事をした。

三人は湖のほとりに座り込んで軽い昼食を取り始めた。馬たちも疲れを癒すように水を飲んでいる。
アルやクロードは二人で地図を見ながら何か話していた。慣れない乗馬に疲れていたリータは、二人には構わず、その絵画のような景色を飽きることなく眺めていた。

「これからどこへ行くつもりなのですか？」
男二人が一息ついたところを見計らって、リータはそっと口を開いた。
「バスカヴィルへ」
ここを通るならそれしかないだろう。半ば予想していたアルの言葉を、リータはうんざりして聞いた。
大陸南部の新興国バスカヴィル。魔王や戦争により土地を追われた人々が、大陸の南の海岸線と島々をつなげて作り上げた商業都市だ。主要な産業は漁業であったが、近年になって海運によりめざましい成長を遂げていた。
「国境を破る気ですか？」
バルディもカルムも、バスカヴィルとの人間の行き来を制限していた。それはかつてこの国が貧しかった頃、大飢饉により困窮した人々が多数北側に流れ込み、大問題になったことがあるからだ。
バスカヴィルがそれなり国家になった後も、国境は商人など許可を得た一部の人々以外は通れないはずだ。もう犯罪はたくさんだ。
リータは内心呟く。

「あてがあるんだ。心配しなくても大丈夫だよ」
クロードが笑いながら言った。しかし、リータの顔は晴れない。
「……本当に、あのような信仰の薄い地へ？」
バスカヴィルはリータにとって好ましい国ではなかった。それは、この国の宗教事情による。
バスカヴィルの首都アスキスはその昔、流れ者が最後に辿り着く場所であり、女神の見捨てた悪徳の町として知られていた。そんな成り立ちもあって、この国では他の国に比べて教会の数が少なく、一般に国民の信仰心も薄いと言われていた。
バスカヴィルが国家として整備された現在、アスキスは大陸でも有数の都市として知られている。一応教会は建っているが、バルディやカルムに比べれば規模は圧倒的に小さい。そのような土地に行くことに、リータは強い不安感を抱いていた。
彼女の様子を見て、アルが優しげな顔で語りかけた。
「新しくどこかへ行く時は、誰しも不安に思うものです。あなたならどこでもうまくやっていけますよ」
その見当違いな言葉に、リータはどう返して良いか分からず、黙ってアルを見つめた。アルはリータの視線に薄笑みを浮かべた。

「そろそろ行きましょうか」
アルの言葉にクロードがうなづいて立ち上がった。二人は少し離れた場所にいた馬の側で立ち止まり、また何か話し合っていた。リータもゆっくりと立ち上がって、重い足取りで二人に続いた。

9　少女と魔獣

？？奇妙だ。

少女は森の中を満たしている奇妙な気配に困惑していた。一見、森の中はいつも通り静かで穏やかだった。見回してもいつもと違うものは見当たらないし、上を見上げれば枝葉の隙間から柔らかな光と青空が見えた。

ふと、少女は微かな足音と人の話し声を聞いた。

？？人が来る。

道の先から聞こえてくる物音を敏感に察知し、少女は木陰に隠れた。息を潜めて様子を窺うと、それは剣を帯びた物々しい男達の一段だった。彼らは猟師と思しき男の先導で、森の奥へ進んでいった。

彼らの気配が消えた後、ふと少女はあることに気づいた。森の中に生き物の気配がないのだ。いつもならさえずっている小鳥たちの声がしない。足下の茂みの中で動き回っているネズミやウサギといった、小動物たちの気配も感じない。

まるで何かに怯えているようだと少女は思った。何が原因のなのかは分からないが、森の中で何かが起こっているのは明白だった。そして、いつもはほとんど見かけないタイプの人間が、多数森の中に入り込んでいる。

こんな人里近いところまで来るべきではなかったと、少女は後悔した。用は済んだのだから早く戻ろう。彼女は帰り道を急いだ。

不意に、少女は生臭い匂いを捕らえた。獣の匂いだ。彼女はその不快な匂いに顔をしかめた。そっと周囲を見回すが、匂いの主は見当たらない。彼女はできるだけ自分の気配を消して、いつも以上に慎重に森を進んだ。しかし、どれだけ歩いても、その気配は彼女から離れてくれない。

？？困ったな。ここじゃどうしようもない。

少女は自分の不運を呪った。とにかく急ごう。そう思って彼女は湖へと通じる道を早足で進んだ。

リータ達三人は、湖に沿って西に向かって歩いていた。青く輝く湖面は鏡のように森の木々を映していて、神秘的な雰囲気をたたえていた。

先を行くクロードは、ちらりと後ろを振り返ってアルとリータの様子を観察した。

二人の様子はぎこちないものだった。会話をしている様子もない。特にリータは手綱を握りしめ、背後にいる男の存在に彼女は身を固くしていた。その目は無表情に湖を見つめ、彼女は自分の殻に閉じこもっているように見えた。

前途多難だ、クロードは一人ため息をついた。一つ増えた頭痛の種に、彼はこめかみを押さえた。

アルには幸せになって欲しい。そうクロードは願っている。彼の家はアルの家に代々仕えている。また、彼の母親はアルの乳母でもあった。

クロードは子供の頃からずっとアルを見守ってきた。彼にとって、アルは弟のような存在だった。その弟が多く苦労と犠牲の果てにようやく掴もうとした願いを、クロードは何とか成就させてやりたいと思っていた。

ただ、一方でリータに対する同情心も芽生えていた。仲間や顔見知りを目の前で殺された挙げ句、その原因となった男にさらわれて、逃亡を余儀なくされている女。彼女の表情からは混乱と憔悴ぶりが窺われた。

ずっと前に別れたきりの幼なじみに突然求婚され、その男が原因

で村を襲われ、挙げ句に犯罪者にされてしまった彼女。リータにとってこれは降って沸いた悪夢に過ぎないだろうとクロードは思う。大騒ぎして暴れたとしても何の不思議もない。

だが、リータは一時的に怒りこそ露わにしたものの、事態を把握した後は大人しく彼らについてきた。相手が『勇者』だからなのかもしれないが、不承不承ながらも彼らに従う彼女を、クロードは内心評価していた。

しかしその一方で、クロードはリータを警戒してもいた。今後、彼女は彼らの目を盗んで教会と接触しようとするだろう。今回の一件に女神教会が関わっていた可能性は高い。アルの身の安全を考えれば、それはどうしても避けたい事態だった。

リータがアルを好いているなら、そんなことは起こらないだろう。しかし、彼女がアルの恋人ではないと知り、クロードは彼女の裏切りを想定せざるを得なくなった。そして最悪の場合は、自分が手を下すしかない、そう彼は考えていた。

そんなことにならなければ良いが。クロードは密かに祈った。

湖の西端まで来たところで、アルはふと何かを感じて立ち止まった。それに気づいたクロードも馬を止めた。

「どうした？」

クロードは声を張り上げた。アルは口元に手をやってから、そっと右手の森を指さした。

三人は森の方に耳を澄ました。ガサガサと、微かに何かが近づいてくるような物音がした。男二人は顔を見合わせると、馬を下り、武器を手にした。馬は隠しようがないので、少し離れた場所に待機させた。そして、三人は少し離れた森の茂みに入り、身を隠した。

音が近づいてくる。それは誰かが走ってくる音だった。

「追っ手か？」

「さあな」
男二人が短く会話を交わす。三人は息を潜めて、音の主が現れるのを待った。
ガサガサという音は、もうすぐ近くまで迫っていた。緊張しながら音の先に目を向けていると、やがて一つの影が姿を現した。
影は小さく、どう見ても追っ手の者ではなかった。
「子供？」
その姿に、リータはホッとして思わず声を上げた。肩で息をしていた影は、リータの声に驚いたのか、三人が隠れている方へと目を向けた。頭からすっぽりとフードを被っていて、その顔は見えなかった。
「馬鹿、喋るな。子供だからって油断するな」
クロードがリータに囁いた。彼女はハッとして視線を落とした。
影は彼らのいる茂みを凝視していた。しかし、やがて何かを思い出したように、自分が来た方向に目を向けた。
「何か来た」
アルが呟く。近づいてくる音は、子供のものだけではなかった。先ほどよりも豪快な音を立てて、何かが近づいていた。子供は慌てたように駆けだし、更に南へと向かって行く。

「ガォォォォッ！」
突然、獣の声が響いた。先ほど子供が現れた茂みから、大きな影が躍り出た。獣は茂みから出たところでいったん立ち止まり、再度威嚇するようにうなり声をあげた。
「……魔獣だ」
アルの呟きに、リータは凍り付いた。獣はイノシシを二回りほど大きくしたような姿で、口からは鋭い牙が覗いていた。
「ひっ！」
子供は振り向いて、悲鳴をあげた。獣の目は血走り、目の前にい

る獲物に完全に狙いをつけていた。子供は獣と目を合わせたまま動けないようだった。

「危ない！　早く逃げて！」

その様子を見て、リータは反射的に叫んでいた。男二人が押さえる間もなく、彼女は茂みから飛び出した。獣が彼女の方を向いた。

「早く逃げて！」

リータは子供に向かって再度叫んだ。獣の威嚇が、今度は彼女に向かって発せられた。その恐ろしさに足がすくむ。だが、恐怖を必死に押さえて、彼女は更に叫んだ。

「こっちよ！　化け物！」

獣がリータの方に向かってきた。その速度はとても速く、人の足で逃げ切れるものではなかった。獣の血走った目が、彼女をにらみ付けていた。もうダメだ。そう悟ったリータは目をつぶって、その瞬間を待った。

衝撃は、なぜか正面ではなく右から来た。リータは突き飛ばされて、草地に転がった。

「ギャァァァ！」

魔獣の悲痛な声が辺りに響いた。リータが恐る恐る目を開けると、すぐ目の前に先ほどの獣が倒れていた。

獣の首筋はクロードの槍によって刺し貫かれていた。彼が槍を抜くと、獣の体からは大量の血が吹き出した。まだピクピクと動いていた獣の胴体を、クロードはもう一度刺した。今度こそ、魔獣は動かなくなった。

「大丈夫ですか？」

横から声をかけられてリータが振り向くと、そこにはアルが立っていた。埃まみれの彼の姿に、リータは自分がアルによって助けられたことに気づいた。

「……大丈夫です。ありがとうございました」
リータが礼を言うと、アルはそっと手を差しだした。一瞬ためらったが、彼女は素直に手を借りて立ち上がった。足がふらついたが、彼女は何とかこらえた。先ほどの恐怖の余韻で、彼女の頭は呆然としていた。
「二人とも平気か？」
険しい顔のクロードが、二人に声をかけた。二人が頷くと、クロードは厳しい表情をリータに向けて言った。
「何であんなことを」
それはリータへの非難の言葉だった。
「子供や弱者を守ることは、私たちの義務です」
リータの反論に、クロードが呆れた声で返す。
「自分の身を犠牲にしてもか？」
「そうです。聖典にもそう書かれています」
「なら、他人をそれに巻き込むな」
「巻き込んでなどいません」
「結局俺があれを倒したんだよ？　君が危ない目に遭いそうになったら、俺らは君を助けないといけない」
「でも……」
「そのくらいにしておけ、クロード」
リータは反論しようとしたが、その言葉はアルに遮られた。アルはリータの顔をのぞき込んで言った。
「私はあなたを守ります。でも、自分から危険に飛び込むような真似は、今は止めて下さい」
「あなたは勇者でしょ？　どうして……」
そう言いかけて、彼女は言葉を止めた。視界の端に、先ほどの子供の姿が見えたからだ。リータの視線に、男二人も傍らの子供に目を向けた。
子供はいつの間にか彼らの側まで来ており、所在なげに佇んでい

た。子供の顔はすっぽりとフードで隠れていて、表情も分からない。
「大丈夫？　怪我はない？」
リータはかがんで、子供に声をかけた。子供の頭がこくんと一回縦に振れた。
「一人？　お父さんかお母さんは？」
子供の頭は横に振られた。こんなところに子供が一人？　リータは不思議に思って、この子をどうするべきか思案していた。
「……助けてくれてありがとう」
不意に、子供が声を出した。その高く澄んだ声だった。もしかして女の子？　リータが疑問に思っていると、子供は突然アルを指さして言った。
「あなたは剣の担い手？」
一瞬何のことか分からなかったが、リータはすぐにそれが古い文献における勇者の異名であることを思い出した。
「そうだよ」
アルが返事を返した。その顔は微笑んでいたが、瞳には訝しげな色が滲んでいた。
「ならば覚えていて。私たちは今でも約定を守っているから」
そう言い放つと、子供は身を翻して南の方へと走って行った。止めようとしたリータだったが、身を返した瞬間にフードから覗いた瞳に目を奪われ、声をかけそびれてしまった。子供の姿はあっという間に森の中に消えた。

「何だったんだ、あれ？」
クロードが呟いた。
「森の民……」
リータは呆然として言った言葉に、二人も驚いたような声を上げた。
「本当か？」
「はい、あの子、赤い目をしていました」

黒い森の最深部に住む、森の民。彼らは外界と交わることがなく、その実態はほとんど知られていなかった。わずかに伝わるところによると、彼らは皆赤い目を持ち、非常に美しい外見をしているという。また、彼らは長命で、独特の魔法を使うという。

「……約定と言っていたな」

アルの言葉に、リータは彼らについて重要なことを、もう一つ思い出した。

『約定破り』それは森の民についたもう一つの異名だった。彼らはかつて魔王討伐に力を貸していた。しかし、ある時から彼らはその要請を拒むようになった。以降、彼らは約定破りと罵られる対象になった。

しばしの間、子供が消えた方を見つめていた三人だったが、やがてアルが口を開いた。

「……そろそろ行きましょう」

「そうだな……そうだ、あれはどうする？」

クロードは倒れている魔獣に視線をやった。

「放っておけ、今は先に進むべきだ」

「そうだな」

クロードは隠れていた馬を連れ出して来た。彼らは森の中を西に進む道へと足を踏み入れた。

１０　不可思議な状況と王都からの使者

「コジモ様、レナート達が魔獣を仕留めたと報告がありました」
張りあげられた男の大声に、焼けた小屋や牧場の後始末をしていた人々の手が止まった。火事で焼けた村はずれの牧場にもたらされた報告に、周囲の人々から驚嘆や恐怖が入り交じったざわめきが起こった。
「ご苦労。種類は？」
「鹿と思われます。村の中央広場に運んでいるところです」
「そうか。魔獣の処理はエリオに任せているから伝えておくように。あと、レナート達には報奨金を弾むように」
「了解いたしました」
初老の男の言葉を聞くと、報告者は一礼して再び走っていってしまった。コジモ達を遠巻きに見ていた子供達がそれに続く。きっと魔獣を見に行くのだろう。

「朝からこれで三匹目だぞ。一体何匹いるんだ？」
コジモは傍らの秘書に話しかけた。
「昨日の夜から数えたら五匹目です……この数は明らかに異常です」
神妙な顔つきの秘書がメモを書きながら答えた。彼らは昨夜セラ村で起こった火災と襲撃の様子を視察しに来ていた。
現在いるのは村はずれの牧場で、家畜小屋や農具を収める小屋がすっかり焼け落ちていた。当然中にいた牛もほとんど死んでしまい、牧場の主は半ば呆然としながら後片付けを行っていた。

コジモ・カナレスはセラ村の周辺地域を治める領主である。しかし、その風貌はどこにでもいそうな穏やかな初老の男である。服装も決して気取ったものでも見るからに高価なものでもない。ただ、ピンと伸びた背筋や礼儀正しい態度や物腰は、彼があなどれない紳

士であることを示していた。
彼は病弱な妻のために環境の良いセラ村に居を構えていた。若い頃は苦労していた彼は人当たりも良く、領主だからといって領民を見下すようなことは決してしないし、家族にもさせなかった。領地の経営手腕もなかなかのものだと評価されており、当然、領民とも友好的な関係にあった。

「全く、何が起こっているんだろうな？」
牧場から次の被害箇所に向かいながら、コジモは半ば呆れたように呟いた。傍らにいた村人の女が声を上げた。
「きっと女神のお恵みです」
別の男がそう言って、不敵な笑みを浮かべた。
「かもな。何か今回の魔獣は様子がおかしいんだろ？　木に突進したり小屋をめちゃくちゃにしたりして、人には目もくれないとか」
また別の男が受けて答えた。
「らしいな。攻撃してもほとんど反撃してこないとか」
「だから、女神様の祝福よ。不幸に見舞われた村に恩寵を下さったのよ」
女の言葉に、一同がうんうんと頷いた。
「まあ確かに、これだけ魔獣が捕れれば、昨夜の一件の被害分は十分にまかなえるな」
コジモは内心苦笑いしつつ、彼らに同意した。

魔獣は普通の獣が、魔王の影響によって大型化、狂暴化した生き物である。人や家畜を見ると、その凶悪な爪や牙で見境なく襲ってくる。しかも彼らの体は強靱なため、ごく普通の獣に比べ、殺すのに大変手間と時間がかかる。もちろん、命の危険も高い。
しかし一方で、魔獣の持つ立派な角や牙は珍重され、高値で取引されていた。毛皮も丈夫で大きいため、通常の毛皮よりも割高で売れた。

今回村で捕獲した魔獣は既に五匹。元がどんな獣だったかによってその価値は変わってくるが、火事や襲撃による村の被害を補って余りあるものだった。

また、魔獣の様子がおかしいことは、普段なら魔獣を恐れるだけの村人達も勢いづいていた。村を襲われた強い怒りが彼らに勇気を与えた。また病院襲撃で仲間を失った狩人達の勢いも激しく、弔い合戦とばかりに目を血走らせて森に入っていた。

「何を言ってらっしゃるのですか。魔獣に村を襲われたんですよ」

渋い顔でたしなめた秘書に、別の男が更に反論した。

「でも魔獣に襲われたのに村では誰も死んでないぞ。火事で何人か怪我したくらいで」

「教会はひどい有様だったじゃないか。シスターソニアまで亡くなって……」

秘書の言葉に、別の女が割って入る。

「あれは夜盗なんでしょ？　こんな事件に乗じるなんて人として最低だわ」

「そうだ、シスターを手にかけるなんて最低だ！」

「魔獣より、そっちを早く捕まえて欲しいもんだ」

村人達は口々に話す。

「そちらは国境警備隊に任せた。直に捕まるだろう」

コジモの言葉に、村人が呆れた口調で返した。

「何を言ってらっしゃるんですか！　あいつら、リータが夜盗の仲間だとか言ってるんですよ」

「そうですよ、あのリータが教会を襲わせてシスターソニアを殺す手引きをするなんてありえませんよ」

主に教会の手伝いをしていた女達が口々に叫んだ。

「男でもできたんじゃねえのか」

一人の男がいやらしい笑いを浮かべて言った。

「あの子はそんな子じゃないよ。ついこの間も、やっと正式なシス

ターになれるって喜んでたんだから」
でも、と食い下がる男に、別の女が声を張りあげた。
「大体警備隊はあてにならないわ。ならず者達とつるんでるって噂もあるじゃない」
「そうよ。隣村の事件だって、犯人を金で見逃してやったって話じゃない」
女達の批判の矛先が警備隊に向いた。彼女らは口々に文句を言っていたが、コジモが軽く咳払いをすると、ハッとして気まずい顔をした。
「そう言ってやるな。彼らだってちゃんと仕事はしている。昨日だって助けに来てくれただろう？　今も村に何人か居るんだから、口は慎みなさい」
領主のきっぱりとした口調に、人々は押し黙った。しかし、その表情には不審の色が浮かんでいた。
「……リータのことは同感だ。私も彼女があんなことをしたとは思わない。それは警備隊にも伝えている」
だけど、と言いよどむ女に、コジモは微笑んだ。
「犯人が捕まったら、リータの疑いも晴れるだろう。その時には私も当然助力する。……今はただ、彼女の無事を祈るだけだよ」

コジモ自身、リータの無事と無罪を信じたいと思っていた。リータはコジモの友人の娘で、愛娘の友人だった。
頭が良く、勤勉で真面目な娘だと、コジモはリータを評価していた。いずれは正式なシスターとなり、彼女の父と同じく、医師として多くの人を助けるだろう。それは死んだ友人の願いでもあった。
厳しいシスター修行に耐えられる娘は少ない。女は結婚して子供を産み育てることが一般的なこの世界で、生涯を通じて恋愛もできないシスターという職は、ほとんどの女性にとって過酷なものだ。
しかし、リータにとっては違った。コジモは彼女の髪を見て、この田舎では彼女が『一般的な』人生をまず歩めないことを知った。

そして、彼女の父親の強い願いを受けて、娘の『学友』という形で教育を受けさせてやった。その成果は十分で、リータは教師達から高い評価を得た。それにつられ、テレーザも勉強するようになった。それは彼にとって嬉しいことだった。

リータにはシスターになれるだけの十分な才能とそのための努力を惜しまない強い意志があった。何より、尊敬する父と同じ道を歩みたいという思いがあった。だからこそコジモは、父親を失って孤児になった彼女を援助し、教会に入る手助けをした。

ただ、コジモの好意は友人への思いと、幼い頃から見てきた少女への同情心だけから発するものではなかった。彼は、リータのシスターとしての素質にかけたのだ。コジモは、リータが教会内で出世していくためのしたたかさを持ち合わせていると思っていた。そのことは、彼女が見習いになる前のある一件でも証明されていた。

シスターを輩出するのは村の栄誉である。それに、リータがシスターとして出世すれば、それはコジモにとっても利益のあることだった。高位のシスターとつながりを持つことは、領地の統治にもプラスに働く。民衆から強い信仰を集めるシスターは、統治者にとって格好の道具でもあった。

そんな訳もあって、コジモはこのような不名誉な形で、リータを失いたくないと思っていた。実際、彼の知るリータは盗賊などと関わる娘ではなかった。そして、彼女が怪しげな男に惑わされることなどないという確信も持っていた。

「お父様！」

屋敷に戻ったコジモに、テレーザが駆け寄ってきた。

「テレーザ、どうした？」

「リータのこと、何か分かりましたか？」

テレーザの顔は不安と心配で曇っていた。愛娘は親友のことで非常に心を痛めている様子だった。

「まだ何も。ただ、私もあの子があんなことをするとは思ってはいない。村人達もそう思っているようだ」
「当たり前です！　リータはシスターになって多くの人の役に立ちたいと願っていたから、あんなに熱心に勉強して働いていたんです。それを……！」
テレーザは悔しそうな表情を浮かべた。友人が『信仰の裏切り者』などという言葉で侮辱されたことを、テレーザは誰よりも怒っていた。
「気持ちは分かるよ、テレーザ。私も何とかしてみるから、落ち着きなさい」
「はい……」
コジモの穏やかで優しい言葉に、テレーザは少しだけ冷静さを取り戻した。
「そうでした、お父様。お客様がお待ちです」
「誰だ？」
テレーザは少し怪訝そうな表情を浮かべて言った。
「シスターエミーリア。王都の司教様です」

コジモが応接間に入ると、そこには修道服を着た女がいた。彼女はコジモの姿を認めると立ち上がり、優雅に挨拶をした。その物腰からは、彼女の高い教養と賢さが窺われた。
彼女の被るベールには、王都の司教の地位を示す銀色の縁取りがあしらわれていた。胸に下がるのは正式なシスターの証であるペンダントで、通常白い石がはまっている箇所に、赤い石が埋められていた。それは彼女が教会の秘蹟に関わりのある証でもあった。間違いなく、エミーリアは高位にあるシスターだった。
コジモは彼女がなぜこんな田舎に来たのか、その理由にさっぱり心当たりがなかった。しかし、一方でこれはチャンスだとも思った。ここで彼女の協力が得られれば、リータを罪から助けられる確率が上がるだろう。

「ようこそ、シスターエミーリア。お会いできて光栄です」
コジモの言葉に、女は薄笑みを浮かべた。
「こちらこそ。カナレス家当主、コジモ様」
エミーリアは美しい女だった。歳はまだ三十代半ばと言ったところだろうか。純白のシスター服に身を包み、微笑む彼女はまさに理想のシスター像そのものだった。
「今日はどのようなご用件で？　実は昨夜村で一騒動ありましてな。申し訳ありませんが、たてこんでおりまして」
「もちろん分かっております。シスターソニアのことは残念です。それに見習いの子達や病院の患者さんも多く巻き込まれたと聞いています」
メイドが紅茶を運んできたので、カップを口に運びながら、コジモは言った。
「はい。……本当に残念です」
「怪我人もいるようですが、医師や看護師は足りていますか？　必要なら王都から派遣いたしますよ」
「それはありがたい。ですが、隣村の教会から何人か来てくれたので大丈夫です」
「そうですか。でも、必要な時はいつでも言って下さいね。ここの教会の再建にも、最大限協力いたしますから」
「感謝いたします」
コジモが礼を言うと、エミーリアは意味ありげに笑って見せた。そして、コジモの背後に控えていた秘書とメイドに視線をやった。
「申し訳ありませんが、人払いをお願いできますか？」
コジモは女の意図が分からなかったが、言う通りに二人を部屋から出した。
「さて、どのようなお話でしょうか？　できれば手短にお願いしたい。今は忙しいので」

二人がいなくなったのを確認すると、エミーリアはにっこりと微笑んで言った。
「分かりましたわ。では、単刀直入に申し上げます。本日はこの村の修道院に所属する見習いシスター、リータの一件で参りました」
話そうとしていた娘の名前を先に出され、コジモは内心狼狽した。なぜ王都のシスターがリータに興味を持つのだろうか？　彼の狼狽を知ってか知らずか、エミーリアは話を続けた。その顔は真面目で、笑みは消えていた。
「彼女は今国境警備隊に指名手配されていますね」
「ええ」
「実は、我々も彼女を捜しているのです」
「捜している？」
コジモは怪訝な声を上げた。彼女がそこまで注目される理由に、彼は全く思い当たらなかった。
「彼女は現在、とある人物と共に行動していると思われます」
「とある人物とは誰です？　まさか……本当に盗賊と！」
慌てたコジモの言葉を、エミーリアは即座に否定した。
「女神に誓って、それは違うと申し上げます。ただ、申し訳ないのですが、そのお方が誰なのかは申し上げられません。教会に関わる重要な人物とだけ言っておきましょう」
「それで？」
コジモは真剣な顔つきで女の話に聞き入っていた。
「その方は、今とある理由から追われています。リータはその逃避行に巻き込まれたのです」
「何ですって？」
コジモが驚きの声を上げると、エミーリアは再び笑みを浮かべた。
「私たちは彼女と、そして彼女と一緒にいるはずの方をお救いしたいのです」
「それならどうして警備隊は夜盗の仲間としてリータを追っているのですか？」

コジモの当然の疑問に、女はかぶりを振った。
「それは私にも分かりません。ですが、彼女への疑いを晴らすためにも、軍よりも早く彼女を保護したいのです」
「つまり、リータは、言われているような『信仰の裏切り者』ではないと？」
「はい」
エミーリアの言葉に、コジモはほっとした。やはりリータは無実なのだ。テレーザにもこのことを早く伝えてやりたかった。
「分かりました。こちらとしても、リータには無事帰ってきて欲しいと思っています。喜んで協力いたします」
エミーリアの顔にほっとしたような笑みが浮かんだ。
「ではもし彼女の居場所が分かったら、連絡を下さい。こちらにはしばらくシスターソニアの代理を置きます。彼女に伝言をお渡し下さい」
コジモが了解の意志を伝えると、エミーリアも感謝の意を述べた。ところがその直後、女は再び思いがけないことを言った。

「……もう一つお願いがあるのですが」
「何ですかな？」
「我々がリータを捜していることは、他の方には内密にしていただきたいのです」
コジモは眉をひそめて、その理由を尋ねた。
「彼女の立場は非常にあやふやで危険なものです。一緒に行動している『とあるお方』のこともありますので、教会も極秘裏に動いているのです」
どうにもはっきりとしない話で、コジモは何とか詳細を聞こうとしたが、結局それ以上のことは分からなかった。彼は分からないまま、それでも女と二つ目の約束を交わした。

シスターエミーリアが帰り、自室に戻ったコジモをテレーザが待

っていた。彼女は案の定、シスターの話の内容を聞きたがった。そして、何かリータのことで分かったことがないかと聞いた。

コジモは先ほど聞いたことを話してやりたかったが、エミーリアとの約束があるために口に出すことはできなかった。ただ、リータの冤罪について教会が話を聞いてくれたということだけは伝えた。

テレーザは嬉しそうな顔をした。

部屋から出て行こうとしたテレーザを呼び止め、コジモは言った。

「テレーザ、分かっていると思うが、もしリータから何か連絡があったら、すぐ私に伝えるんだ」

「当然よ、お父様。すぐに伝えるわ」

テレーザはそのまま部屋を出て行った。

11　二度目の夜と幼なじみの面影

二度目の夜が訪れた。

夜間も先へ進むのだろうかと内心危惧していたリータだったが、彼女の心配は杞憂に終わった。

空が赤く染まり、薄闇へと変わる時間になった頃、三人は突如道を外れて森の中へと入った。クロードの先導で行った先には小さな小屋があった。男二人はその小屋に誰もいないことを確認すると、リータの制止も構わず、その中に入って行ってしまった。

彼らの呼び声に、仕方なくリータも小屋に入った。中は意外と広く、わずかに袋や荒縄が放置されているだけだった。彼女が朝目覚めた小屋にも似ていたが、あの小屋は村の狩人達が使う狩猟用の小屋だ。そのため、あちらには狩猟道具も置かれていたが、この小屋には見当たらない。

「ここは？　勝手に使ってよろしいのでしょうか……」

リータの疑問に、男達は笑った。

「良いんだよ。ここ、ちょっと前に捕まった盗賊がアジトに使ってた所だから」

盗賊のアジトという言葉に、リータの顔はこわばった。それを見て、クロードが慌てて付け足した。

「もう連中は捕まったんだ。今はオルコットで裁判を待ってる。襲われたりしないから安心して」

「なぜそんな人たちの使っていた場所を知っていらっしゃるんですか？」

リータは訝しげに尋ねた。

「ちょっとね……ツテがあるんだ」

「……随分準備周到ですね」

リータの呟きに反応した二人の微笑みに、彼女は何か含むところ

を感じたが、それを問い詰める気力はすでになかった。リータはそれ以上何も言わず、アルが勧めるままに座り込んで、壁に寄りかかってふぅとため息をついた。

「ここからオルコットまではどのくらいですか？」

堅いパンをかじりながら、リータは尋ねた。

「あと半日……といったところでしょうか」

彼らの進む街道は、湖を過ぎてからは森の中心部を迂回するように南西を斜めに走っている。その先には国境の町オルコットがある。オルコットはこの大陸の中央に位置し、バルディとバスカヴィル、そして女神教会領に接している。リータは行ったことがないが、巡礼者や商人の集まる、非常に賑やかな町であると聞いていた。

目的地であるバスカヴィルの首都アスキスは黒い森の南に存在する。バルディからバスカヴィルに行くなら森を南へと突っ切るのが最短ルートであるが、そのような便利な道は存在しない。その理由は単純で、黒い森が危険だからだ。

バルディ側に広がる黒い森は、十分な知識を持った上で気をつけて行動すればそれほど危険ではない。だから、セラ村やその近隣住民にとって黒い森は生活の一部だ。リータ達が進む旧街道も、猟師などごく少数ではあったが、移動のために利用していた。

しかし、それはあくまでバルディに近い、表層のごく一部分のことだ。湖から南に広がる森の深淵部は人の領域ではない。年中霧に覆われている森は、立ち入る者の感覚を誤らせ、道を迷わせるという。そして、鬱蒼とした草木の影には恐ろしい猛獣が潜んでいる。哀れにも迷い込んだ者は、混乱と恐怖の中、二度と森を出ることが出来ないと言われている。

実際、森に最も慣れている猟師達ですら、最深部には近づかない。もちろんまともな地図もないから、旅人でもあえて通ろうとする者はいない。安易に足を踏み入れても、森の付近の村々に子供を脅す

噂話が一つ増えるだけだ。
彼らが通ってきた街道は、人間の世界と森を分ける境界線でもあった。

「あの南の道に行ければ良かったんだけど……」
アルが地図を見ながら呟いた。
「無理ですよ！　猟師の皆さんだって近づかないのに。大体ろくな道なんてないはずです。あったとしてもただの獣道でしょう」
不穏な言葉に、リータは慌てて反論した。
「あんな女の子が一人で行ったんだ。俺らにだって行けるんじゃないの？」
クロードが面白がるような口調で賛同の意を示した。
「ご冗談を！　彼女は森の民です。私たちとは違います」
リータは昼間見た子供の、燃えるような赤い瞳を思い出した。
「それに、森の南側は険しい崖になっていると言うじゃないですか。」
黒い森の縦断には、地形という重大な問題もあった。森の最南部は切り立った崖になっている。その足下にあるアスキスの町に入るには、かなり迂回しなければならないらしい。
ろくな地図も案内もなしに、このような道を辿るのは自殺行為だ。勇者や歴戦の戦士だろうが、黒い森の南に踏み込むのは無謀としか言いようがなかった。
「リータがそんなに嫌なら……」
アルは少し残念そうな顔だった。ただでさえ恐ろしい目に遭っているのに、これ以上は勘弁して欲しい。親愛なる女神様、これは一体どのような試練でしょうか？　リータは内心ため息をついた。

「でも、昔は通れたらしいんだ……」
アルがぼそりと呟いた。
「そうなのか？」

クロードの言葉に、アルは頷いた。
「古い歴史書を見てると、森を縦断していたとしか考えられない記述がある」
「そうなの？」
リータも目を丸くした。そんな話は聞いたことがなかった。
「どうやら、森の民が森の安全を担保していたようです。『約定破り』の前の話ですが。その状態が今でも続いていたら、この道も放棄されなかったかもしれません」
「ああ、その話なら聞いたことがあります。昔は湖の近くに、彼らの村があったとか……」
リータはかつてテレーザの家で読んだ郷土史に、そのようなことが書いてあったことを思い出した。
「そうです！　裏切り者と見なされた彼らは、人間の襲撃を受けました。そして、森の奥へと消えたのです」
「でもさ、さっきの子供、自分たちは約定を守ってるって言ってたぜ。どういう意味だ？」
「約定とは簡単に言えば、魔王が現れた際は協力して立ち向かうという内容だ。実際、彼らは六代目の時代辺りまでは人間と一緒に戦っている記録がある」
「じゃあ何で裏切った？」
クロードの何気ない言葉に、アルの瞳がきらりと輝いた。それを見たクロードが一瞬やってしまったという顔をした。
「諸説あるけれど、有力な説の一つは……」
「あ、いいからいいから！　俺、聞いてもどうせ分かんないし」
熱弁をふるおうとしたアルを遮るように、クロードは言った。不満げな表情のアルに、リータはハッとした。その横顔には、確かに幼なじみの少年の面影が残っていた。
『彼』もこうして話をすることが好きだった。自説を披露し始めると、いつまでも話し続けて止めようとしない。反論や意見をすれば、更に熱くなって議論しようとした。彼が最も嫌がったのは話を

適当に遮られること、そして自分の意見を軽んじられることだった。
彼は本当に『アル』なのだ。リータは初めてそれを実感したような気がした。

「リータちゃん、どうしたの？　そんな熱い目でアルを見つめて」
クロードの声にリータは自分のした失敗に気づいた。話を変えるチャンスとばかりに、クロードはニヤニヤしている。
「……私の顔に何かついていますか？」
顔をまじまじと見つめていたのを気づかれ、リータは思わず目を反らした。
「ちょっと、気になることがありまして」
慌てて取り繕ったリータだったが、その顔が赤くなっているのを彼女は自覚していた。ちらりと見ると、アルもまた嬉しそうな顔をしていた。
「……どうして魔獣がこんなにいるんでしょう？」
リータが何とか口にした疑問に、アルとクロードは瞬時に表情を変えた。そして意味ありげに視線を交わした。
「私たちを追っている人たちは、そんなに沢山の魔獣を森に放したのでしょうか？」
アルは少し考えてから答えた。
「彼らもそんなに沢山の魔獣を持っているとは思いません。あれを生きたまま捕らえて、しかも生かしておくのはとても難しいと思います。連中が放った魔獣は村を襲ったものだけでしょう。それ以上の数を、彼らに管理できるとは思いませんね」
しかし、リータは納得がいかない。
「でも、昨日も狩りの最中に襲われた方がいらっしゃるんですよ。調べたら、他の町でも同様の事例がありました」
リータが周辺地区での事件について話すと、アルは軽く頷いた。
「魔獣は魔王の魔力に侵されただけの、ただの獣です。魔王がいなくなった今、彼らは徐々に徐々に元の落ち着きを取り戻しているは

ずです。実際、被害は減っているでしょう？」
「……では、何か他に理由があるのですか？」
当然の彼女の疑問に、アルは端正な眉をひそめた。
「まさか、魔王が生きているとか……仰いませんよね？」
リータの言葉に、二人はふっと表情を和らげた。
「それはありません。」
アルははっきりと断言した。
「……ただ、私の存在が彼らをいらだたせている可能性がありますね」
聞き返したリータに、アルは慎重な面持ちで答えた。
「私の？？勇者の気配に、魔獣としての性質が刺激されているのかも。王城で私達を襲った、あの魔物のように」
アルの声色に暗い影がよぎった。リータはさすがにいたたまれなくなって、急いで話題を変えた。
「……では、先ほどの魔獣も？」
「そうかもしれません」
あの子供を追いかけていた魔獣。あれも実は子供ではなく、彼女が逃げる方向に『勇者』の気配を感じていたのかもしれない。そう考えて、リータは今更ながらある可能性に思い至った。
「もしかして、私たちは常に魔獣に狙われているんですか？」
青くなったリータに、アルは優しい声で答えた。
「大丈夫。その可能性はすでに対応済みです」
「え？」
「とりあえず、『勇者の魔法』とでも言っておきますか。私にも、魔獣や魔物を遠ざけておく位のことはできるんですよ」
「でも、さっきは……」
リータの言葉にアルは苦笑した。
「あれは彼女を追いかけていたんでしょう。それがあの湖で私と突然接近し、隠していた本性を表したんでしょう」
彼女は感嘆の声を上げた。『勇者の魔法』は思いもがけないもの

ばかりだった。さらにクロードが付け加えた。
「それに、もうこの辺りに魔獣はいないと思うよ。昨日の村で少なくとも二匹、さっきので三匹。いくら悪名高い黒い森といえど、この狭い範囲にそう何匹もいないはずだ」
クロードの微笑みに、リータもつられて笑みを返した。
「それはそうですね。……そう考えると、さっきのはちょっともったいなかったかもしれません」
「確かに、牙だけでも取ってくれれば良かった」
アルだけは表情にわずかな憂いを乗せていた。しかし、和やかに会話をしていた二人はアルの表情に気づかなかった。

12　町の賑わいと久しぶりの安らぎ

夜も明けきらぬ早朝から移動を始めて数時間。鬱蒼とした森は次第にその姿を変え、人の手が入った整備された物に変わっていた。木々の向こう側には町から立ち上っていると思われる煙が見え、目的地が近いことを示していた。

「もうすぐオルコットに着きますよ」

アルは傍らのリータに話しかけた。三人は馬を下り、歩いて森の中を進んでいた。町が近いこともあり、待ち伏せを警戒してのことだった。

「結局街道では誰にも会わなかったな。せっかく変装の魔法まで使ったのに」

クロードの言葉に、アルも頷いた。

「全く拍子抜けです」

「あれから魔獣も襲ってきませんでしたしね……旅の無事に、女神様の祝福に感謝します」

リータが小さく祈りを捧げると、アルは密かに不快そうな表情を浮かべた。

しばらくすると彼らは森を抜け、また別の街道へと入った。それはオルコットとその近隣の村を結ぶ古い道の一つだった。その道は新街道が開通した後も抜け道として知られており、かなり人通りが多かった。

彼らはここに来て初めて、地元民と思しき人々や馬に荷を乗せた商人の一行とすれ違った。最初こそ指名手配犯とバレないか冷や冷やしたリータだったが、すれ違う人の誰一人として彼らに注意を払う者はなかった。

道を更に進むと、ようやく森の終端までやってきた。木立を抜けた先には人の住む集落が広がっていた。ただ、それはリータの考えていたような都市ではなく、彼女の住んでいた村に近いものだった。畑や牧場が広がり、合間合間に数件の家が建っている。

「ここはもうオルコットですよね？」

リータの質問にアルが答えた。

「そうですよ。ここはオルコットの外れに当たります。もう少し行けば、城壁が見えてきますよ」

その言葉の通り、更に道を進んで行くと、堅牢な石造りの城壁が見えてきた。

「立派な城壁ですね。王都の物よりしっかりしてるかも……」

リータが感嘆の声を上げると、アルが笑って答えた。

「あの奥がオルコットの中心街です。この辺は国境地帯だし、黒い森も近いので治安があまり良くなかったんです。だからあんな城壁が必要だったんです」

道の先には門があり、そこからは多くの人たちが出入りしているのが見えた。リータはふと気になって尋ねた。

「門がありますが、その、門番は大丈夫なのでしょうか？　私たちは手配されているのでは」

リータの言いたいことを察し、言葉を遮るようにクロードが答えた。

「大丈夫。門番は立ってるだけだから」

その言葉にリータは驚いた。王都の城壁にある門には常に武装した兵士が立っている。治安が悪いのなら余計に町の出入りを見張るべきでは？　彼女は疑問に思った。

「知っての通り、ここは中立地帯なんですよ。自治も独立しています。だから基本的に通行は自由です。もちろん国境は別ですが」

「その代わり、問題を起こすとすぐに逮捕されるか追い出されるんだ」

アルの言葉に、クロードが付け足した。リータがクロードを見る

と、彼の目は、だから余計なことはするな、と言っているような気がした。

門番は本当に立っているだけだった。行き交う人々に挨拶をする程度で、リータ達もまたこんにちわ、と声をかけられた。内心ビクビクしていたリータだったが、クロードやアルがそれに会釈をしているのを見て、反射的に笑顔で挨拶を返していた。門番もまた彼女に笑顔を返し、彼らは咎められることもなくそのまま門を通りすぎた。

門の内側には小屋があり、そこにも数人の兵士らしき人々が出入りしていた。しかし、彼らもまた旅人達の道案内をするくらいで、門を通る人々に関心を払っているようには見えなかった。

「……本当に見てないみたいでしたね」

門を過ぎてしばらくした所で、リータは呟いた。

「でも、あれで結構見てるんだよ。怪しい奴は声をかけられる」

クロードが笑いながら説明した。

「本当に犯罪を犯して逃げようとしている連中は、やっぱり行動に出るんだよ。見てると分かるんだ。ああ、あいつ怪しいなあって。そういう勘は結構当たるんだ」

「そんなものですか？」

自分の態度はどう見えたのか、彼女は少し心配になった。それを察したのか、クロードはさらに付け足した。

「そんなものだよ。リータちゃんも合格だから心配しなくて良いよ。これからもこの調子で頼むね」

門の内側は外側とはうって変わって、石造りの建物で溢れていた。外の街道から続く道は舗装され、馬車や荷車が行き交っていた。道の両側には店があり、商人達が運んできた荷物を売り込んでいたり、逆に仕入れた荷物を積み込んでいたりした。

更に先に進むと、彼らは町のメインストリートに出た。道の幅は

倍になり、両側に立ち並ぶ店は道路の際一杯まで商品を並べ、道行く人々に声を張りあげていた。色とりどりの野菜や果物、美しい布や珍しい装飾品が町並みを彩っていた。そして時折、焼けた肉の香ばしい香りや、バターをふんだんに使ったの焼き菓子の甘い香りが漂ってくる。リータはキョロキョロと辺りを見回していた。

「すごいわ……」

「結構活気があるでしょう？　大陸中の物がここには集まりますからね」

子供のように辺りを見回すリータに、微笑みながらアルが言った。

「本当に。珍しい物ばかり……」

滅多に見る機会のない光景に、彼女は完全に目を奪われていた。

クロードの先導で、やがて三人は一軒の宿に辿り着いた。その宿は大通りから別の道に入った所にあり、別の通りにも接していた。建物は立派で大きく、厩も併設していた。

馬を預けて中に入ると、クロードが近寄ってきた宿の男に何かを伝えた。男は自分がここの主人だと言って挨拶をすると、三人をすぐに部屋へと通してくれた。

部屋は広く、ベッド二台とソファとテーブルが置かれていた。真ん中辺りには扉があり、その向こう側にももう一つ寝室があった。部屋はとても清潔で手入れが行き届いていた。良いお部屋ですね、と思わず呟いたリータに、主人は丁寧にお辞儀して感謝を述べた。

主人が部屋から出て行くと、リータはため息をついた。たった二日ではあったが、久しぶりのまともな部屋と快適そうなベッドを見て、彼女は強烈な疲労感に襲われた。その様子に気づいたのだろう。アルが彼女を心配そうにのぞき込んだ。

「疲れていますね。ゆっくり休んで下さい。そちらの部屋を一人で使って頂いて構いませんから」

アルはドアの向こう側の部屋を指さした。その部屋はこちら側の

部屋よりは若干狭い感じはしたが、ベッドが二台と安楽イスが置かれていた。

「でも……」

リータはその部屋を一人で使うことに気が引けて、ためらった。

「俺らと一緒じゃ、困ることもあるでしょ？」

クロードが更に言った。確かにそうかもしれない、とリータは思った。その後も二人に勧められ、彼女は結局その言葉に甘えることにした。

「ああ、疲れた……」

倒れ込むように部屋に入ったリータは、二日ぶりのまともな寝床に全身を投げ出していた。旅で汚れた服のままなのは気が引けたが、彼女は上着とスカーフを外すとそのままベッドに潜り込んだ。

清潔なシーツと寝具の感覚に、リータは久しぶりに安らぎを感じた。全身が気だるく、重かった。この二日間、一日中馬に乗っていたせいだろう。太ももや臀部には筋肉痛の症状が現れ始めていた。

「……これからどうなるんだろう？」

リータは胸元からペンダントを取り出して眺めた。銀色の鎖の先端には透明な小さな石が輝いている。それは見習いシスターの証であり、彼女の心の拠り所だった。彼女はそれを握りしめて祈りを捧げた。そして、ぼそりと呟いた。

「女神様、私にこの難局を乗り切るだけの力を下さい」

一方の部屋で、クロードとアルはソファに座り込んでいた。

「さすがに疲れたなあ」

机に置かれた水差しからコップへ水を注ぎながら、クロードが呟いた。

「ああ、そうだな……。クロードがいてくれて助かった。ありがとう」

アルの言葉に、クロードはポリポリと後頭部を掻いた。そして、

水を注いだコップの一つをアルに手渡した。
「それは早いんじゃないか？　まだ道は半ばだぞ」
「それは分かってるけど、一緒に来てくれて嬉しかった。……今の俺はお前の主人でも勇者でもない、罪人だしな」
コップを飲み干して、アルが自嘲気味に言った。
「まあ、そう言うな。どのみち残った所で俺も捕まってただろうし。何と言っても、お前の乳兄弟で腹心の部下だからな」
クロードは軽く笑って見せた。その笑顔に、アルは申し訳なさそうな顔を浮かべた。

「……しかし、ちょっと順調すぎないか？」
二杯目の水を注ぎながら、クロードは言った。
「そうだな。襲ってきたのは魔獣一匹、すれ違ったのは森の民の子供一人。不気味なほど順調だ」
「あいつらだって俺らが旧街道を通ってオルコットを目指すことくらい想定のうちだろう？　それなのになぜ追っ手の一人も現れないんだ？」
「さあな……もしかしたら、俺が本気で逃げるつもりだとは思ってないのかもしれない」
アルの言葉に、クロードは不思議そうな表情を浮かべた。
「どうしてさ？」
「俺はクーデターに関わった疑いで追われているんだ。姿を現さずに逃げ回るのは、俺に後ろ暗い所があるからだと思っているんだろう」
「あー……国内に潜伏して反乱を起こす機を窺っている、と？」
「ここだけの話だが、どうやら父上達は北の暴動に関わっていたらしい」
「本当かよ？」
クロードは呆れたように呟いた。北の暴動とは、魔王出現により逃げてきたカルムからの難民が、自分たちへの待遇の酷さに反乱を

起こした事件だ。
「あの時、陛下がそれらしいことを言っていた。全く馬鹿げた話だな。将軍自ら反乱に手を貸すなんて」
「でも、あれって北の新貴族達が流民を使って暴動を起こしたってもっぱらの噂だろ？　エドアルド様を王位に就けようって国王陛下を暗殺しようとしてた連中が、どうして独立派に手を貸すんだ？」

バルディ王国の北部には主に二つの勢力があった。一つは王都に近い南西部を治める貴族達で、アルの家もこの中の一つだった。アルの家は古くから王家に仕えており、王都にもほど近い一角を領地として与えられていた。アルの父は軍人として頭角を現し、前王フェルナンドに取り立てられて将軍にまで上り詰めた。そのため、アルの父はこれらの貴族達のリーダー格とも言える存在だった。クーデター計画もこの立場あってのことだった。

もう一つの勢力は王都から離れた北東部を治める貴族達だ。この地域は元々はバルディの支配下にはなかった。八代目勇者が戦ったのは、この地域に現れた魔王だった。魔王を見事打ち払った勇者に、土地の人々は次々と恭順を誓った。この地域はバルディに編入され、恭順を誓った土地の有力者達は八代目勇者である当時のバルディ国王によって貴族に封じられた。元々バルディにいた貴族と分けて、彼らは新貴族と呼ばれた。なお、貴族と新貴族に立場上の違いは全くない。

現在、新貴族の治める地域の一部では、バルディからの独立を求める声が上がっていた。もちろん、新貴族達はそれを弾圧していた。しかし、それはあくまで表向きの行動で、中には独立派を支援している者も少なからずいる、というのが貴族側の言い分だった。

「さあな……でも、陛下は俺をクーデター派と見なしているんだろう。だから、俺が南に向かうことは予想外なのかも知れない」
「北の貴族連中に助けを乞うだろう、ということか……」

「普通に考えたら、そう思うんじゃないか？　……俺は当主を亡くしたばかりの由緒ある貴族の長男で、しかも『勇者様』ときている。家も責任も全部放り投げて逃げ出すなんて思わないだろうさ」
アルは自嘲気味に笑い、ソファに身を横たえた。
「まあそう言うな。あちらの目が南に向いてないなら、尚更好都合じゃないか」
クロードは苦笑いを浮かべ、アルをたしなめた。

やがてクロードが立ち上がった。
「……どこへ？」
「ちょっと飯頼んでくる。さすがに腹が減った」
「俺の分も頼めるか。あと、リータの分も」
「分かった。何か食べたいものあるか？」
「まかせる」
クロードは軽く手を振って部屋から出て行った。

13　夜の街と古い友

オルコットの夜は長い。日が暮れて商店が次々に店を閉めていく一方、レストランや飲み屋が次々に店を開いていった。大通りは道のすれすれまでテーブルが置かれ、様々な料理と酒がふるまわれていた。

大通りには昼間と同じく、大勢の人々が溢れていた。歓声を上げて騒ぐ者、歌い踊る芸人達、時には喧嘩をしている人々もいた。

そんな中を、一人の男が静かに通り過ぎていった。頭からマントを被り、顔を隠した男は人混みの間をするすると通り抜けていく。声をかけてくる客引きを軽く交わし、男は大通りを北に進んでいった。

大勢の酔っ払いが行き交う賑やかな通りを抜け、男は途中で横道に入った。途端に人影は減って、街に溢れる歌や人々の声が遠ざかる。更に進むと、酔いつぶれた者や家のない者が気だるそうに座っている裏道に出た。彼らはきびきびと歩いて行く男にうさんくさげな視線を送るものの、その姿が目の前を通り過ぎれば即座に興味を失っていった。

やがて彼は一軒の家の裏口に辿り着いた。男はしばし周囲を警戒して誰もいないことを確かめた後、戸をゆっくり三度叩いた。扉は音もなく開き、彼はスルリとその中へ入っていった。

「クロード！　大丈夫そうで良かった」

マントの男に声をかけたのは、鳶色の髪と瞳を持つ、眼鏡をかけた若い男だった。男は嬉しそうな顔と声をしていた。マントを脱いだクロードも笑顔で答えた。

「ルカ！　お前も無事そうだな」

二人の男はお互いにホッとしたような表情を浮かべていた。

「こっちは平気さ。さ、こっちへ」
ルカはクロードを客間へと案内した。そこはこぢんまりしているが居心地の良い空間で、シンプルながらも上品な調度品は、主の趣味の良さを物語っていた。
「お、酒まである！」
クロードはテーブルに置かれた高級酒に、思わず口元をゆるめた。
「旅で疲れた友をねぎらってやろうと思ってね。まあ座れよ」
ルカは人好きのする笑みを浮かべてテーブルに着いた。
「持つべきものは友か。嬉しいね」
クロードはそう言うと、ルカに向き合うように座った。

「それでアルは？　今はどうしてるんだ？」
グラスにワインを注ぎながら、ルカが尋ねた。
「宿にいるよ。怪我もない。さすがにこの街をあまりウロウロさせるのはまずいから、部屋に置いてきた」
話しながら、クロードは嬉しそうにグラスを受け取った。
「確かにな。このオルコットにも『勇者様』の顔を知っている奴はそれなりにいるし、注意はしておくに限る」
二人は乾杯して、グラスをあおった。
「あーうまい」
クロードの心からの言葉に、ルカが笑った。
「あんまり飲み過ぎるなよ。まだ本番はこれからなんだから」
「分かってるよ。ああ、でも旨いなあ」
クロードはグビグビと酒を飲み干した。
「そうだ、一応確認だが……本当にあの宿は大丈夫なんだろうな？」
「大丈夫だよ。あの主人は嫁さんの古い知り合いで、あそこ選んだのも嫁さんだから」
空いたクロードのグラスに、ルカはワインをつぎ足した。
「そうか、それなら安心だな」
「どういう意味だよ、それ」

自分も酒を飲みながら、ルカはすねたように笑った。

ルカは士官学校時代のクロードのルームメイトだった。彼は商人の息子だったが、家業は兄達が継ぐ予定だったために仕方なく士官学校に入ったクチだった。お互い明るい性格で趣味も似ていた二人はすぐに仲良くなった。訓練をサボったり、抜け出して酒を買い込んだり、二人とも学校では問題児だった。

彼らの卒業した翌年、アルも士官学校に入学した。当時二人は王都の警備兵を務めていた。クロードはルカにアルを紹介した。その頃のアルは多少皮肉屋ではあったが年相応に溌剌とした少年で、すぐにルカとも打ち解けた。二人はしばしば少年をからかって遊んでいたが、アルも迷惑そうな顔はしても二人を嫌うことはついになかった。

「??陛下は暴動鎮圧を目的に、ついに北に増援を送ったよ」

つけ合わせのパンを食べながら、ルカが言った。

「追っ手が妙に少ないのは、やはりそのせいか？　国境警備の連中も、俺らの捜索に本腰入れてるとは思えないしな」

クロードも焼いた羊肉の薄切りを口に運んでいる。

「第三軍団を投入だってよ。鎮圧なんて名ばかりで、本当の目的はクーデター派の粛正だろうな」

「おいおい、第三軍団ってメインは北の方で徴兵された連中の部隊だろ？　将軍だったベルナルド様もいないのに、あいつらが素直に動くのか？」

クロードは眉をひそめた。それはかつて彼も配属されていた軍団で、戦友達の顔が頭をよぎった。

「それがそうでもなさそうだ。……王都じゃ今回の勇者襲撃は北に潜伏したカルムの残党の仕業、ということになっている。連中にしてみりゃ敵討ちだよ」

ルカの解説に、クロードは苦々しい顔をした。

「なるほど。流民鎮圧とカルム残党狩りの影に隠れて、どさくさ紛れに反逆者を一網打尽か」

クロードはうんざりした。折角戦争が終わったというのに、今度は内戦とは。しかも、戦場には彼の故郷も含まれるかも知れない。クロードには家族はいなかったが、そこには友人達や共に主人に仕えた同僚達が大勢いた。彼は親しかった者達の身の安全を祈った。

「あいつら多分、アルは北に行こうとしてると思ってるんだろうな」

ルカは言った。アルと同じ見立てだった。

「やっぱりお前もそう思う？」

「まあ普通に考えたらそう思うだろ？　あいつはブルーノ公の嫡子で、勇者なんだぜ。父親の跡を継いで家に戻るのが本筋だろうよ。その後はクーデター派の旗印になるか、あるいは陛下の誤解を解いて和解の道を探るか道は分かれるけど……俺だって、最初にお前から話を聞いた時はそういうことだと思ったし」

「そうなのか？」

「そりゃそうだろ。王城での勇者襲撃事件の真相を聞いたら、誰だってそう思うさ」

クロードは肩をすくめた。

「そういや、お前は手配されてないよな。何でだ？」

不思議そうな顔でルカは尋ねた。

「俺は襲撃事件前に軍辞めてるからな。その後はずっと下調べと根回しで王都にも北の方にも顔出してないから、俺が関わってるのかそうでないのか、あっちもよく分かってないのかもしれない。ま、そのうち俺も手配されるんじゃないか？　どうせ時間の問題だよ」

「その割にコソコソしてないよな。見つかったらやばいだろ」

「ここは人が多いからな。服装をまともにして堂々としてれば、意外と大丈夫なもんだぜ？　……お前も警備兵やってたんだから、その辺は分かるだろ」

クロードがニヤリと笑うと、ルカは苦笑した。

「そういえば、お前ら黒い森を横断してきたんだよな？」
ああ、と頷いたクロードに、ルカは心配そうな顔をした。
「魔獣は大丈夫だったか？」
「ああ、全然。一匹だけ出くわしたけど、俺の槍でイチコロ」
ルカは怪訝そうな顔をした。その表情にクロードはふと疑問を感じた。
「……何かあったのか？」
クロードの質問に、ルカは首をひねりながら話した。
「黒い森で魔獣が大発生したらしい。昨日一昨日だけで十匹は退治されてる」
は？　とクロードは素っ頓狂な声を上げた。その数はあまりに多すぎた。
「ちょっと待て。襲撃時、セラ村で少なくとも二匹、さっきも言ったように俺もその後一匹倒してるんだぜ？　その上八匹って……」
「そうなんだよ。明らかにおかしいだろ？　で、更にその魔獣達の行動がおかしかったらしくて」
ルカの話によると、魔獣は同じ木に何度もぶつかり続けたり、ある小屋にだけ異様に興味を示したりなど、普段は見られない奇妙な行動をしていたのだという。お陰で魔獣退治に付きものの怪我人もほとんどなく、近隣の村は降って沸いた幸運に沸いているのだという。
そのおかしな行動は、アルの行った魔獣避けによる影響である可能性が高かった。しかし、彼らはそんな広範囲で魔獣避けを行っていない。クロードは一人混乱していた。
「何が起こっているんだ？」
眉をひそめて考え込むクロードの様子に、ルカも腕を組んで真面目な顔をした。
「分からないね。……まさか、魔王が？」
「……魔王は倒したよ。それは確かだ」

ルカの問いに、クロードは目を伏せたまま答えた。

「そうだ！　そういえば、一つ聞きたいことがあったんだよな」

重苦しい空気を変えるように、ルカは努めて明るい声を出した。

「何だよ？」

「アルの彼女ってどんな子？　一緒に連れてきて、今はどうしてるんだ？」

つまらない話は終わったとばかりに、ルカは身を乗り出してニヤリと笑った。

「今は宿にいる」

「アルと一緒にか？　……そうかそうか、とうとうあいつにも春が来たんだな」

苦笑いを浮かべたクロードの言葉に、ルカは感慨深げな表情を浮かべた。

「そうだったらいいんだが……そうでもないんだよな……」

「どういうことだ？」

ため息をつき、クロードは状況を説明した。リータとアルは幼なじみであるが現時点で恋愛関係にはないこと、彼女はプロポーズに承諾した訳ではなく、この駆け落ちの一件もまるで知らなかったこと聞き、ルカは唖然とした。

「はあ、アルの片思いで駆け落ち？　何の冗談だよそれは」

「それが本当なんだよ。彼女はアルのことを好きじゃない。それどころかどうやってアルから逃げるかを考えている節すらある」

さすがに呆れたのか、ルカは信じられないというような顔をしていた。

「見習いシスターだっけ？　もしかして、だから大人しく『勇者様』に従ってるの？」

クロードは頷いて答えた。

「おそらくは。あと、村を襲われたのと手配書を回されたショックもあるだろうな。あんなものを見た後じゃ仕方ない」

「でもさ、あのアルに落ちない女もそうはいないだろ？　大体あの顔だぜ。どこ行ってもムカつくほど大人気だったじゃねえか。あの王女様も一目惚れって感じだったし。その子もそのうちアルに惚れるんじゃ？」

「だったらいいんだけど……あの顔で落ちなかった女が、あいつと行動を共にしてあいつを好きになると思うか？」

「ああ……確かに」

ルカはふっと目を伏せた。それを見て、クロードも苦笑いを浮かべた。

「でもさ、幼なじみならあいつのことを少しは分かってるはずだろう？　今後の次第ではもしかしたら……」

ルカの前向きな言葉に、クロードはハァとため息をついた。

「そうなればいいんだけどさ。本当に」

そう言うと、クロードは天を仰いだ。

１４　優しい夢と冷たい現実

「女神様はまず大地を造り、草木や動物たちを生みました。そして最後に人間をお作りになると、この大陸に生きる命全てに告げました。生きよ、増えよ、そして栄えよ、と」

教会前にある空き地で、一人のシスターが女神の教えを説いていた。よく晴れた空からは暖かい日差しが差して、周囲の木々や地面に生えそろった芝生を鮮やかな緑色に輝かせていた。周囲には子供達が集まり、そわそわしながら彼女の言葉に耳を傾けていた。

「私達は家族、友人、隣人を愛し、彼らと共に手を取り合って生きなければなりません。そして、一生涯真面目に働き、結婚して立派な子供を生み育てます。女神様が私たちに命じたのはそういうことです。この村も、皆さんのご先祖様達がそうやって築いてきたのです。皆さんもそういう大人にならないといけません。分かりましたね？」

シスターの言葉に、子供達は一斉に返事をした。シスターは笑みをもっと大きな声でお返事しましょう、と声をかけた。子供達は素直に大声で返事を返した。

「それでは今日はお終いです。良い子の皆さんにはご褒美をあげましょう」

シスターがお菓子の入った小袋を配り始めると、子供達は歓声を上げて彼女に群がった。目当てのものを手に入れた子供達は、満面の笑みを浮かべて村へと降りていった。

教会前にはシスターと、一人の少女が残っていた。シスターが彼女に微笑むと、少女はおずおずと口を開いた。

「シスターソニア、教えて欲しいことがあります」

「何ですか？　リータ」

シスターはかがみ込んで、少女と目線を合わせた。彼女はなぜか

暗い顔をしていた。
「女の子はいつか結婚しなければいけないんですよね」
「そうですね。愛する夫と子供に尽くすことが女性の幸せの一つ、と聖典にも書いてあります」
「でも、シスターは結婚してませんよね。どうして？」
少女の
「結婚とは夫に対し、特別大きな愛を注ぐと約束する契約でもあるんですよ。私たちシスターは女神への愛に生きるのです。だから、女神と同じく清らかな体でいないといけません」
「結婚すると、汚れるの？」
シスターはクスクスと笑った。
「違いますよ。でも、一度結婚してしまうと、もう女神様に正式に仕えることはできないのです。そういう決まりになっています」
「……女神様は女に結婚して子供を産めって言ってるんですよね？シスターが結婚しないのって、女神様の教えとは違っていませんか？」
「いいえ、そうではありません。言うなれば、シスターは女神と結婚するんです」
「女神様と？」
きょとんとした少女に、女はにっこりと笑って続けた。
「そう。女神様に愛を誓うのです。以前お話ししましたが、この大地も草木も動物たちも、そして私たち人間も、女神から生まれた女神の一部です。女神を愛することは、この世界の全てを愛することなんです。だから、私達シスターは女神様への愛を誓って、生涯人々に尽くすんです……」

リータは薄闇の中で目を開いた。部屋の中は暗く静まりかえっていて、閉ざされた窓の隙間から微かに光が漏れていた。彼女はそっ

と目に手をやった。目尻からは涙がこぼれて顔を濡らしていた。
何であんな夢を見たのだろう、リータは袖で涙をぬぐいながら思った。それは彼女がシスターになるという道を、幼心にはっきりと意識した日の夢だった。リータは夢の中で見たシスターソニアの顔を思い出そうとした。しかし代わりに思い出されたのは、炎の中で血まみれになったシスターソニアの無残な姿だった。こっちが夢だったら良かったのに。リータの目に新たな涙が湧いてくる。
リータは慌てて寝返りをうって横を向いた。上掛けを引っ張り頭まで覆ってしまうと、その中できつく目を閉じた。泣いてはダメだ、彼女は自分にそう言い聞かせた。

しばらくして気持ちが落ち着いたのか、リータはベッドから身を起こした。体中が気だるく、特に足腰には強い筋肉痛が残っていた。重い体を引きずるようにベッドから降りると、彼女はそっと窓を開けた。空はまだ暗かったが、東の方角がわずかに白み始めていた。この宿に着いた時はまだ夕方前だったはずなのに、彼女はこの状況で暢気に眠れる自分に呆れた。

リータは足音を忍ばせて、部屋を隔てるドアの前に移動した。ドアの向こうからは音も人の気配もしなかった。ドアに耳をつけて様子を窺ってみたが、物音一つ聞こえては来なかった。彼女は意を決してドアノブに手をかけた。
そっとドアを開けてのぞき見ると、ソファで誰かが眠っているのが見えた。灯りはランプ一つだけだったので、リータにはその人影がアルなのかクロードなのかの判別は付かなかった。もう一人はどこにいるのだろうと彼女は目をこらしたが、結局部屋の中には一人しか見当たらなかった。

「リータ？」
暗闇から突然声をかけられて、彼女は狼狽した。ソファの人影が

体を起こして、リータのいる方を見ていた。
「アル……」
リータはため息混じりに男の名を呟いた。ソファの人影はゆっくりと立ち上がると、別のランプにも火を灯した。リータは少し明るくなった部屋を見回したが、やはりアルの姿しか見当たらなかった。キョロキョロしている彼女を、アルは眠そうな顔で見ていた。
「あの、クロード様は？」
「……ちょっとお使いを頼みました。多分朝までには戻ってくるでしょう。それより、よく眠れましたか？」
「……ええ、おかげさまで」
リータの返事を聞き、アルは少しだけ笑った。彼は突っ立っているリータを手招きした。仕方なくリータは空いていた斜め向かいの一人がけソファに座った。アルは水差しを手に取ると、二つのグラスに水を注いだ。その片方をリータに手渡してきたので、彼女はありがたくそれを受け取った。ふと下を見ると、テーブルにはサンドイッチの乗った皿が置かれていた。彼女は自分が昨日ろくに食事を取っていないことに気づき、空腹を感じた。それ気づいたのだろうか、アルはリータにサンドイッチを勧めた。
一度食べ始めると、リータの食欲はなかなか治まらなかった。彼女ははしたないと思いつつも、次々とサンドイッチを腹に収めていった。
「おいしい？」
その様子を少し驚きつつも楽しげに見ていたアルが、リータに話しかけた。
「はい。ありがとうございます」
「口に合って良かった」
しかし、会話は続かない。何となく気まずさを感じていたが、彼女はそれを埋めるようにひたすら食べ続けた。

「ごちそうさまでした」
ふうと息をついたリータに、アルは再び微笑みかけた。十分な睡眠と食事によって、彼女の頭は確実に正常さを取り戻しつつあった。向き合いたくない現実と向き合うため、彼女は意を決して口を開いた。
「これからどうするおつもりですか？」
「バスカヴィルへ向かいますよ。予定通りにね」
即座に返ってきた返事に、彼女の心は重くなった。
「……その後はどうするおつもりですか？」
「まずは身の安全を確保します。その後は……あなたと結婚して、あちらで暮らしたいと思っています」
少しだけ赤らんだアルの顔とその言葉に、リータは目眩すら感じた。やっぱりこちらが夢ではないのか？　それもとびきりの悪夢。
「本気ですか？」
リータの呟きに、アルは片眉を上げた。
「大体、あなたは勇者でしょう？　それがこんな風に国を追われて別の国に逃げ込むなんて、そんなの悔しくはないんですか？」
アルの顔からは先ほどの照れは消え去っていた。彼は黙ってリータの言葉を聞いていた。
「それに、あなたはブルーノ公の跡継ぎでもいらっしゃるんでしょう？　お父様にかけられた疑いを晴らし、家をお継ぎになるべきではないでしょうか」
アルは無表情のまま、静かに話し始めた。
「……順番に答えましょうか。まず第一に、私は今の状況を悔しいと思ってはいません」
どうして、というリータの言葉を気にかけず、アルは話し続けた。
「そして第二に、父にかけられたのは残念ながら『疑い』じゃありません。それに表向き、父は王城を襲った魔物に殺されただけです。我が家と父の名誉は少しも損なわれていません」
彼は一拍おいて更に言葉を続けた。

「第三、家は私の弟が継ぐことになるでしょうね。弟はまだ幼いし、今回の一件について全く知りません。陰謀についても事件についても何も知らない弟が家を継げば、陛下は我が家にはこれ以上手を出さないでしょう」

「なぜそう言い切れるのですか。それに、弟さんがいるならば、彼が心配ではないのですか？　弟さんだって襲われるかも知れませんよ」

強い口調で発せられたリータの言葉に、アルは皮肉めいた笑みを浮かべた。

「ありがたいことに、国王陛下はクーデターの一件を外には一切出していないんですよ。私達は王城で突如魔物に襲われて、不幸にも死んでしまったことになっているでしょう？　……さすがの陛下も、魔王討伐の功労者と勇者の家をそう簡単に潰せはしないんですよ」

アルは手にしたグラスの水を一気に飲み干した。

「下手な言いがかりをつけて我が家を取りつぶせば、クーデター派や息を潜めている王弟派に格好の手段を与えてしまいます。将軍や勇者に肩入れする軍人や一般庶民を煽って、反国王の機運を高めることだってできます。それに、伝統ある我が家を潰せば南の貴族からの支持だって失ってしまうかもしれない。陛下はこの一件をひっそりと終わらせたいんですよ」

「そんな……」

困惑しているリータに、アルは更に言葉を続ける。

「第五。弟のことですが、彼のことは心配しなくても大丈夫です。彼の母は王都の有力貴族の家柄です。彼女の実家は隠れクーデター派である可能性はあると思いますが、この状況で反国王派に肩入れするほど馬鹿ではないでしょう。このままうまくやれば、伝統ある将軍の家と財産を乗っ取れるんですからね。……他に質問は？」

アルの黒い瞳がリータを見つめた。彼の本来の瞳の色は青だが、今は魔法により色が変わっている。その強い視線に、リータは目を反らした。

「お母様もいらっしゃるなら、尚更戻った方が良いのでは？　それに家を乗っ取られるって……それで、本当に良いのですか？」

お母様という言葉に、一瞬だけアルは顔をしかめた。

「母は父の後妻であって、私の実母ではありません。彼女は弟に跡を継いで欲しいと思っているんですよ。兄の私が言うのもなんですが弟は優秀です。きっと良い当主になれますよ。……私よりもずっとね」

アルのすさんだ目を見て、リータは言いようのない気持ちに襲われた。この人は自分の家族のことを、どうしてこんなにも冷たい声で語るのだろう。リータは何も言えず、ただ彼を見つめた。

自分をじっと見つめるリータの視線に、今度はアルが目を反らした。

「……他に聞きたいことはありませんか？」

リータは目を伏せた。聞きたいこと、確かめなければならないことは山ほどあった。しかし、彼女は自分ではどうしても理解できない、とある疑問を口にしていた。

「……どうして、私なのですか？」

一瞬、アルが戸惑ったのを彼女は見逃さなかった。

「あなたのことが好きだから」

返ってきた恥ずかしい答えに、彼女は質問で返した。

「どうして？　なぜ私なのですか？　もう何年も会っていなかったのに」

「それは……」

絞り出すようなリータの声に、アルは言葉を濁した。そして、一瞬の間の後、静かに言葉を発した。

「私のことが、嫌い、ですか？」

リータは答えられずに黙っていた。しばしの沈黙の後、彼は更に質問を重ねた。

「……村に帰りたいですか」

「はい」
リータははっきりと答えた。そして、意を決して口を開いた。
「私はシスターになりたいんです。だから、あなたとは……」
彼女の言葉を遮るように、アルは立ち上がった。暗くて表情は分からなかったが、その威圧的な雰囲気に気圧され、リータは話すのを止めた。
アルの手が、リータの頬に触れた。身を固くした彼女にアルは静かに語りかけた。
「私より、女神への信仰を取ると？」
リータは何とか顔を上げてアルを見据えた。アルの表情は暗く、返事をするのは何とも恐ろしかった。しかし、彼女ははっきりと告げた。
「はい。その通りです」
彼の瞳に、暗いものが走った。リータは反射的に胸のペンダントを握った。勇者の接近を受けて、石はまばゆく光っていた。それを見たアルは冷たく薄笑みを浮かべた。
「私に魔法は効きませんよ」
「……知っています」
冷たい石を握りしめて、彼女は言った。
「その仕組みを知っていますか？」
リータが首を振ると、アルは話し始めた。
「勇者が近づくとシスターの証が光るのは、その石に書き込まれた認証が自動的に発動するからです。その光り方は、あなたが魔法を発動させている時と一緒でしょう？」
確かにその通りだった。
「本来、石の認証は書き込まれている主にしか反応しません。石は認証を発動して初めて魔法を起動させられる状態になります」
アルが何を言いたいのか分からず、リータは怪訝そうな表情を浮かべた。
「勇者の力です。私はすぐ側にある全ての魔法具を強制的に起動し、

使うことが出来ます。私の認証で発動したのですから、当然その間は本来の持ち主であっても魔法を起動させることが出来ません」

「つまり……今の私もこの石の魔法を発動させることができないと？」

リータは初めて聞く話に驚いた。アルは微笑を浮かべた。

「そうです。そして、こんなことが出来るのは全ての魔法を生み出した女神と、その代行者だけです」

かがんで視線を合わせてきたアルを見て、リータは背筋を凍らせた。口元は笑っていたが、その目は凍えるように冷たかった。

「私は女神の代行者です。シスターであるなら、女神への信仰を持つなら、リータ、あなたは私の命には背けないはずです」

彼女は彼の言わんとする所を理解した。

「私と一緒に来なさい。これは命令です」

射貫くような冷たい視線から目を反らすことも出来ず、恐怖に身を凍らせた彼女は、ただ頷くことしか出来なかった。

15　女神と魔法

リータは一人部屋に閉じこもっていた。アルとクロードは何やら準備らしく、部屋を出たり入ったりを繰り返している様子だった。沈み込んだ様子のリータを心配したのか、クロードが二三言葉をかけた。彼女はクロードを軽くかわすと、調子が悪いと言って彼を追い出した。

早朝の一件は、クロードの帰還によって打ち切られた。アルが冷たい目でリータに命令を下した直後、突然部屋のドアがノックされた。一瞬警戒した二人だったが、そのドアの叩き方で相手を察したアルがそっとドアを開けた。入ってきたのはほろ酔い加減の男だった。

部屋に流れていた微妙な空気に気づいたのだろう、クロードはお邪魔だった？　と言っておどけた。呆れ顔のアルは無言でクロードを通し、今度は自分が部屋を出て行った。彼は残ったリータを興味津々に眺めていたが、暗い顔の彼女に何かを察したのだろう、そのまま何も言わなかった。リータも気まずさに耐えかね、隣室に戻ることにしたのだった。

部屋には明るい日差しが差し込んでいた。暖かい陽光を感じながら、リータは備え付けのイスに腰掛けてぼんやりと時間を過ごしていた。どうしてこんなことになっているのだろう？　彼女は自問していた。

ふと窓に目をやると、彼女は窓枠の上部に小さな記号が付いているのに気づいた。それは女神のシンボルである剣を象った印で、聖地の方向を示すマークでもあった。リータは床にひざまずき、手を組んで一人静かに祈りを捧げた。目を瞑ると、血まみれのフィオナ、廊下に倒れている患者達、倒れたシスターソニアの悲惨な姿が次々

と思い浮かび、際限のない悲しみがリータの心を打ちのめした。
しかし一方で、彼女は自分の置かれている状態に現実感を感じていなかった。目を開ければそこはいつもの教会で、側にはマリーナ達が共に祈りを捧げていて、目の前には白い女神像が彼女達を無言で見下ろしているのではないだろうか。祈りを終えたリータは、微かな希望と共に目を開けた。彼女は小さな部屋の中にいて、目の前にあったのは小さな窓だけだった。
リータはベッドに身を投げ出し、無意識に胸に下げたペンダントを握りしめた。冷たい石の感覚に、不意にアルの言葉が蘇った。
彼女のペンダントには小さな透明の石が付けられている。それは魔石と呼ばれる貴重品で、魔法という不思議な力を秘めていた。

魔法、それは創世の女神が人間に与えた知恵であった。かつて、人間は女神に守られる一生物に過ぎなかった。しかし、女神が悪しき者に殺されて世界から女神の祝福が失われてしまうと、新しい命は生まれなくなってしまった。世界は秩序と平穏を失ってしまい、沢山の生き物が永遠を約束されていたはずの命を失ってしまった。
体を失って魂だけになった女神はこれを嘆き、死んだ自らの体を裂いて三人の小さな神を作った。彼らは女神の敵を討った勇者に対し、女神に代わってこの世界を統べるようという女神の伝言を伝えた。

その後、小さな神達は勇者とその仲間に女神の知恵を与えた。そして、世界中の生き物に女神の祝福を与え、生き物は再び子を為せるようになり、世界は命で満ち溢れた。ただし、その命は以前のものと異なり、期限付きの限られたものとなった。最後に彼らは自らを石に変え、その活動を助けた女神のしもべたる女達に自らを託した。その石は女神の力を帯びており、所有者の意志と命令によって女神の奇跡を起こすことが出来た。この石はやがて魔石と呼ばれるようになった。
魔石を与えられた女達が一番始めの『シスター』である。彼女達

は教会を作って、三人の神から与えられた知恵と石を守り、女神の奇跡を管理するようになった。シスターの証である石も小さな神が変じた石のかけらである。魔石をあしらった武具やアクセサリーは魔法具と呼ばれている。

なお、リータの持っている石は本物ではない。本物の石を模したイミテーションである。本物の魔石は非常に貴重であり、正式なシスターにのみ身に着けることが許されている。イミテーションは使える魔法の種類や威力、そして行使できる回数が制限されている。そのため、彼女が行使できるのは魔獣によって付けられた傷の呪いを解く魔法と、対象を眠らせる魔法の二種類だった。

魔法の行使は厳しく制限され、好き勝手に使うことは許されていなかった。リータの場合もシスターソニアの監督下でしか行使は許されていなかった。行使する状況も厳しく条件が付けられていた。例えば眠りの術は痛みやショックで錯乱した患者を無理矢理大人しくさせる場合などは使えるが、不眠に悩む患者を眠らせるために使うことは許されていない。

しかし、一つだけ自分の判断で事後承諾的に行使できる状況があった。それは身を守るためやむなく行使する場合だ。イミテーションとはいえ女神の奇跡を再現してみせるこの石は、やはり貴重品に違いなかった。シスターや教会への暴力は女神への冒涜であり、許されない行いであるとされて厳罰の対象であった。しかし、魔石や時にはシスター自身への邪な考えから、シスターを襲おうとする不届き者はそれなりに存在していた。眠りの術はそういった輩への対抗手段として非常に強力だった。

ペンダントを外し、リータはじっとそれを眺めていた。クロードが帰ってこなかったら一体あの後どうなっていたのだろうか、リータはそう考えてぞっとした。彼女には身を守る術はなかった。男に腕力でかなう訳もない彼女が唯一持つ抵抗手段が魔法だった。しか

し、勇者には魔法が通じない。『女神の代行者』という肩書きは伊達ではない。リータはため息をついて、我が身の幸運に感謝した。

「……望みとは自ら手に入れるものであり、誰かに与えられるものではない……」

リータはぼそりと呟いた。それは女神の教えの一つだった。彼女の脳裏にいくつかの記憶がよぎり、その顔には憂いの影が落ちた。

「私はシスターになる……絶対に、ならなければいけない」

リータはペンダントを握りしめた。冷たく堅い石の感触に彼女は目を閉じた。

しばらくの後、彼女は起き上がると思い立ったように部屋を出た。

「どうかした？」

部屋から出てきたリータに、クロードが声をかけてきた。部屋の中にいるのは彼だけで、アルの姿は見えなかった。

「……少し外に出たいのですが」

「うーん、それはちょっと……」

リータの言葉に、クロードは困ったような顔をした。勝手に出歩かれたら困るということだろう。

「分かりました。すみません」

彼女があっさりと引き下がってみせると、彼はバツの悪そうな表情を浮かべた。一瞬の間を置き、クロードは思いついたように口を開いた。

「そろそろお昼だけど、何か食べたいものはある？　下に食堂があるから、何か頼んでくるよ」

「何でも構いません」

「そう？　じゃ、適当に頼んでくるよ。少し待ってて」

クロードは立ち上がると、人の良さそうな笑みを浮かべた。しかし、目は笑っておらず、彼女の挙動をじっと見つめていた。まるで、少しでもおかしなことをすれば容赦はしない、とでも言うように。

「ありがとうございます」

リータは笑みを浮かべて礼を言った。笑顔ならいくらでも作れた。どんな不幸が訪れようとも常に笑っていること、それが出来ない女にシスターは勤まらない。それはシスターソニアの教えであり、彼女がシスターとして、あるいは看護助手として働いて身に着けたスキルだった。

「ねえ、昨夜アルと何かあった？」

部屋を出ようとしたクロードが、唐突に振り返った。

「別に何もありませんよ」

リータはきっぱりと否定した。

「じゃあ、アルに何か言われた？」

クロードの目は、リータの瞳を真っ直ぐに見つめていた。

「……一緒にバスカヴィルに来て欲しいと」

リータは正直に答えた。嘘やごまかしは通用しないと思った。

「それは命令として？」

「……そうですが」

リータの言葉にクロードはなぜか苦笑いを浮かべた。

「じゃ、君は一人になったからといって、ここから逃げたりしないね？」

「ええ」

彼の言葉に一瞬動揺したリータだったが、はっきりと答えた。

「信用しても良いのかな？」

クロードの表情と口調からは彼女への疑念が感じられた。しかし、リータはそれに気づかないふりをし、笑って見せた。

「もちろんです。シスターは嘘をつけませんから」

クロードが出て行った後、リータはそっと部屋の隅にある小さなタンスへと向かった。アルもクロードも、それを使っている形跡はなかった。彼女は引き出しの中を覗いた。そしてすぐに、目的のものを見つけた。リータはそれをそっと抜き出すと、服の中に挟んで

隠した。

少しして戻ってきたクロードが見たのは、大人しくソファに座っているリータだった。彼女が会釈をすると、彼もまたニコリと笑った。

16　追っ手と協力者

クロードとリータが昼食を済ました直後、アルが部屋に帰ってきた。彼はテーブルに残る食器類を見て一瞬不機嫌そうな顔をしたが、そのことについては結局何も言わなかった。アルはクロードを呼びつけると、そのまま連れだってまた部屋を出て行ってしまった。

一人残されたリータだったが、使った食器を簡単に片付けると隣室へと戻って行った。

しばらくして、リータの部屋のドアがノックされた。

「リータ、入ってもよろしいですか」

リータがドアを開けると、アルが立っていた。

「突然ですみませんが、出発の準備をして下さい。済み次第ここを出ます」

「え？　もう行くのですか」

驚いた彼女の言葉に、アルは当然と言うように頷いた。

「そうですよ。ここは決して安全ではありませんから」

「……分かりました。行きましょう」

彼女はそう言うと、壁に掛けられた上着とスカーフを手にした。そしてそのまま部屋を出た。

「良いんですか？」

怪訝そうな表情のアルが尋ねた。リータは一言だけ言い放った。

「私に荷物などありませんから」

クロードの案内で辿り着いた先は船着き場だった。桟橋には一艘の船が係留されていた。船は底の浅い川舟で、その船室は十人も入れば一杯になりそうなほどの大きさだった。デッキでは数人の男が何やら作業をしていた。

「今度は川を行くのですね……」

リータの独り言を聞きつけ、クロードが言った。
「陸路もそう悪くはないけど、やっぱり運河使った方が早いから」

オルコットの街の中央には運河が走っている。街はこの運河に沿って南北に長く延びた地形をしている。大陸中央にそびえるエレ山脈からは、大陸の南北へ二つの大河が流れ出している。オルコットを流れているのはこの二つの川を結んだ運河である。

二百年ほど前、バスカヴィルが外海への交易路を開拓した頃、南から北へのルートは陸路と川を組み合わせたものだった。そのため商人達は二つの大河を結ぶ運河の必要性を説いていた。しかし、バルディの国王や周辺を収めていた貴族はそれに反対した。彼らはバスカヴィルとの交易の利点を理解していなかった。それどころかバスカヴィルを盗賊の巣窟と蔑み、国として認めてさえいなかった。

しかしその後、大陸の西半分を支配していたエリ神聖国が滅亡したことで状況は一変した。代わってカルムが建国されると、今度はそれを認めないバルディとの間で戦争が始まった。武器や資金の調達の当てとして、バルディはバスカヴィルを正式に国家として認め、条約を結んだ。バスカヴィル側の支援により戦争が一段落つくと、バルディはバスカヴィルの要請に応える形で運河の着工を許可した。建設は名目上バルディが担ったが、資金のほとんどはバスカヴィルが提供していた。

「……確か、運河は通行料が高いと聞いたことがありますが」
リータの言葉にクロードが答えた。
「個人の船はね。でも登録した商人や運送業者の船は別なんだ」
「これは誰かの別の方の船なのですか？」
「あいつのだよ」
クロードは船のデッキにいる男を指さした。リータが目をやると、男もそれに気づいて桟橋へと降りてきた。
「よう、早かったな」

男はにこやかに笑って三人を迎えた。彼はリータを見ると、親しげに話しかけて来た。
「初めまして。あなたがリータさん？　私はルカ。商人をしています」
「はじめまして、リータと申します」
男の笑顔と礼儀正しい様子に、リータは反射的に笑顔を浮かべお辞儀をしていた。
「今回は私が皆さんをアスキスまでお届けします。どうぞよろしく」
「こ、こちらこそ」
ルカは商人らしくニコニコと愛想良く振る舞っていた。そもそもどうして商人がアルに手を貸すのだろうか。犯罪者の国外逃亡など手引きしたら商売など出来なくなるどころか、共犯として捕らえられる可能性だってあるのに。リータは内心困惑していた。

「……そういうしゃべり方をしてると、本当に商人みたいだな」
リータの隣でその様子を見ていたクロードが口を開いた。その顔は笑いをこらえているように見えた。
「何だよ。これでも評判は良いんだぜ。まだ若いのにしっかりしてるって」
ルカの態度はこれまでとうって変わり、砕けたものへとなっていた。
「本当か？　何だかうさんくさいぞ」
アルまでもが苦笑していた。
「お前ら失礼だぞ」
ルカはフンと顔を背けた。しかし、その顔には怒りの色などない。どういうことか分からず、リータは三人の顔を次々に見比べた。
「こいつはね、俺の友達」
リータの戸惑いを見透かしたかのようにクロードが言った。
「士官学校時代の同期でね、ついこの間までは一緒に軍で戦ってた」
そうでしたか、と頷いたリータに、ルカは更に語りかけた。

「本当はずっと軍にいて立身出世するつもりだったんだけどね。跡継ぎのはずの兄貴達が死んじゃって、末の俺にお鉢が回ってきたのよ」

「お前が軍で出世は無理だろ。文官ならまだしも」

クロードが茶々を入れた。ひどいなあと言ってルカが笑うと、つられたのかアルとクロードも笑っていた。三人の仲が良いことだけはリータにも分かった。

「で、準備の方は？」

ルカはクロードに尋ねた。

「ああ、こっちはいつでも大丈夫だ」

ルカは神妙な顔つきで頷いた。

「そうか。こちらも準備は出来ている。……だが、一つ問題が起きてな」

「何だ？」

クロードとアルも一転して真剣な顔つきに変わった。

「もうすぐロゼッタがこの街に来る。……恐らくお前を探しに来たんだよ、アル」

とりあえず船に案内された三人は、船室に入ってそこでしばらく待機することになった。ロゼッタの件はどうにかするからと言い残し、ルカは忙しげに船室を出て行った。

「はあ、まさかロゼッタが来るとはな」

ウンザリした様子のクロードに、リータは尋ねた。

「もしかして、近衛師団の女騎士ロゼッタ様ですか」

「そうだよ。彼女はアルや俺らと同じ魔王討伐部隊にいたから、変装は通用しない」

クロードはああ面倒くさいと叫んで空を仰いでいた。心底嫌そうなクロードの様子に、リータは訝しんだ。

「どうしてそんなに嫌そうな顔をなさっているんですか？　お知り

合いなんでしょう」
「あいつ説教くさいから苦手なんだ」
苦々しげにクロードは吐き捨てた。その姿にアルが苦笑して補足する。
「彼女は規律や道徳に厳しいんですよ。王家に代々仕える騎士の家柄ですし、本人もその辺に誇りを持っています。だから、自分にも他人にも大変厳しく当たる人でして」
「……騎士というのは皆そういうものなのではないのですか？」
「物語の中ではね」
リータの言葉をクロードは鼻で笑った。

それからしばらくして、ルカが戻ってきた。
「遅くなってすまない」
「で、ロゼッタの方はどうなった？」
「何とかなりそうだ。面倒なことになる前に出発する」
「……本当に大丈夫か？　この一件が露見したらルカだってタダじゃ済まない」
心配そうな顔でアルが言った。
「その辺は気にするな。色々と手は尽くしてる。それに、実は俺もバスカヴィルに移住するつもりだし」
「は？　何だよそれ」
クロードが驚きの声を上げた。ルカの家はバルディのそれなりに大きな商家だった。その当主が他国に移住というのは信じがたい話だった。
「実はな、親父と兄貴達の時代に色々あって……まあ簡単に言うと財産の処分と整理をしたんだ。王都の店も人に譲った」
「そんなこと聞いてないぞ！」
「言ってないし」
クロードの横やりをあっさりとかわし、ルカは話を続けた。
「知ってると思うけど、俺の嫁さんはバスカヴィルの人間だからさ。

つぶれかけた店に新しく金をつぎ込むより、売れるものは全部金にして向こうでやり直そうと思って」
「どうしてそんな、お前」
驚愕に狼狽した様子のクロードが言った。
「……それで、本当にいいのか？」
神妙な顔つきのアルも尋ねる。ルカは笑って言った。
「お前がそれを言うなよ。俺には後悔はない。……お前にだってないんだろう？」
ルカはじっとアルの目を見つめた。アルが力強く頷くと、ルカは何故かホッとした顔をした。
「そういうこともあって、俺はお前の駆け落ちに手を貸すことにしたんだ」
駆け落ちという単語に、リータはギョッとしてルカを見つめた。ルカはちらりとリータの方を見て、それからアルに視線を移した。
「俺もお前に人生を賭けたんだ。だから失敗するなよ？　アル」

17　船旅と空から来たモノ

船旅は驚くほど順調だった。

当初、国境の検問で見つかるのではないか、むしろ見つかった方が良いのではないかとさえ思っていたリータだったが、彼女の微かな願いはあっさりと破られた。国境越えは彼女が考えていたより、あっけないほど簡単だった。

ルカはリータら三人のために、偽の身分とバルディからの出国許可書を用意していた。運河で国境を渡る船には当然のごとく検問が行われる。しかし、船に乗り込んできた役人と兵士は書類と積み荷、そして乗組員の人数と身分を確認すると、すんなりと通行許可を出した。

ルカの話によれば、オルコット運河管理局に運河通行登録をしている船の検問は、通常より短時間かつ速やかに行われるという。また、予め積み荷や人員について書類を提出し検査を受けていれば、さらに検問は簡略化されるらしい。船に入るのは手配されている重犯罪者の類や密航者がいないかを、そして禁制品が乗せられていないかを最終確認するためだという。

身分証の偽造は犯罪でしょうと怒ったリータに、ルカは仕方ないと笑った。そして、確かに犯罪だけど、と前置きして話を続けた

「バルディからバスカヴィルに出るのは割と簡単なんだ。今回みたいな犯罪も結構あるんだけど、ほとんど摘発はされない。よっぽどの重罪人を逃がすとか、明らかな違法行為でもない限りね。でもね、その逆は面倒なんだ……何故か分かる？」

分からないと首を振ったリータに、ルカはニヤリと笑った。

「北から南に行くのは、バスカヴィルで一旗揚げようという貧乏人なんかが多いんだよ。バルディからすれば体の良い厄介払いさ。この間の戦争では金も物資も散々頼っておきながら、僕らの国は内心

では今でも、バスカヴィルをならず者の掃きだめだと見くびっているのさ」

運河ではオールや人足に引っ張られてゆっくりと進んでいた船だったが、運河を抜けてエヴェレ川に入ると、帆を上げて一気に加速した。リータは小さな船室を出て、今は船の甲板に立っていた。川は春の豊かな水を湛えてゆっくりと流れていた。川幅は広く、二隻の船がすれ違っても十分な余裕があった。川には何隻かの船が等間隔に浮いていた。彼女に声をかけてきた船員によれば、これでも今日は空いている方らしい。船員は日に焼けた笑顔が人なつこそうな青年で、船のことや川のことを楽しそうに教えてくれた。

船にはリータらを含めて七人乗っていたが、船員はルカを含めても四人だけだった。彼らはコロンボ商会の従業員で、全員バスカヴィル出身だという。社長のルカやその妻であるモニカからの信任が厚いものばかりだと言って、彼は胸を張った。

更に青年は彼女を励ますように言った。大丈夫、お二人のことは必ずアスキスまで送り届けて見せますよ、と。彼女の憂い顔の原因を勘違いしたのだろう。とりあえずありがとうと答えた彼女に、青年は声を低くして、面白がるような口調で言った。

「身分違いの恋で駆け落ちですって？　ロマンチックですね」

ニコニコと笑う彼に、リータは軽く目眩を感じた。どういうことなのかと恐る恐る聞いたリータに、青年は不思議そうな顔をしたが笑顔で答えてくれた。

要約すると、彼らは今回の一件をアルとリータの駆け落ちの手伝いだと思っていたのだ。貴族のアルと村娘のリータが結ばれぬ恋に落ち、親に反対された青年はその身一つで女の手を取り逃げてきた。社長にとって青年は長年の友人であり、大恩ある人物でもあった。彼らはどうか彼らの逃避行を手伝ってやってくれないか、と社長直々に頼まれ、彼らは意気揚々とオルコットにやって来たのだという。リータは内心の動揺を知られまいと必死になったが、続く青年の発

言には呆然とした。

「でも予定より早かったですね。さすがに焦りましたよ」

聞けば、計画の実行はもう少し後だと聞かされていたそうだ。準備自体は一週間ほど前からやっていたから何とかなりましたけど、と苦笑いした彼に、リータは引きつった笑いを浮かべるのが精一杯だった。

川の両岸には黒い森が広がっていた。川沿いにはかつての街道があるはずだが、時間が時間のためなのか、そこを通る人影はなかった。

青年が仕事に戻った後、リータはふと手元の紙片に目をやった。そこに書かれているのはリサ・バーンズという名。リサはコロンボ商会従業員で、アルバート・バーンズの妻であると書かれている。それはルカが用意した、リータのための偽の出国許可書だった。なおアルバートとはアルのことだ。リータはため息をついて、それをポケットに突っ込んだ。

先ほどの船員の話が本当なら、アルは彼女にプロポーズする前からバスカヴィルへの逃避行計画を進めていたことになる。これは勇者の『死亡』による不測の事態ではなかったのか？　リータは頭を抱えた。

不可避の陰謀に巻き込まれたから逃げることになったのだと思っていたのに、最初からそのつもりだったとは。一体、アルはいつからこんな馬鹿げたことを考えていたのだろう。大体、もう一方の当事者である私の事情や感情はどうでもいいの？　リータは憤りを通り越し、すっかり呆れていた。

リータは考えることに疲れ、ぼんやりと天を仰いだ。空は赤くなり始めていた。西の方角にエレ山脈の険しい山並みが見えた。西日がその稜線を赤く染め、山は美しく輝いている。エレ山脈は女神の

倒れた地であり、女神教会の神殿が存在する聖なる山だった。私が向かうべきなのはあの山にある神殿であり、信仰を忘れたという南の地ではない……リータは憂鬱な気分を抱えて山脈を見上げた。

私はいつか必ずあなたの御許へ向かいます。だから女神様、私にあなたの祝福を。リータは手を組み、目を瞑って祈った。

祈りを終え空を見上げたリータは、ほのかに赤い空に黒い点が一つ浮かんでいることに気づいた。その点は移動し、少しずつ大きくなっているような気がした。西日が眩しく、それが何なのかリータにはよく見えなかった。随分と大きな鳥だなあと目をこらした彼女が、それがただの鳥でないことに気づいたのはすぐだった。大きな羽と人間に似たシルエットの異常さに、彼女は目を見開いた。

??間違いない、あれは魔物だ!

リータは慌てて船室に駆け込んだ。アルとクロードは何やら談笑していたようで、血相を変えて飛び込んできたリータに驚いた様子だった。

「魔物です!　西の空を飛んでこちらに!」

リータの叫びに二人は即座に反応し、武器を手にして部屋を飛び出した。リータも彼らの後を追おうと身を翻したが、扉に手をかけた所で強い揺れに襲われた。

「魔物の襲撃だ!　弓矢を!」

「ぎゃあああ!」

男達の怒声と悲鳴が聞こえた。リータは立ち上がると外に出た。見上げると、船の上空を黒い影が飛んでいるのが見えた。それは人型をしているが、頭があるはずの部位からは黒い巨大な羽が生えていた。胴体には異常に筋肉が付いた手足が付いており、その先には鋭い鉤爪が鈍い光を放っていた。

??あれが魔物、この世ならぬモノ。

リータはそのおぞましい姿に顔色を失った。魔獣はこの世界の生物が姿を変えたものだが、魔物は違う。魔王の力によって別の世界

から呼び出される異形の生物たち、人の血肉を好む好戦的な化け物達を魔物と呼んだ。彼女は初めて見た魔物の恐ろしい姿に立ちすくんだ。

「しっかりしろ、おい！」

前方からする叫び声に、リータははっとなった。甲板には一人の男が倒れていた。彼の背中には魔物の手になると思われる三つの赤い筋が描かれ、そこからは血がドクドクと流れ出していた。ルカが彼を抱き起こそうとしていたので、リータは慌ててそれを手伝った。

「ルカ様、ここは危ないから逃げて……」

そう呟いて気絶した男をよく見れば、それは先ほどの船員だった。二人は怪我をした男を船室に運び入れ、ベンチにうつぶせにして横たえた。

リータは手際よく男の服をはぎ取り、怪我の様子を確認した。傷口は思ったより深くはなかったが、出血がひどかった。そして、傷の周囲には黒いあざのようなものがポツポツと浮かんでいた。呪いだ、彼女は顔をしかめた。

「私が手当をします！　道具と薬があったら貸して下さい！　あと水を！」

ルカは頷いて更に奥にある部屋へと向かった。リータは胸元からペンダントを取り出して、祈りの言葉を唱えた。

「ｏｐｎ　ｉｍｔｔ　ＲＴ　ｓｒ　ｓｓｔｒ」

彼女の呪文に反応し、石にほのかに光り始めた。彼女は意識を集中させ、更に続けた。

「ｍｇｃ　ＤＳＰＬ　ｏ　ｍ」

ルカが袋を持って部屋に入って来た。彼はリータの様子を見て、息を飲んだ。

「ｄ　ｓ」

石は更にまばゆく光った。リータは片手で輝く石を握りながら、もう片方の手で怪我をした青年の背中に触れた。彼女が触れた所を

中心にして、黒いあざが少しずつ消えていった。やがてあざが完全に消えたのを確認し、彼女は最後の呪文を唱えた。

「ｅｘ」

石の光がふっと消えた。リータはふーっと息をついて、呟いた。

「女神よ、あなたの奇跡に感謝します」

「大したものだね」

ルカの言葉に、リータは少しだけ笑って見せた。

「これで少なくとも呪いは大丈夫です。ほら、出血も大分止まったでしょう？　呪いを受けたせいで出血が多くなっていたんです。元々の怪我の方はそれほど大したものではないと思いますよ」

「そうか、良かった。君がいてくれて本当に助かったよ」

ルカは心底ホッとしたように見えた。彼は持ってきた袋と水筒を彼女に手渡した。

「これが救急用品で、といってもガーゼとかちょっとした薬くらいしかないが……こっちは水。すまないが、あとを頼める？」

「もちろんです」

リータが真剣なまなざしで頷くと、彼を頼むよと言い残してルカは外へと走り出て行った。彼女は袋の中身を取り出すと、すぐに治療を再開した。

「これが精一杯ね」

リータは血で汚れた自分の手を拭き清めながら呟いた。止血や消毒など彼女が出来る限りのことはしたつもりだったが、彼の怪我の具合を考えればとても十分とは言えなかった。

「……ありがとう、俺も行かなきゃ」

怪我をした男が小さな声を発した。起き上がろうとする男を制して、リータは言った。

「まだ動かないで下さい。傷口が開きます」

「でも」

彼女が手当を行っている間も、時折男達の怒声が聞こえていた。

彼もそれを聞いて外の様子が気になっているのだろう。無事に魔物を退治できていればいいけれど、彼女は戦っているはずの人々の無事を思い、扉の方を向いた。

「私が行って様子を見てきます」

「危ないから、君はここで待っていた方が良い」

男は弱々しい声で言ったが、彼女は覗くだけだからと言ってドアをそっと開いた。

外は大分薄暗くなっていた。もうじき日が沈み、辺りは完全に暗闇になってしまうだろう。そう思うと、彼女の気はますます重くなった。

「リータちゃん？」

前方にいた人影が彼女に声をかけた。

「クロード様？　魔物はどうなりましたか？」

「まだだ。奴は攻撃を仕掛けてすぐ逃げることを繰り返している。すばしっこくてなかなか捕まらない」

リータの質問に、クロードは苦々しげな声で答えた。

「そっちの怪我人は？」

「応急処置はしました。でも、早くちゃんとした所で治療しないと」

「そうか」

それだけ言うと、クロードは空を見上げた。濃紺の空は暗く、エレの山並みも既にその姿を隠していた。

「……奴は夜を待ってるんだろうな」

クロードの小さな呟きに、リータは戦慄した。

「クロード、あとルカも。ちょっと話がある、こっちに来てくれ」

後方からアルの声がした。クロードはリータに船室にいるようにとだけ言うと、すぐに行ってしまった。彼女は大人しく部屋に戻った。

やがてクロードが表情を変えて戻ってきた。その顔にただならぬ

ものを感じ、リータは彼に何があったのか尋ねた。
「アルが船を下りると言い出したんだ」
「どうして？」
「自分が囮になるからって言って……こんなの自殺行為だ」
リータは絶句した。もうじき日は完全に暮れる。闇の中一人で戦えるほど、あの魔物は容易いものには見えなかった。闇に乗じて逃げるにしても、その先は黒い森だ。人外の地に準備もなく飛び込むなど、やはり正気の沙汰ではない。どちらにしても無事で済むとは思えなかった。
「アルは、本気でそんなことを？」
クロードは首を縦に振ると、力なく言った。
「そんなことをして無事でいられる訳がない。でも、アルは俺やルカの話を聞いてくれないんだ。……頼む、あいつを止めてやってくれ」

「アル！　どこ？」
リータは外に飛び出ると男の名を叫んだ。目的の男はすぐに姿を見せた。
「リータ！　大きな声を出すな。狙われてしまうぞ」
彼女は男に詰め寄った。
「アル、何を考えてるの？　囮になるなんて馬鹿げてる」
アルはリータの後ろにクロードの姿を認め、顔をしかめた。
「クロード、余計なことを」
アルは珍しく声を荒らげた。クロードはリータを押しのけ前に出ると、負けずに声を張りあげた。
「だってそうだろ、俺はお前を助けたくて付いてきたんだ！　それをわざわざ死にに行かせたりはしない」
「仕方ないだろ！　あれは魔物だ。魔獣とは比較にならないくらい危険だ。このまま夜を迎えたら全員あいつにやられてしまう」
「だからってこんな手はないだろ、他に何かないのかよ！」

「あったらこんなことはしない！」
二人のただならぬ会話を聞いて、慌ててルカが駆け寄ってきた。
周囲の人々も彼らの方に注目していた。
「ちょっとやめとけ、二人とも」
ルカは何とか二人を宥めようとしたが、アルとクロードはしばしの間にらみ合っていた。やがてアルはふんと顔を背け、そのまま背を向けて歩き出した。ルカはクロードをちらりと見たあと、アルを追いかけた。

その時だった。
「おい、来たぞ！」
船員の一人が慌てて叫んだ。全員がはっとしたようになって空を見上げた。リータもつられて見上げると、空から黒い影が落ちてきた。
「逃げろ！」
誰かが発した声に、リータ以外は皆素早く反応した。甲板の上でただ一人、リータだけが黒い影をじっと見つめて立ち尽くしていたため、動くのが一瞬遅れた。
「リータ！」
「危ない！」
影はすぐ近くまで迫ってきていた。鋭い鉤爪が自分を狙っていることに気づき、リータは悲鳴を上げた。
次の瞬間、リータは突き飛ばされて甲板に叩きつけられていた。顔に何か生ぬるい飛沫がかかり、彼女は自分の体が引き裂かれたのだと思った。しかし、痛みはなかった。
「この野郎！」
クロードが渾身の一撃を叩き込み、魔物の左腕を切り落とした。魔物はキキキキ！と耳障りな鳴き声を上げ、血を撒き散らしながら翼をはためかせた。アルがとどめを刺そうと駆け寄ってきたが、魔物はそれより早く飛び立ちその姿を消してしまった。

「クロード様！」
リータは起き上がるとクロードに駆け寄った。
「おかげで助かりました、どうもありがとうございます」
リータの言葉に、クロードは左肩を押さえながら気にするなとだけ答えた。よく見ると、彼もまた左肩に負傷していた。
「大変！　手当てしますから早く中に！」
リータの声に、アルは血相を変えて叫んだ。
「ルカ！　もういい、船を岸に着けてくれ。俺が囮になるから逃げろ！」
「そんなことを言うな！　周囲の船も一緒に戦ってくれるし、直にオルコットから救援もあるはずだ」
「救援が来たって身元がばれたら俺は終わりだ。俺だけじゃない、お前やクロード、リータだって同じだ。俺のせいでこうなったんだ、俺が何とかする！」
アルは船の乗降口に走り寄ると、もう一度叫んだ。
「とにかく岸に寄せろ、でないと飛び込むぞ！」
本当に飛び込みそうなアルを見て、ルカは仕方なく船を止めるよう命令した。
「馬鹿、そんなことをさせるな！」
クロードは青ざめた顔で叫んだ。呪いのせいで出血量が多い、早く手当てしなければとリータは言ったが、クロードは全く聞いていない。仕方なく彼女は、少しでも出血が止まればと思い、被っていたスカーフを外すと彼の上腕をきつく縛った。
「ルカ様、あの兄さんを下ろしたってどうしようもないでしょう！？　しかももうすぐ夜です。こんなところで下りたら、魔物が来なくても死にますよ」
部下の言葉に、ルカは顔を歪めた。しかし、彼が発したのは一言だけだった。
「……下ろしてやれ」

ルカの様子に何かを察したのか、部下達はそれ以上何も言わずに船を岸に寄せた。

「俺も行く、連れて行け」

クロードは当然そう主張したが、アルは怪我を理由に頑なにそれを拒んだ。彼はクロードの側に立っていたリータを見ると、少しだけ笑った。

「ごめん、リータ。……でも、分かってる。私がいない方が本当は良いでしょう？」

唐突な言葉にリータはとっさに反応できなかった。何か言おうとしたリータを振り返りもせず、自分の肩掛け鞄だけを持ってアルは船から下りた。

「ルカ、クロードとリータを頼む」

アルはそう言って船を見上げた。

「南だ、川沿いに南へ来い！　必ず迎えに来るからそれまで何とか生きてろ！　あと、これ持ってけ！」

ルカは部下が無言で持ってきた背嚢を投げ落とした。アルはそれを拾うと、軽く手を振った。

「また来たぞ！」

空を監視していた船員が叫んだ。皆に緊張が走った。アルは魔物を見つけると叫んだ。

「俺はここだ！　こっちに来い！」

彼の叫びに反応して、魔物が向きを変えた。アルが森の中に走り込むと、魔物もそれを追って森へと飛び去った。

「本当に追ってったよ……」

船員達は驚きの声を上げた。

「さあ、今のうちに出航だ。怪我人もいるんだ、早くアスキスまで戻るぞ」

ルカの声に船員達はキビキビと動き出した。それを見たリータもクロードに言った。

「さあ、手当てしますからこちらに……」
クロードは俯いて何も言わない。
「クロード様？」
顔をのぞき込んだリータに、クロードは暗い瞳を向けた。
「ごめん……」
そう呟くと、クロードは突然リータを突き飛ばし、槍を持って船から飛び降りた。
「クロード様！　待って下さい！」
リータは叫び、船縁に駆け寄った。クロードはアルが消えた方に走って行った。彼女の叫び声に、ルカもまたそれに気づいた。
「あいつ、何てことを」
リータの隣でクロードの背中を見送りながら、ルカは苦々しげに呟いた。

「怪我もひどかったし、まだ解呪だってしてないのに……」
リータは何故かひどく苛立っていた。自分勝手な理由で自分を巻き込んでおきながら、責任だ何だのと言って簡単に命を投げ出そうとする彼らに、どういう訳か無性に腹が立って仕方がなかった。
リータは身を翻すと船室に駆け込み、医薬品の入った袋を手にした。そして、たまたま目に付いたクロードの鞄を肩に担ぐと、彼女は再び甲板に戻り、乗降口を開いて岸へと飛び降りた。周囲の誰もが彼女の行動に呆気に取られた。
ルカはリータを追って岸に降りた。
「リータさん！　待て、行っちゃダメだ！　あいつらの思いを無駄にする気か！」
ルカは走り去るリータに向かって叫んだ。しかし、彼女は振り返りもしない。
？？無駄にして何が悪いの！　私の思いは誰も気にも止めないくせに！

リータはそのまま黒い森へと身を躍らせた。

18　とある記憶と森の中の戦い

気がついたら、一人で迷子になっていた。

少年はしゃがみ込んで木の根元を見つめていた。正確に言えば、木陰に生えている赤いキノコを観察していた。見るからに毒々しい色に模様、とても食べられるものには思えない。しかし、友人の少女に聞いたところによれば毒はなく、食用なのだという。思わず驚きの声を発した少年に、あんまり美味しくないよ、という少女のそっけない返事が返ってきた。

森は、好奇心の強い少年にとって格好の対象だった。ゆったりと葉を広げた広葉樹の森は暖かく、色彩に満ちていた。ここよりも北にある彼の故郷の森は年中薄暗く、人や生命の存在を拒んでいるように見えた。大人達でさえ、その森には滅多に入ることはなかった。彼は自室から見えるその森が昔から恐ろしかった。立ち入ったのはたった一度だけで、しかもそれは彼にとってぞっとするような経験だった。

初めてこの森に連れられてきた時、少年は内心密かに怯えていた。国中で悪名高い『黒い森』、そんな所に子供だけで行くとは正気の沙汰とは思えなかった。しかし、遊び相手の少女達にそんな気持ちを悟られる訳にはいかなかった。何と言っても彼女らは女で年下なのだ。こんなことで馬鹿にされたくはなかった。

しかし、『黒い森』は彼の思っていたものとは全く違っていた。空を覆う枝葉の隙間からは太陽の柔らかな光が差し込んで、色鮮やかな草花があちこちに咲いていた。薬草や野草の採集に狩猟、あるいは木材を得るため、村人達は当然のように森に入っていた。村人は森を畏怖していたが、彼の故郷の人々とは異なり、森を恐れてはいなかった。悪名高い『黒い森』がこのようなところだったとは、

少年は幼心に感嘆した。
それ以降、彼は森が好きになっていた。

それはある暑い夏の日のことだった。
三人で川遊びに来た帰り道、森の中で奇妙なキノコを見つけた少年はそれに目を奪われた。目を輝かせている少年に、少女二人は呆れていた。これは何だろうという彼に、少女の一人が説明をしてくれた。彼女はよく親と森に入っているため、少年やもう一人の少女よりずっと森の動植物に詳しい。
「ねえ、そろそろ行こう？」
「早くしないと行っちゃうよ」
少女達はつまらなそうな声で少年に声をかけた。どうしてこの面白さを分からないんだろう、少年はいつも不思議に思っていた。彼女たちは彼と違って生まれた時からここに住んでいる。だからここの良さが分からないのだろうか。彼はしゃがみ込んでキノコを観察しながら、ぼんやりとそんなことを考えていた。
ひとしきり観察を終えて満足した少年が立ち上がり振り返ると、そこには誰もいなかった。もしかして先に行ってしまったのだろうか？　キョロキョロと見回したが、そこに彼女達の姿を見つけることは出来なかった。少年は少女達の名前を叫んだ。しかし期待していた返事はなく、森の中は静寂に包まれていた。
？？置いて、行かれた？
少年の顔から血の気が引いた。三人でどこかへ行く際、大抵彼は少女二人の後ろを歩いていた。それは二人の方が地理に詳しいからだったが、道行きでは大抵二人がずっと楽しげに話していて、少年はそれを後ろから見ているだけのことが多かった。森に詳しい方の少女は時折振り向いて少年に話しかけてくれた。彼が立ち止まって何かを見ているとすぐに気づいてくれて、あれは何だという彼の質問に答えてくれた。しかし、もう一人の少女と話し込んでいる時は、しばしば彼女でさえ彼の存在を忘れた。

普段なら、それでも良かった。彼女達が案内してくれる先は少年にとって大抵面白い場所だったし、少年も多少は森の地理を把握していたから、例えば今回のような場合でもすぐに後を追えた。

しかし、今回は少し事情が違った。初めて行った場所の帰り道なのだ。辺りを見回しても似たような木々ばかりで、方向感覚すら怪しかった。耳を澄ませても聞こえてくるのは枝葉がそよぐ音と鳥の鳴き声ばかり。草木の生臭い匂いとむっとした土の匂いが辺りを包んでいた。

「……どうしよう」

少年は途方に暮れた。帰り道が分からない。呼んでも誰も答えてくれない。やっぱり森は怖い。森になんて来るんじゃなかった。思いがけぬ恐怖に、少年の目に涙が浮かんだ。あの時と同じだ、と少年は思った。母がすぐに飛んできてくれたと思い直した。しかし、同時にその母がもういないことを思い出した。

??もう誰も僕を助けてはくれない。

そう思うと、少年は無性に悲しくなった。彼を助けてくれそうな人と言えば、母と幼なじみの少年くらいだ。でも、二人とも今は彼とずっと離れたところにいた。彼を迎えに来てはくれない。

??だって、僕はいらない子供なんだから。

少年はポロポロと泣き始めた。

しばらく泣いていた少年だったが、不意に自分の名を呼ぶ声を聞いた。顔を上げると、少女の一人が心配そうな顔で彼に駆け寄ってきた。森に慣れた方の少女だった。

「ごめん、大丈夫だった?」

そう言って彼の目をのぞき込んだ少女の顔を、彼は一生忘れないと思った。

走り抜ける森の中、草花の青臭い匂いと湿った土の匂いにアルはふと過去のことを思い出した。

？？結局、俺は森の中一人で死ぬのか。

彼はふと口元を歪めた。頭をよぎったのは友人達との大切な思い出だけではなかった。それはもっと昔、彼が幼い頃の記憶だった。一人で森の中をさまよった恐怖と、彼を見つけて抱きしめてくれた母の優しいぬくもりがないまぜになった古い記憶。

？？やっぱり、あの時死ねば良かったのかな。

自分がいなければきっと誰も不幸にはならなかっただろうし、リータやクロードを自分の不幸に巻き込むことはなかったはずだ。彼はそう思ってやりきれない思いがした。それでも自分を救ってくれた大切な人々を助けるため、彼は力の限り走っていた。

背後には木々を揺らす不気味な音が迫っていた。そして時折キーキーという耳障りな鳴き声が聞こえてきた。魔物はアルを確実に追って来ていた。彼に余計なことを考えている余裕はなかった。とにかくあれを船から引き離し、その後に襲ってきたところを仕留める。アルはそのことに意識を集中させた。

ふと、目の前に小川が現れた。上を見ると、木々が切れて暗い空が覗いていた。まだわずかに明るさが残っていたが、日が完全に暮れたら自分に勝機はない。そう思い、彼はそこを戦場と決めた。

少し離れた場所に荷物を置き、布で包んで隠していた剣を抜いた。アルは意識を集中させ素早く呪文を唱えた。

「……ｍｇｃ　ＲＮＦＲＣ　ｍｘ　ｄ　ｓ」

剣身がまばゆく光り、アルは体に力が満ちていくのを感じた。魔物の羽ばたきさえクリアに聞き取ることが出来た。もっと早くこうしておけば良かったと、アルは自嘲気味に笑った。船の上では別の剣を使っていた。勇者だとバレると言って、ルカやクロードに女神の剣を使うことを止められていたのだ。だが、今はその必要もない。彼は魔法により限界まで自分の身体能力を高めた。

身体能力を高める魔法は筋力や五感を高める効力を持つため、一対一の戦闘では絶大なアドバンテージになる。しかしその反面、使用後の肉体の消耗は激しい。その魔法を使い、彼は自分の身体能力を可能な限り引き上げた。普段のアルならこのような魔法の使い方はしない。こんなことをすれば、戦闘後しばらくは疲労で身動きがとれなくなってしまうからだ。

??自分はもう、どうなってもいい。

そんな風に思いながら、アルは近づいてくる魔物の動向に五感を集中させていた。剣を握る手に力がこもる。先ほど見た薄気味悪い姿を思い浮かべつつ、彼は静かにそれを待った。

木々の隙間から、黒い影が躍り出た。一直線に襲いかかってくる爪をすんででかわし、アルは素早く魔物の背後に回った。そして、羽の生えた頭部の下の辺りを狙って剣を振りかざした。魔物はくるりと回転し、羽をぶつけようとする。その羽もまた鋭く尖っており、ぶつけられれば人間の皮膚や肉を容易く切り裂いてしまうように見えた。アルはとっさに身をかがめ、振り上げた剣で羽の根元に切りつけた。魔物が悲鳴を上げた。

血しぶきを上げて魔物の片羽が半分折れた。キキキ！　という魔物の大きな叫び声と生ぬるい魔物の体液の感触に、アルは顔をしかめた。

「これでもう飛べないだろう！」

体液を撒き散らしながら狂ったようにグルグルと回転する魔物から距離を取り、アルは再び剣を構えた。魔物は回転を止めると、よろよろと彼に向き直った。アルは改めて敵を観察した。魔物の左腕はクロードのお陰で既にない。厄介な右の羽は半分折れて頭から垂れ下がり、もう空を飛ぶことはかなわないだろう。血まみれになった化け物はまともにバランスも取れないのか、ふらふらとしている。

相手が弱っているなら一気にとどめを刺すべきだ。そう判断し、アルはよろめく敵に素早く斬りかかった。しかし、胴体に切りつけ

ようとした瞬間、魔物は彼の視界から姿を消した。
「え」
魔物は彼の頭上に飛んでいた。羽による飛行ではなく、足を使った跳躍だった。振り返り見上げると、魔物は背後の木を蹴って元いた方向、つまりアルに向かって飛びかかってきた。
「くそっ！」
アルはとっさに避けて、攻撃の直撃は避けた。しかし、足が滑って体勢を崩し、彼は尻餅をついた。魔物は素早い身のこなしで再び跳躍し、近くの木を蹴りつけて彼に飛びかかってくる。ダメだ、完全に避けるには間に合わない。彼にはそれが分かった。

「アル！」
その時、いないはずの男の声が響いた。ドスッという重い音と共に、魔物が再び悲鳴を上げた。魔物の脇腹に槍が突き刺さっていた。槍の衝撃のために魔物の軌道もわずかに逸れ、アルは攻撃をかわすことが出来た。彼は急いで立ち上がると、槍を受け倒れている魔物の胴体に迷うことなく剣を突き刺した。
キーキー！　というぞっとする魔物の悲鳴が森にこだました。アルは痙攣する化け物の体に何度も何度も剣を振り下ろし、残った手足を切り落とし胴体を切り裂いた。
やがて断末魔が途絶え、魔物はぴくりとも動かなくなった。化け物は、ただの血にまみれた肉の塊になっていた。

「……アル」
クロードの声に、アルはハッとして振り返った。木陰にうっすらと座り込んだ友人のシルエットが見えた。
「何でここに来た、クロード」
アルは肉片に刺さった槍を引き抜きながら言った。
「当たり前だろ」
クロードの声は小さいが、その声には安堵の響きがあった。

「すまない……でも助かった」
アルは心からそう言うと、クロードに歩み寄った。ところがクロードはアルを制した。
「あー……こっちに来る前に手と顔洗っとけ」
「何だよ、それ。もう俺だってふらふらなのに」
アルは意味が分からず笑った。
「……いや、だから」
クロードは自分の左後方を指さした。アルはその先に目を向けると、そこにはもう一人誰かがいるのが見えた。
アルが暗闇を凝視して見たのは、恐怖に凍り付いているリータの顔だった。

19　ささいな思い出とささやかな願い

肉と血の腐ったような酷い臭いがあたりに立ちこめている。臭いはアルの殺した魔物から漂っていた。彼らは耐え難い腐臭を発する死体から少し離れた風上の木陰にいた。多少離れたところで臭いは消えず、また魔物の血を直に浴びたアル自身も酷い臭いを発していた。

早くその場を離れようと提案したリータの意見を却下し、アルはあえて死体の近くにキャンプすることを決めた。彼が言うには魔物の発する臭いは獣や魔獣を遠ざけるのだという。アルは戦闘の後遺症で疲労困憊状態、クロードは怪我による出血で体力を失っている。遠くに移動することは不可能であり、臭いの不快感より身の安全を優先するしかなかった。正直こんなところにいたくはないリータだったが、身の安全には代えられない。アルの言葉に同意するしかなかった。

「どうしてあなたまで来たんですか。私はあなたを助けるために船を下りたのに」

たき火を囲んで座り込んだ途端、アルはリータを咎めるように言い放った。しかしその口調とは裏腹に、その声には怒りや苛立ちは感じられなかった。青白い表情から分かるのは彼が疲労で憔悴していることだけだった。リータは静かな声で答えた。

「クロード様のためです。そもそも、この方は私を庇って怪我をしたんです。心配するのは当然でしょう？」

アルは静かにリータを見つめていた。まるでその言葉に嘘はないか見定めるかのように。

「でも、私が来る必要なんてありませんでしたね。……あんな魔法があるのなら」

クロードの怪我は実際酷いものだった。左の上腕部の肉は裂け、縛っただけではとても出血は止まりそうになかった。しかも呪いが上腕を覆い、残った皮膚も黒ずんでいた。クロード本人は気丈にも平気なふりを装っていたが、彼が無理をしているのは明らかだった。

思っていたよりずっと酷い怪我にリータが青ざめていると、戦いを終えたばかりのアルが近寄ってきた。彼は友人の傷を覗き込むと、その本人の制止も聞かず、ためらいもなく魔法を詠唱し始めた。

彼の起こした奇跡により、クロードの怪我はあっさりと癒えた。傷口は遠目では分からないほどなめらかに修復され、既に流れ出た血液の痕跡と血まみれの衣服だけが後に残った。

「あんな魔法が存在するなんて知りませんでした」

感心したリータの言葉に、アルは苦笑いした。その側で横たわっているクロードが小さな声でぼそりと呟いた。

「俺のために、こんなことをする必要はない」

「気にするな」

「気にするに決まってるだろ！　連続でデカい魔法を使うのはキツいって自分で言ってたじゃないか。しかもあの魔法は消耗が大きいからあんまり使いたくないって……うっ」

クロードはこめかみを押さえて顔をしかめた。

「この魔法は表面の傷を治すだけなんだ。だから既に受けたダメージ？？出血とか体力の消耗とかは治らない。しばらくそうして休んでろよ」

「知ってるよ。……二度目だからな」

そう言って目を閉じたクロードの顔色は蒼白で、返事をすることすらしんどそうに見えた。

「大丈夫ですか？」

そう言ってリータはクロードの顔を覗き込んだが、彼はふてくされたように顔をふいとそらし、その後は一言も発しなかった。それからしばらくして、彼は静かな寝息を立て始めた。

眠っているクロードを横目で見ながら、アルがおもむろに口を開いた。
「リータ、この魔法のことは内密にしてくれませんか」
「どうしてですか？　こんなすごい魔法があるなら……」
「だからです。こんな魔法があると知れば、皆それに群がるでしょう？　でもこの魔法はあまり多用できません。詳しくは言えませんが、魔法発動には色々条件があって、誰に対しても使えるものじゃないんです。実を言えば、上手くいったのはクロードに対してだけです……父上にも効かなかった」
そう言って目を伏せたアルの顔もまた、クロードに負けず劣らず蒼白だった。リータはそれ以上追求するのを止めた。

「……私が火の番をします。あなたも少し休んで下さい」
「しかし」
青白い顔をしたアルが言う。戦闘に回復という大きな魔法を二つも連続して発動させたのだ。いくら勇者とはいえ、その疲労感は彼女には想像もつかなかった。
「あれの近くなら獣も寄ってこないんでしょう？　火だって起こしたんですから大丈夫ですよ」
アルの視線は揺れ、どうしようか迷っているように見えた。
「何かあったらすぐに起こしますから」
リータがそう言ってアルを真っ直ぐ見つめると、彼は視線を下げ申し訳なさそうな顔をした。
「……すみません」
そう言うと、男は上半身を倒してそのまま横になった。

「……あなたが来てくれて良かった」
不意に男が呟いた。それは小声で聞き逃してしまいそうな小さな囁きだった。

「どういう意味ですか」
「あなたと死ねるなら、それはそれで構わない」
その声と言葉に、リータはぞっとした。男が本気でそう言っていることが彼女には分かった。こんな人とこんなところで死ぬなんて考えたくない。嫌悪感で一杯になった彼女は、思いがけず口を開いていた。
「そんな風に簡単に命を捨てる気なら、その命を私に下さい」
口走ってから、彼女はしまったと思った。
「え？　それは……」
アルの声に一瞬期待の色が浮かんだ。それを感じ取ったリータは少しだけ迷ったが、やがて開き直って冷たい声で言い放った。
「勘違いしないで下さい。一緒に国に戻って教会に出頭するんです。それで、その命に代えて、私やクロード様、それにルカ様達の助命と無罪の証明をお願いいたします」
「……悪いけど、教会は当てにならないと思うよ」
アルの声はなぜか楽しそうだった。リータは苛立ちを押さえ、努めて静かな声で言った。
「どうしてですか？　教会を否定するなんて、女神の代行者たる者の言葉とは思えませんね」
「勇者は辞めました。勇者ではない私の言葉を彼女たちが聞くと思いますか？」
「国王陛下のところに直に行くよりずっとマシでしょう？　大体あなたが自分をどう言おうと『勇者様』であることに間違いはありません。教会はあなたを無碍にはしないと思います」
「そんなの都合の良い妄想だよ……まあいいや。それで無事無罪放免になったら、リータはその後どうします？」
「村に帰ります。コジモ様にご迷惑をかけたことを謝ります。許してもらえたなら元の予定通り、教会に戻ってシスターになります」
「もし本当に教会へ逃げたとして、本当にそんなことになると思いますか？」

「知りません。未来は女神様のみがご存じです」
「……」
どういう訳かアルは口元を押さえ、くつくつと笑いをかみ殺していた。その思いがけない行動に、リータは馬鹿にされたようで怒りを感じた。
「何がおかしいんですか」
「いや、あなたは変わってないなあと思いまして」
「どういう意味ですか」
「そういう自分第一なところ、相変わらずですね。変わってなくて私は嬉しいですけど」
「私はそんなんじゃ」
「とりあえずは自分の幸せを考えろ。自分の幸せが何か分かったら、それから自分も皆も幸せになれる最善の方法を捜せ、だったかな？滅私奉公を旨とするシスターの理念とは真逆ですね」
ニヤリと笑いながら放たれたアルの言葉に、リータはハッとして身を凍らせた。
「……どうしてそれを」
「覚えてない？　あなたが話してくれたんですよ。亡くなった御母堂の言葉だとね。何というか、さすが『魔女』の血統だ」
その言葉を聞いてリータは唖然とした。そして男の記憶力の良さに内心舌を巻いた。余計なことを話すべきではなかったと、彼女は幼い頃の自分を呪った。黙っているリータをからかうようにアルは続けた。
「ああ、勘違いしないで下さい。私はこの言葉が好きなんです。……もしかしたら、ずっとこの言葉が頭の中にあったから、私はこんなことをしたのかもしれない」
「……」
リータはアルの思いがけない言葉に動じて、何も言い返せなくなっていた。男は押し黙っている彼女を薄目を開けて見ていたが、やがてつまらなそうにあくびを一つすると、そのまま眠り込んでしま

った。

男二人の寝息に挟まれ、リータは一人炎を見つめていた。

どうしてこんなことになったのだろう？　リータは一人考えていた。アルはなぜ、ここまで私に執着するのだろう？　リータにはさっぱり分からなかった。そもそも彼女はつい先頃、彼が村を再訪するまで、この幼なじみのことをすっかり忘れていたのだ。再会後の数週間、折に触れては少年時代の彼のことを思い返してみてはいるが、リータは結局大したことは思い出せずにいる。

それなのに、アルは違った。彼はリータが何気なく話したはずの些細なことを覚えていた。魔女の血統がどうだとかいう話は彼女自身すっかり忘れていたことだった。彼女は自分がアルにそんなことを話した覚えもなかった。男の記憶力は彼女を困惑させ、恐怖すらさせていた。

また、魔物にとどめを刺す彼の姿を見たことは、彼女にまた別の恐怖を抱かせた。無表情のまま、既に動かなくなっていた魔物を何度も何度も刺し貫くアルの姿に、リータは言いようのない不安を覚えていた。このまま流され続けたら私もまたあの魔物と同じ運命を辿るかもしれない。そんな不吉な予感さえ彼女は感じていた。

ああ、テレーザに会いたい、会って話がしたい。彼女の脳裏に幼なじみである親友の顔が浮かんだ。いつでも明るく、彼女を励まし勇気づけてくれる無二の親友。リータはテレーザの笑顔を無性に見たくてたまらなくなった。それに彼女なら何か覚えているかもしれない。私の状況について的確にアドバイスしてくれるかもしれない。リータは膝を抱えて暗い空を仰いだ。

テレーザはいつもリータとは違う視点を提供してくれていた。それは領主の娘という特権階級に属する者の考え方であったり、ある

いは恋する少女のものだったりその時々によって様々だった。特にリータにとって新鮮だったのはロマンチックな少女思考、あるいは幸福を掴んだ女としての物の見方だった。この二つは彼女に欠けているものだったが、リータはテレーザとの対話の中でこれらを学んだのだった。親友を通して『女』の思考について知ったことは、女ばかりの教会生活では意外なほど役に立っていた。

テレーザのことを思い返しているうちに、リータは村のことをあれこれと考えるようになっていた。彼女は本当に無事なのだろうか？　コジモ様は？　村の人々は？　教会の仲間達は？　彼女の思考は徐々に最初とずれていった。

やがて夜が白み、森の中も明るさを取り戻してきた。結局リータは一睡もせずに、静かに夜を過ごした。結局獣一匹姿を見せることもなく、夜は明けようとしていた。

「……あれ、リータちゃん？」

見ると、クロードが目を覚ましていた。薄ぼんやりと目を開けて、彼は焦点の合わない目を彼女に向けた。

「もしかして寝てないの？」

クロードは上体を起こして気だるそうに座った。その顔は昨夜ほどではないにしろまだ青白く、具合はあまり良くなさそうにリータには見えた。

「夜番には慣れてます。ご心配なく」

彼女はそう言うと立ち上がった。

「どこへ？」

クロードが心配そうな顔つきでリータを見ていた。

「ちょっとその辺を見てきます。火を頼みますね」

森の中を見渡すと、そこは意外なほどリータの知る『森』に近い

ものだった。茂みに生えている植物や木の根元に生えているキノコにも、彼女が見知っているものが多く含まれていた。そこには食べられるものも多数あり、彼女は生存の小さな希望を見いだした。

そしてふと、リータはあることを思い出した。それは彼女の母親がある時教えてくれた、家に伝わる秘密のおとぎ話だった。それは遠い昔のことで、彼女はそれを信じなかった。話している母親自身、信じているようには見えなかった。ただ、もしそれが本当のことなら??。

唐突に倒れている魔物の死体が目に入って、彼女は再び暗澹たる気分になった。細く緩やかな川のほとりに倒れているそれは、すでにその原型を失っていた。肉はドロドロに溶けて赤い骨がむき出しになっていた。その強烈な腐敗臭に彼女は袖で鼻を覆った。

よくよく観察してみると、その生物の骨格は人間によく似ていた。鋭い爪のついた手足の先端と頭蓋骨がないこと以外は、人間のものと言っても傍目には分からないほどだった。リータは不思議に思って更にそれに近づこうとした。

「止めときな、汚いよ」

突然後ろから声をかけられ、リータはびっくりして振り返った。そこには若干呆れ顔のクロードが立っていた。

「女の子が見るようなものじゃないよ、行こう」

少しだけ後ろ髪を引かれるような思いはあったが、リータは男について歩き始めた。彼女ふと男に声をかけた。

「あの、アルは?」

「さっき起きたけどまた寝てる。……戦闘向けの魔法は後が辛いらしいんだ。もうしばらく休ませてやりたいが……」

リータはあることを思いつき、立ち止まった。

「あの、クロード様。ちょっとお話があるんですが」

「何? 戻ってから聞くよ」

「あの、ちょっと。できればアルには聞かれたくないので」
彼は少し考えたようだったが、やがて頷いて二人は少しだけ森に入った。

「で、何だい？」
「あの、これからどうするか考えていらっしゃいますか？」
リータの言葉に、クロードは難しそうな顔で首を振った。
「……もしかしたら、私は生きてこの森を出るための方法を知っているかもしれません」
男の顔色が変わった。しかし彼は訝しげな目で彼女を見据えた。
「本当か？　それはどういう手段なんだ」
「それはまだ言えません。でも、どうか協力して欲しいんです」
「協力は構わない。でも何でアルには聞かれたくないんだ。あいつとも話すべきだと思うけど」
リータは迷った。昨夜のアルの言葉は、未だに彼女を困惑させていた。ただ、それをクロードには言いたくはなかった。そうしても、彼は彼女の不安を笑い飛ばすだけだろう。一方で、クロードも考え込んでいる様子だった。リータは彼の迷いを感じて、更に言葉を続けた。
「信じてくれないなら、私は一人でも行きます。……こんなところで死にたくはありませんから」
クロードはギョッとしてリータを見つめた。彼女の脳裏には昨夜のアルの言葉が響いていた。絶対にこんなところで死んでやるものか、その恐怖と焦りが彼女を動かしていた。
「そんなこと言われてもなあ。大体何で俺にだけそんなことを言うんだ？」
彼もまた困惑していた。その様子を見て、リータは意を決して言った。
「クロード様にお願いがあるんです。……私の言う方法でもし無事に戻れたら、お願いします。私を助けて」

「はっ？」
クロードは訳が分からないという顔で、自分にすがるリータを見下ろしていた。
「……いいえ、助けてくれなくていいです。何と言っても、あなたはアルの絶対の味方なんですから。でも、私の話も少しで良いから聞いて下さい。それだけでも良いです。お願いします」
途中から声が震えていたことに、彼女は自分で気づいていた。思っていることを声に出してしまったせいで、溢れる感情に歯止めがかからなくなっていた。目尻に涙が浮かぶのを感じながら、彼女はクロードを見上げた。
「お願いです……私はただ」
涙と嗚咽で、リータはそれ以上話すことが出来なかった。クロードはただ困惑の表情を浮かべ、俯いて静かに泣いている女を見つめていた。

20　後悔と羞恥心

「ふぅ……」

川の水をすくって顔に思い切りぶつける。冷たい水がまだ熱を持ったまぶたを冷やし、心地よかった。

??何をやっているんだろう、私。

リータはつい先頃の自分の行動を後悔していた。泣いたところでどうにもならないのは分かっていた。そして何より、それをクロードの前でやってしまったことを彼女は恥じていた。

泣いているリータに、クロードはほとんど何も言わなかった。ただ困ったようにそっと頭を撫でただけだった。そのためらいがちな感触から、彼女は男の困惑を痛いほど理解していた。

泣くのは卑怯だとリータは何となく思っている。幼い頃から彼女は友人の泣き顔に弱かった。例えば二人が喧嘩をする場合、大抵ことの発端はテレーザのわがままやいたずらだった。しかし、テレーザがあの美しい目に涙を貯めているのを見ると、リータはいつも何も言えなくなった。そして気がつけば、泣いている友人を慰めている。彼女らの喧嘩はいつだってそんな風に終わったものだった。

そういう場合、自分から折れるのは全く構わないとリータは思っている。なぜならテレーザは領主の娘で、リータは臣下の娘だからだ。リータが少しだけ気にくわないのは、そうすれば自分が黙るとテレーザが明らかに分かってやっていたことと、それを分かっていてやはり友人を許してしまう自分の甘さだった。

そんな訳で、リータは泣くという行為が苦手だった。これはある種の暴力だと彼女は密かに思う。目の前で誰かが泣いていれば気になる。彼女はその気はなくてもつい世話を焼いてしまう。そして気づけば、泣いている人の思惑通りになっている。これが暴力でなくて何なのか。

だからこそ、彼女は人前でみっともなくも涙した自分に恥じ入っていた。

ただ、涙は彼女の追い詰められた心を少しだけ軽くした。涙の意外な効用に、こんなことなら宿で一人の時に泣いておけば良かったと考え、リータは少しだけ肩をすくめた。

結局自分を救えるのは自分だけだ。他人を当てにしてはいけない。自分は泣きわめいていれば誰かが助けてくれるような存在ではない。彼女は口元に引きつった微笑を浮かべ、もう一度冷水をすくい、少しだけ腫れたまぶたを冷やした。ひんやりとした感触は彼女の暴走した頭も沈めてくれる気がした。

感情に囚われて流されてしまったら、自分はきっと終わってしまう。今、私がすることは何だろう。これからどうしたらいいのだろう。それを考えるのだ。リータはきゅっと目をつむり、もう一度状況と自分の持つわずかなカードを検討し始めた。そうやって現実を取り戻した彼女は、破裂した感情を再び思考の奥底に押し沈めていった。

人の気配に振り返ると、苦虫を噛みつぶしたような表情のクロードがじっとリータを見つめていた。彼女がやけを起こさないか監視しているのだろう。

「取り乱してすみませんでした。……さっきのことはお気になさらないで下さい」

そう言って頭を下げたリータに、男は言う。

「別に良いよ。こんな状況じゃ仕方ない」

その声は意外なほど優しく、彼女はますます罪悪感に囚われた。何と返すべきか分からず、リータは目を伏せた。

「……そういえば昔、アルが森の中で迷子になったことがあるんだ」

クロードが突然話し始め、彼女は男の顔を見つめた。

「知ってるかも知れないけど、昔のアルは結構泣き虫だったんだ。

あの時の奴はさっきの君よりピーピー酷い泣き方だったよ。慰めるのは本当に大変だった」

その話に、彼女の脳裏にふと過去の記憶がよぎった。少年は時々思いがけないことで突然泣き出すことがあった。それはいたずらだったり何かの話をした時だったり様々だったが、そのご機嫌取りはもっぱらリータの役目だった。

彼らの故郷ではクロードがその役をやっていたということか。それはきっと自分とテレーザの関係と似たようなものだろう、リータはそう思って少しだけ笑った。クロードもそれを見て少しだけ笑った。

「……で、ここを抜ける方法ってのは？」

キャンプへと戻る道すがら、クロードは当然の質問を口にした。

リータは一瞬迷った後、静かな声で答えた。

「助けを呼ぶんです」

「誰の？」

彼女はしばしためらってから答えを返した。

「多分、森の民と言われている人たちの」

「はあ、どうやってさ」

クロードは呆れたような口調で言う。森の民が人間と接触を断っているのは周知の事実だった。いくら森の近くに住んでいるとはいえ、たかが田舎の小娘が森の民と連絡を取る手段を知っていると言っても誰も信じないだろう。『秘策』にがっかりしたクロードの反応をリータは当然だと思った。なぜならリータ自身も実のところあまり信じてはいないのだから。

しかし、彼女は内心の疑念を隠し、話を続けた。

「昔、聞いたことがあるんです。黒い森には入ってはいけないけど、もし万が一入り込んでしまったら、川を辿って湖に行けと」

「湖？」

「はい。森の中には二種類の川があります。一つはあの大きな湖に

至る川、そしてもう一つは森の最深部にある湖に繋がっているらしいんです」
「ふーん、それで」
クロードは話半分という風情でリータの話を聞いていた。
「その湖の近くに森の民は隠れ住んでいるそうです」
「でも、彼らは人間の前に姿を現さないよね。行ったところで無視されんじゃないの？」
男の疑問は当然だった。彼女はどう説明するべきか少し考えてから口を開いた。
「話には続きがあって……湖にたどり着けたらある呪文を叫べ、と教わりました」
「呪文？」
うさんくさげなクロードの呟きに、リータは頷いた。
「呪文があるんです。親から子へと口伝えられてきた秘密の言葉が」
「それは村に伝わってるの？」
「いいえ。私の家に……正確には私の家系に」
「……それを唱えたら、彼らが出てくると思う？」
完全にあきれ果てたようなクロードの言葉に、目を伏せた。こんなことを言われて、はいそうですかと簡単に信じてくれる人はいないだろうと考える。しかし、彼女には訳の分からない言い伝えだけでなく、もう一枚のカードがあった。
「正直、呪文の効力は分かりません。でも彼らの注意を引くことは出来るかもしれません。そうすれば」
「そうすれば？」
リータはクロードを見据えて答えた。
「後はアルが勇者であると示すことができれば、彼らは私達を助けてくれるかもしれません」
私達は約定を守っている？？赤い目をした子供の声が二人の脳内に蘇る。もしあの言葉が本当なら、彼らは『勇者』には力を貸してくれる可能性があった。

クロードは彼女の提案になぜか渋い顔をした。消耗したアルにこれ以上勇者としての力を使わせることにためらいがあるのだろう、とリータは推測した。

「言いたいことは分かった。この状況では確かに検討する価値がありそうだが……何でそれをあいつに直接説明しない？　別に聞かれたって問題はないだろう？」

「『女神の代行者』に、私のような見習いシスターごときが進言などできません」

リータのあっさりとした答えに、クロードは眉をひそめて黙り込んだ。リータは静かに話を続けた。

「これは信仰の問題です。シスターは女神に仕えるものであって、具体的な何かをして欲しいと願うことなど許されません。それは代行者に対しても同じです」

「今までにもそういう局面はあったように思うけど」

皮肉めいた表情を浮かべ、クロードが問いかける。

「はい。女神に仕えるものの端くれとして、恥ずべきことだったと後悔しております」

「それ、本気で言ってる？」

「もちろんです」

さも当然というように答えるリータをしばし見つめた後、クロードは彼女から目を反らして呟いた。

「……君は自分がシスターだから、勇者であるあいつと一緒にいるんだね」

クロードの声はとても静かだった。それはどうしてかもの悲しい響きを伴っていて、聞いていたリータの心にもトゲを刺した。しかし彼女はその動揺を決して悟らせまいと、明るい声とわざとらしい笑顔を男に向けた。

「そうですよ。当たり前じゃありませんか」

男はふっと笑みを浮かべると、それ以上何も言わなかった。その

表情があまりにも寂しげに見えて、リータも彼から視線を外した。

「本当にこっちで大丈夫なのか？」

後方で男二人がこそこそと話している声が聞こえてきた。

「さあな。ただここじゃコンパスも使えないし、俺らの方向感覚も怪しい。彼女はあっちが南の方向だと言っているし、ついていくしかないよ」

「……彼女、信用して良いものかね？」

「この中で森に一番慣れているのは間違いなくリータだよ。それに川沿いに歩くのは悪い選択じゃない。上流に進むなら前の湖にも出ないだろうし」

「何でだ？」

「……あの湖に森のこちらから注いでいる川はなかったと思う」

「ああ、そうだったかも……」

アルとクロードの会話を聞き流しつつ、リータはとにかく前へ歩みを進めていた。先導する彼女の後ろでは、先ほどから男二人が何やらヒソヒソと話していた。全ての会話が聞こえる訳ではないが、どうもクロードはリータのことを信用できないでいるようだ。当然だろうと彼女は思う。説明を聞いてあっさり納得したアルの方がおかしいくらいだ。

ふとリータは後ろを振り返った。途端に二人は声を潜めた。振り返ったのは彼らを咎めるためでなく、彼らの調子を見るためだ。一晩の休息で多少は体力を回復している彼らだったが、アルの顔は未だ青ざめたままだし、クロードに至っては槍を杖代わりにしている始末だった。リータがもう少しペースを落とすべきかもしれないと考えていると、不意に二人と目があった。彼女はニコリと笑って、再び前を見て歩き続けた。

どの位歩いた頃だったか。少なくとも男二人が話すのを止めて大分過ぎた頃、突然森が消えて視界が開けた。彼らの目の前には小さな泉が姿を現した。

「ここか？」

疲労の色を浮かべたアルが口を開いた。それは森の半ばにあったあの大きな湖とは比較にならないほど小さく、池と呼んで差し支えないものだった。

「湖、って感じじゃないな」

キョロキョロと辺りを見回してクロードも呟く。

「ここ、水が湧いてるみたいですね。それにまだ続いてます。ほら」

彼女が指さす先にはまた別の流れが続いていた。クロードはそれを見るとため息をついて泉のほとりに座り込んだ。

「ああ疲れた。少し休んでこうぜ」

「そうだな。……でもその前に、リータ」

「何ですか？」

振り向いたリータにアルは告げた。

「呪文、というのを試してもらえませんか？」

その声色は楽しげで、青白い顔にも興味津々といった表情が浮かんでいた。その横でクロードも興味深そうに彼女を見ていた。リータはアルの様子に内心呆れつつも、頷いて泉の方に向き直った。そして、母から聞いた奇妙な言葉を改めて思い返して、リータはそれを使おうとしている自分を後悔した。しかしもう後には引けない。彼女はすーっと息を吸い込んで叫んだ。

「ひーえふ、ぐーふーむ。いむどたーおきあーら。りーすへうあー、ふーのーおるとぷみす」

彼女の叫び声は森の中に消えていった。しばらく反応を待ってみたが結局何の返事が聞こえてくることもなかった。

「……ふ、ふふふ」
「ぶはははは！」
沈黙を破ったのはアルとクロードの笑い声だった。予測していたことだったが、リータは恥ずかしさに頬を赤く染めた。

21　軍人と商人

「元気そうで何よりです。ロゼッタ」
「あなたもね、ルカ。まだあれから数ヶ月も経ってないのに、もう何年も経ったような気がするよ」

襲撃の翌日、ルカはバスカヴィルの港の管理局から呼び出しを受けた。悪い予感を覚えつつ向かった管理局の一室で、ルカは自分の予測が悪い方に当たったことにウンザリした。
彼と対峙しているのは一人の女。女ながら軍服をまとい、腰には細身の剣を帯びていた。年の頃は彼より少し上で、背は彼より頭一つ低く、化粧をしてない顔は日焼けして凛々しい。
軍服を着た男が手に盆を持って部屋に入ってきた。彼は二人の前にカップを置くと、そのままロゼッタを見やった。
「ここはもう構わん。下がれ」
ロゼッタは男に軽く手を振った。彼女の手の動きに合わせて、後ろでくくられた赤茶色の髪が微かに揺れた。

ルカの船は襲撃後、無事バスカヴィルの都アスキスまで辿り着いた。怪我をした船員はすぐに運ばれて治療を受けた。幸いなことに彼は一命を取り留めた。
しかし、ルカに休んでいる暇はなかった。運河に現れた魔物の一件は、既に運河の管理局や船主達の噂になっていた。彼は自分の船の後始末を部下にまかせ、今回のトラブルについてあちこちで説明しなければならない羽目になった。

「それで、どのようなご用件でしょうか？」
彼女は勇者を捜索するためにこちらに来たはずだ。内に秘めた警戒感を隠しつつ、ルカは聞いた。

「何、魔物の件を聞きたいだけだ。本来ならバルディの私がここにいるのは色々問題があるんだが、魔物による船の襲撃という事態は捨て置けない。だから内々に許可を取って、君に話を聞かせてもらうことにした」

そのためだけに来たとは到底思えないとは考えつつ、ルカは魔物について手短に説明した。ロゼッタはそれを真剣なまなざしで聞き、時折メモを取った。

「ところで、船から三人降りたそうだな？　なぜだ」

ロゼッタは鋭い視線を投げかけた。しかもどうしてあんなところで？　と疑問を更に重ねてくる。

「一人が魔物の姿を見て発狂したんだ。それで船から降ろすよう暴れた。やむなく一時停船して彼を下ろした」

苦しい言い訳だとルカは思う。しかし、何とか押し通すしかない。

「彼は魔物を初めて見たんです。あの魔物はなかなか気分の悪い姿をしていましたよ。怯えている彼の目の前で別の部下が襲われました。そのせいでおかしくなってしまったんでしょう」

「しかし、それだけで……」

明らかに疑わしげなロゼッタに、ルカは声を潜めた。

「ここだけの話ですが、彼はこの間の戦争で色々ありましてね……少し精神を病んでいました」

ロゼッタは眉をひそめた。

「ご存じでしょう？　魔王が現れて以来、精神的におかしくなる者が増えました。戦場でそういう者をご覧になったことがないとは言わせません。……彼もその一人ですよ。療養させようと思っていたのですがね」

ルカの言葉に女は険しい表情で目を伏せた。彼女は腕を組み、何かを考え込んでいた。

「あとの二人は？　書類では逃げた男の妻と兄か」

「二人はバスカヴィルからわざわざ彼を迎えに来たんです。それがあんなことになり、二人も混乱していたんでしょうね。止めたので

すが結局彼を追いかけて行ってしまいました。そのうちまた魔物が襲ってきたので、我々はその場を離れるしかなく……」

ルカは苦しげな表情で訴えてみせた。これは哀れな男とその家族、そしてその悲劇を止められなかった自分の苦悩の物語である、と。

「なるほどな。まあ分かったよ」

ルカの話をしばらくの間考えた後、ロゼッタは口を開いた。その表情は憮然としたままだった。彼女はカップを手に取り、目を瞑ってそれを飲んだ。

「ところで、そろそろ堅苦しいのは止めにしないか？」

しばしの沈黙の後、女騎士は表情を少しだけ緩めて話を切り出した。

クロードはロゼッタを『堅苦しい』と表現するが、ルカはそれにあまり賛同していない。確かに彼女には堅いところがあって、戦場において部下に公平かつ厳しい態度で臨んでいたが、その態度は常に彼女自身に対しても常に一貫していた。ストイックな彼女をルカはそれほど嫌いではなかった。

ルカが頷くと、彼女は意外なことを口にした。

「店を畳んだそうだな。それでバスカヴィルへ行くとか」

ルカは心の中で舌を打った。こちらの事情はあらかた把握済みのようだ。

「ああ、モニカの故郷でやり直そうと思ってね」

彼女はルカの妻・モニカが切り盛りしていた店の常連だった。ロゼッタは店がなくなることを残念に思っていると話した。

「モニカは元気か？」

「ああ、今は向こうで店の開店準備を頼んでる」

「そうか、それなら良かった」

ロゼッタは店がなくなることとモニカと疎遠になってしまうことを心から残念に思っているようだった。その後しばらく二人は近況について雑談を交わした。彼女は当たり障りのない話をするばかり

で肝心なことは言わなかった。女の真意が分からず、ルカはいささか困惑した。

雑談が一段落ついて、部屋には自然な沈黙が訪れた。ロゼッタが自分に何かを話す気がないなら、これ以上時間を使う必要はないだろう。ルカはそう思って、女に対して暇を告げた。彼女は一瞬ためらった後、口を開いた。

「忙しいのにすまない。だが後少しだけ付き合ってくれないか？」

ロゼッタはそう切り出すと、これは極秘でどう話したらいいか分からないけど、と前置きして話を始めた。ルカは来た来たと内心思いつつ、何事かと身構えて見せた。

「陛下は魔王の復活を疑っておいでだ」

「何だって？」

ロゼッタの言葉にルカは眉をひそめた。魔獣の跋扈や魔物の襲来が意味するところ、それは確かに魔王の復活だ。しかし、彼には納得できない。

「……あの時、我々は確かに魔王を討ち取った。それは確認しただろう」

彼らは魔王の居室で血だまりに倒れているカルム王ダーヴィドを見た。アルに心臓を貫かれて絶命した男は、魔王だったとは思えないほどごく普通の人間、すらりとした体躯のただの壮年の男にしか見えなかった。

「確かに私達はカルム王の、魔王の死体を確認した。魔王の悪しき影響も一時的に消えた。でも、今はどうだ？　魔獣が大発生し、魔物まで現れた」

「つまり、魔王がまだ生きていると？」

「そうとしか思えない。それに」

ロゼッタは一旦言葉を切り、ためらいがちに続けた。

「……彼が討ったのは本当に魔王だったのだろうか」

「まさか」

そう言いつつも、彼は内心その可能性を否定しきれないと思った。ルカの脳裏に魔王の最期の表情が鮮やかに蘇る。奇妙なことにその顔は穏やかで、暴虐の限りを尽くした暴君の最期に似つかわしい表情ではなかった。それは幼い頃からすり込まれてきた『魔王』のイメージとは全く一致しなかった。

「しかし、もしそうだったとしてなぜアルがそれに気づかない？勇者には魔王が分かるんだろう？」

ロゼッタは途端に伏し目がちになり、口をつぐんだ。その様子に気づき、ルカは言葉をかけた。

「どうした？」

しかし彼女は答えない。しばらくの間黙って何かを考え込んだ後、ようやく重たい口を開いた。

「できれば怒らないで聞いてくれよ？」

「何だ」

ルカの答えに、ロゼッタはためらいがちに告げた。

「……陛下は、勇者と魔王がグルだったのではないか、と」

「そんな馬鹿な！」

ルカは怒りのあまり立ち上がった。それはアルだけでなく、魔王討伐に関わった全ての人間に対する侮辱でもあった。

「あの時、俺たちは皆命がけだった。覚えてるだろ？　皆死を覚悟して戦ってたし、実際何人も死んだ。クロードだって死にかけたんだぞ！　そんな中で、アルがそんな裏切りをするはずないだろう！？」

クロードは更に叫んだ。

「大体、あの戦争で何人死んだと思ってる！　上層部の無能共のおかげで、死ななくて良い兵達がどれだけ死んだか！　いたずらに戦線を伸ばした挙げ句、補給すらままならなくなって危うく餓死者まで出しかけて。君だって怒っていたじゃないか！」

「分かっている！　だから怒るなと言ったろ？　私だってこんな言

い分は納得できない。そんなことがあり得るはずがないのは、あの場にいた者なら誰だって知ってる！　だけど」

ロゼッタは唇を噛みしめ、悔しそうな表情を浮かべていた。ルカはそれを見て、彼女もまた同じ怒りを共有していることを悟った。彼は座り、テーブルの杯を一息にあおって気持ちを静めようとした。

「興奮してすまなかった。だが……」

「いいんだ。ただこれ以上は止めてくれ、君を逮捕などしたくないからな」

女は自嘲気味な顔で言った。ルカの発言は国王への侮辱とも取れるものだ。ロゼッタの立場なら、実際にこの場で彼を捕らえることも可能である。だが彼女はルカを捕らえる代わりに、まっすぐ彼を見てこう言った。

「だが、もし魔王が本当に復活したなら、我々は『勇者』を……女神の剣をもう一度振るわなければならない。だがアルは死んだ。それに……」

「何だ？」

ロゼッタは立ち上がってルカの隣に座った。そしてためらいがちに呟いた。

「これは絶対に秘密だぞ、ルカ。……剣が行方不明なんだ。王城での戦いの後、女神の剣は忽然と姿を消してしまった。私はそれを追っている」

「どういうことだ」

「私にも分からないんだ。だが、陛下から剣の極秘捜索を直接命じられた。いつ、なぜ剣が消えたのか、ろくな説明もないままな」

彼女はアルが生きていることも知らないように見えた。ルカは慎重に質問を選んだ。

「……あの襲撃の日のことは知らないのか？」

「私はあの日非番で家にいたんだ。事件を知ったのは翌日だったよ」

ロゼッタは自嘲気味に笑った。

「アルの……最期については？」
「多分、皆が知っている以上のことは知らない」
彼女は悲しげに目を反らした。その態度からは深い悲しみが感じられ、ルカにはロゼッタがアルのことを知っているようには思えなかった。
「よくその程度の理解でそんな難しい任務をする気になったな」
ルカの声に、彼女は話す代わりに深くため息をついて答えた。軍人である彼女にとって国王の命令は絶対だ。情報が少なかろうと与えられた任務はこなすしかない。彼女自身、色々と思うところがあるのだろう。ルカは宮仕えの辛さを思った。

「それにしても、そんなことを話して良かったのか？」
ルカの言葉に、ロゼッタは薄笑みを浮かべた。そして予想外のことを言い出した。
「そういえば、船から下りた三人。あれはバスカヴィルの人間じゃないだろ？」
「何を証拠に」
顔をしかめ語気を強めたルカに、ロゼッタは含み笑いを浮かべた。
「どうせ犯罪者かそんなものだろう？　バルディからバスカヴィルへ隠れて逃げようなんて連中にまともな奴はいない」
抗弁しようとするルカを制してロゼッタは言う。
「まあ昔のよしみだ。見逃してやる。だからその代わりに……」
ルカの表情がサッと変わった。
「まさか俺に手伝えと？」
女はニヤリと笑う。
「さすがに話が早い。情報収集を手伝ってくれ。それらしい剣の噂を集めるんだ。陛下は他国に女神の剣が渡るのは避けたいと仰った。教会にもだ」
「教会にも？」
ルカは困惑の声を上げた。勇者不在時の剣の管理は教会の役目だ

ったはずだ。それなのに、剣が教会へ渡ることを警戒するのは不自然に感じられた。

「さあな。多分紛失したことを表に出したくないんだろう」

女はつまらなそうにそう言うと、ルカに向き直った。

「さあどうする？　書類の偽造と無許可の出国は厳罰の対象だ。もちろん協力者、お前やその部下達も、場合によってはモニカだって」

ルカは言葉に詰まった。

「悪い取引じゃないと思うがな。王都で消えた剣が南に現れる可能性は低いだろうし」

「うん？　南の情報だけで良いのか？」

「ああ、北の方は……別の部隊が動いてるよ」

女は歯切れ悪そうに呟いた。そして更に話を聞き出そうとするルカを制するよう、彼の目を見つめて言った。

「もし何かあったら知らせてくれるだけでも構わない。……引き受けてくれるな？」

渋々とルカは頷いた。

さてと、と呟きながらロゼッタは立ち上がった。

「ご苦労だったな。もう戻っていいぞ」

「良いのか？」

「もちろんだ。私はオルコットに戻る。何かあったらここに連絡を」

彼女は折りたたんだ紙片をルカに渡した。彼はそれを受け取ると踵を返した。

「モニカにもよろしく伝えてくれ」

女騎士は軽く手を振って、部屋を出て行く男を見送った。

「よろしいのですか？」

ルカと入れ替わりに入ってきた男が問いかける。モニカは渋い表情で答えた。

「……監視は続けておけ」

部下が一礼して出て行くと、女は頬杖をついて深いため息をついた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6013w/

勇者に女神の祝福を

2011年12月17日07時57分発行